
沖つ国と竜の船

梶川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沖つ国と竜の船

【Zマーク】

N1350X

【作者名】

梶川

【あらすじ】

異世界に呼び出された中学生の少女志穂は、何も分からないま
その地で無惨な最期を迎えた。死靈と化した彼女は死靈術士を名乗
る青年と出会い、彼と共に旅をはじめるが……。海の彼方に死者を
運ぶという竜の船の伝承を巡る、幽靈少女と孤独な青年の物語。

プロローグ

いつの間にか見知らぬ場所に立つていると気付いてからこの方、一体何度「これは夢だ」と思ったことか、志穂にはもうよく分からぬ。

学校に登校しようとしていたはずなのに、黒いセーラー服を着たままで奇妙な絵が描かれた石床の上に立ち尽くしていたことも奇妙なら、その周囲に山ほどの人間がいて、とても日本人には見えない彼らが皆一様に志穂の方を見つめていることも奇妙だった。

おまけに老若男女を問わず歓喜の声を上げたり、涙ぐむ者まで続出していることなど、夢だと思わなければとても理解のしがたい、奇妙で奇怪な出来事である。

だが、それだけならまだ良かつた。

夢だとしても、人が何やら喜んでいる光景を見るというのは、そういう悪い夢ではない。

問題は、何度「これは夢だ」と念じても、一向にこの夢が覚める気配がないということだった。

群衆の中からかなり年老いた風の老人が進み出て、やはり涙ぐみながら志穂に向かつて意味不明な外国語で話しかけてきたので、とても困っていたのは確かだ。

けれども彼女の困惑を違うものに塗り替えたのは自覚めではなく、突然響いた悲鳴だった。

男のものか女のものかも判別できないほどの金切り声は、志穂を取り囲んでいる群衆の背後から聞こえてきたようだった。

悲鳴はすぐに怒号に代わり、また悲鳴と怒号が交錯した。訳の分からぬまま、志穂は狼狽した様子の老人に腕を引かれ、傍にいた幾人かの女性に囲まれて、その場から離れた。

右往左往する人々の間をすり抜けて、扉を潜り、見知らぬ建物の内部を駆ける。どこをどう走ったものか、息が切れそうになつた頃に、胸や腕に衝撃が走つた。

膝からその場に崩れ落ちた志穂と同じように、老人や女性たちもまた、地面に膝をついていた。中には顔から倒れ伏す者もいた。

志穂は立ち上がろうとしたが、足に力が入らなかつた。

不意に、視界がぱつと赤く染まつた。

それが血の色だと氣付くのに、随分時間が掛かつた。だが何故血が視界を赤く染め上げているのかということについては、志穂の理解の及ぶところではなかつた。

気付けば、彼女の身体は地面の上に横たわつていた。

視線の先では、赤く染まつた老人や女性たちが、志穂と似たような姿勢で倒れている。

(痛い)

呻こゝうとして、あまりの痛みにそれすらも叶わなかつた。志穂には分からなかつた。

どうしてセーラー服が赤く染まつてゐるのか、どうして身じろぎしようとするだけで呻くことすらできないほどの苦痛に襲われるのか、どうしてあの老人たちはあんなに赤く濡れていて、まるで壊れた人形のように動かないのか。

何一つ、志穂には理解できなかつた。

これが夢ならば、どうして未だに覚めないのか。

どれほど時間、堪え難い痛みと共にいただらう。何時間も経つているような氣もするし、ほんの一瞬でしかないような氣もした。強い血の臭いのせいで、嗅覚はすっかり麻痺してしまつてゐる。

つい先程まで、遠くから近くからひつきりなしに上がつていた悲鳴や怒号も、今はもう聞こえない。

視界は霞み、痛みに耐えて伸ばした手も虚しく空を切る。

周囲に倒れ伏した人々はもう起き上がらない。

夢は未だ覚める気配がない。

彼女に残っているのは、痛みだけ。

胸や腕に突き刺さつたいくつもの矢と、切り裂かれた腹がもたらす、苦痛だけだった。

……ふと、志穂は、誰かが自分の顔を覗き込んでいたことに気が付いた。

いつからそこにいたのだろう。

死体の散らばる空間にはまったく似つかわしくない、輝く月の光に似た金の髪に深い海のような青い目をした、美しい少年だった。その整った顔立ちは、まるで精緻な彫像のようだ。造形美、という言葉がこれほど似合う人間はこの世にいないのではないかとすら思える。

その美しい少年が、じつと志穂を見つめている。

一つの青い瞳の表面に、血塗れで倒れ伏すセーラー服の少女の姿が映り込んでいる。

(たすけて)

声を上げようとしても、喉から出るのは荒い呼吸ばかりだった。
(いたい……たすけて……)

それでも少女は少年に向かつて、必死に訴えかけようとした。助けてくれと。

こんなところで、こんな風に、死にたくない。
死にたくないのだと。

「

少年は何か哀れむような調子の言葉を、微笑みと共に呟いた。ぞつとするほどに美しく、邪氣のない微笑みだった。

微笑んだまま、彼は腰に吊るした剣を鞘から引き抜き、振り上げた。

鋭利な刃が白銀に光り、

(たすけ……)

体を貫いた衝撃と共に、少女の意識は闇へと落ちた。

第一話 廃墟

まじろみの中で、志穂は波の音を聞いていた。

固く閉じられた瞼に響くその音は、何故だかとても懐かしい感じがした。

と同時に、ひどく恐ろしい感じもする。

波音に誘われて向こう側に行つたが最後、打ち付ける波に足を取られ、海の底へと流れ沈んでしまった。そうだったから。

こちらにおいで、と波音が呼ぶ。

流れに身を委ねて。何もかも忘れて。

お前の在るべきといひ、安らげる場所は波間にしかないのだと告げている。

志穂は動けない。

それでも波音は、少女を誘つよつて鳴り響き続けている。
その音を振り払つて、目を開けた。

6

……目の前に人がいる。

肩幅からすると男性のようだ。継ぎ刃でだらけの外套に身を包み、こちらに向けた背を丸め、頑垂れながらその場に座り込んでいる。
その傍らには彼の所有物らしき白い杖と、革の包みが転がっていた。

細身の、しかし少女よりはずっと逞しいその背中をぼんやりと見つめながら、志穂は首を傾げた。自分がつい先程まで何をしていたのか、まったく思い出せなかつたのだ。まるで、今ちょうど目が覚めたばかりであるかのように。

そもそも自分とは何だったのつか、という根本的な点に思考が及びそうになつたとき、かすかな嘆息が耳に届いた。

「…………もはや……」

低く掠れた青年の声は、少女の目の前にいる人物から発せられたものらしかつた。

「一族も……竜も……父上、母上、俺はもう……」

ぱつりぱつりと呴かれる、断片的な言葉。

それを聞いていると、何故だろうか　声の主が抱いている感情が胸に直接流れ込んでくるようで、ひどく苦しくなる。

青年は深く絶望していた。

志穂には想像も及ばない、何かとても悲しい出来事に打ちのめされて、ただ一人孤独に嘆いていた。

「……あの」

堪らず、志穂は声をかけた。自分でもよく分からないが、これ以上彼を見ていられなかつたのだ。

少女の存在に気付いていなかつたのか、青年は驚いた様子で振り返つた。

乱雑に切られた短い黒髪。見開かれた目の色は紫で、肌はおそらく白い。彫りの深い顔立ちはとても日本人には見えないが、外国人の割には、先程の呴きはとても流暢な日本語だつた気がする。

日本語が通じるなら、まずははじめましてと言つべきだらうか。

いや、こんにちはの挨拶の方が先かもしれない。

声をかけたはいいものの、それからどうしていいか分からずに一瞬黙り込んでしまつた少女を、青年は少し困ったような目で見つめた。

少なくとも睨まれなかつたことに勇気づけられた志穂は、とにかく挨拶をしようと口を開こうとしたが、先手を打つたのは青年の方だった。

「ああ……まだ、残つていたのか」

彼はそう呴くなり、志穂の身長ほどもある長さの白い杖を手に取つて立ち上がると、その杖の先端を少女に向かたのだ。

「他の山の民　は皆、船出した。お前も早く後を追うがいい。俺

が手助けしてやるから」

志穂を見下ろす青年は無表情だったが、その口調は穢やかで、子供にやんわりと言い聞かせている保父さんのようでもあった。

だからいきなり杖を突きつけられても少しばかり驚いただけで、さほどの恐怖は感じなかつた。とはいえ、彼が何を言つてゐるのかちつとも理解できなかつたのは確かなので、志穂は返答することもできずに目を瞬かせるしかない。

「何か心残りがあるのか？　いや、こんなことになつたのだ、ないはずがないな。だが、お前も　山の民　なら、船出せずに死靈としてこちら側に残ることがいかに世界と魂にとつて危ういことか、よく知つてゐるだろ？」

山の民　。　船出。　死靈？

不吉な言葉が耳に入ったそのとき、脳裏を何かが掠めたような気がした。

その一瞬に感じたひどい悪寒を振り払つように、志穂はくつついていた上唇と下唇を引き剥がして口を開けた。

「あ、あの……よく分からぬけど、私、　山の民　なんていうのじゃない……です」

「何？」

青年は怪訝そうに眉をひそめた。しかしすぐに何事が考えるような顔をして、突きつけていた杖を下ろした。

「……いや、そうだな。確かにお前の姿は　山の民　のものとは少し違つてゐる。ならばお前は何者だ？　まさかアーフェルの民ではあるまい」

またよく分からぬ言葉が出た。

アーフェル、外国の地名だらうか。それなら少なくとも自分には関係ない。

志穂は首を横に振ると、とりあえず名乗ることにした。

「ええと……私は、岸辺志穂、です。日本人、です」

言つてから、こんなにも流暢な日本語を喋る外国人なら、少女が

日本人であることくらい分かるかもしれないと思つたが、青年はますます怪訝そうな顔になつた。

「キシベシホ？ それが名前なのか」

「えつ、あ、はい。岸辺が苗字で、志穂が名前で」

「シホ……」

真顔で名前を復唱され、志穂は少しばかり氣恥ずかしいような気分になつた。父や親戚以外の年上の男性に名前を呼び捨てにされたのは初めての経験かもしれない。

「二ホン人、といったか。二ホンというのがお前の国の人か？」

日本語を喋つていて、日本を知らないとはどうこうことだらう。疑問に思ったものの、口には出さずにこくりと頷く。

青年はしばらく考え込んでいたが、やがて得心したように顔を上げた。

「そうか……お前が、彼らの言つていたまれびとなのか」

柔らかな、けれどもどこか悲しそうな声だった。

「……まれびと？」

「この世とは理の異なる世界、大いなる巡りの輪の内側にある別の世界から来訪した客人のことだ」

その言葉の意味を志穂が十分に理解できないでいるうちに、青年は深くため息を吐いて続けた。

「まれびともまた異界の人ならば、魂もあつてしかるべき、か。」

「山の民 の人々はお前に申し訳ないと、すまないと言つて泣いていた。どうか彼らを憎まないでやってくれ」

「……憎む？」

きよとんとした志穂を見て、青年はまた息を吐いた。細めた目に哀れみの色を宿しながら、淡々と言つ。

「覚えていないか。お前は死んだ 殺されたのだ。おそらくは、この里を襲撃したアーフュルの騎士団の手によって」

ぽかんと口を開ける他に、一体どんな反応ができるだらうか。

この人は何を言つているのだろう、と首を傾げようとして、不意

に志穂は気が付いた。自分が今いる場所の状態について、視界に入つていたにも関わらず、まったく意識が及んでいなかつたことに。改めて見渡したそこは、一言で形容するなら、廃墟だつた。

元は石造りの建物だつたのだろう。中程から崩れた柱や、黒ずんだ石壁、やはり黒こげになつた燭台らしきものが見える。そのような残骸ばかりが転がる広い空間の真ん中に、石床のステージのようなものが設えてあつて、志穂と青年はその上に立つてゐるのだつた。その石床もところどころが崩れたり剥がれていたり、焦げて黒ずんでいたりで、ステージいっぱいに描かれた絵が何か判別することはもう不可能だ。

ちらりと頭上を見上げると、嘘のように清々しい青い空が見えた。天井が崩落した形跡はなさそつなので、元から吹き抜けになつているのかもしれない。

いや、ここは確かに吹き抜けの空間だつた、と志穂は不意に思つた。思い出した、と言うべきかもしれない。自分はこの廃墟の建物を以前にも一度見たことがあると。

「ここは儀式を行うための大切な場所だつたはずだ」
青年の声には、失われたものに対する哀悼の響きがある。

『あのとき』は夜だつた。

このステージの上には満天の星空が輝いていて、篝火が焚かれていて。

「だがアーフェルの騎士団はここを土足で踏み荒らし、鉄と血で汚した。……そして奴らは、死体も何もかもすべて焼き払つていつた……」

その瞬間、志穂の脳裏に鮮明な光景が浮かび上がつた。

奇妙な生き物が描かれた石床のステージの上。

歓喜する人々。

涙ぐむ老人。

突然の悲鳴。

赤い血。

堪え難い痛み。

美しい金髪の少年の微笑みと、そして 。

少女はその場にしゃがみ込み、顔を手のひらで覆った。

嘘だ、と掠れた声で呟いた気がする。
だって、死んだならどうして自分はここにいるところなのだろう。
どうして目の前の青年と会話を交わしているところなのだろう。
肩のところで切り揃えた髪も、手のひらに伝わる頬の熱も、セーラー服のスカートの皺だつて、生きていた頃とまったく変わらない
ように思えるのに。

体のどこにも、血や傷の痕跡なんて見当たらないのに。

あるいはこれはまだ夢なのだろうか？ 夢ならどんなに酷いことが起こっても、不条理でも仕方ない。夢の中でやがて夢を見る」ともあると聞いた。

夢ならばいつか目が覚める。

けれど 吐き気すらするあのぞましい記憶、矢で射抜かれた痛み、体を貫いた剣の生々しい衝撃、あれらのすべてが夢だとはどうしても思えなかつた。そう思い込むには、あまりにも生々しい記憶だつた。

不意に頭に手を置かれる感触がした。

しゃがんだまま恐る恐る見上げると、片膝を付いた姿勢の青年は、優しげな手つきで志穂の頭をゆっくりと一度だけ撫でた。

「辛いことを言つた。だが、事実だ。シホ、お前の肉体は死を迎え、魂は地上に留まって死靈と化したのだろう」

「……嘘」

「嘘ではない」

「じゃ、じゃあどうして、あなたと触れ合えるの？」

青年は少し氣まずそうな顔をした。問われたくない」とのようだ
つた。

だがあまりことを言つてしまつたかもしれないといつ引け田は、確証を求める心によつて打ち消された。志穂は言い募つた。

「わ、私、生きてます。死んでない。だつて喋れるし、透けてないし、それに……」

「……手を」

言つが否や、青年は志穂の手首を掴み、半ば強引に石床の表面へと引っ張つた。

呑き付けられる、と反射的に口を開じたものの、予想した衝撃はいつまで経つても感じられない。恐る恐る口を開けた志穂は、ひつと声を上げた。

白らの手首が、石床に半ば埋もれていた。

それはちょうど、砂場に掘つた穴に手を入れ、そこに砂をかけて埋めたときのようだつたが、無論、固そうな石床でそのような芸当ができるはずもない。

志穂の腕は、どう見ても、物語に出てくる幽霊のように透けてはいない。

だが、少なくとも今の自分は真つ当な人間には不可能なことのできる状態にあるのだと 恐怖に近い驚愕の中でのようやく彼女は理解しはじめた。

「驚かせてすまない。だが」つするのが一番手つ取り早いから

青年は弁解するように言つと、志穂の手を石床の中から引き上げてから、掴んでいた手首を離した。

そして白い杖を握り直し、軽く持ち上げた。

「この世界の事情のためにお前を呼び出し、無為に死なせたこと、船守の一族に連なるものとして心から詫びよつ。」の上はせめて、死靈として世を彷徨い魂を摩耗させることなく、安らかに船出してほしい……

青年の言葉は相変わらず難解だつたが、志穂にも一つだけ理解できることがあつた。

つまり、幽靈となつたらしい少女に大人しく成仏してほしいと言

つているのだ、彼は。

呆然と見上げる志穂の前で、青年は小さく何かを呴きはじめた。あまりにも小声なので詳しい内容は分からなかつたが、抑揚のない詩のようなそれはまるで呪文のようだ。

物語の中に出でてくる魔法使いは、杖を片手に呪文を唱えて不思議を起こす。

ならば彼は魔法使いなのだろうか。

哀れにも幽霊となつた娘の成仏を手伝うような魔法が使えて、その力で有り難くも志穂を成仏させてやろうと呪文を唱えているのだろうか。

果然としていた頭の中でその推測が形を成した途端、志穂は胸の内からふつふつと激しい感情が湧き上がるのを感じた。元々どちらかといえば大人しい性格で、ずっと平凡な日々を送ってきた十四歳の少女にとって、それは今まで滅多に感じたことのなかつた怒りだつた。

例え本当に自分が死んでしまつて幽霊になつたのだとしても、それでも志穂は今ここにいるのだ。それなのにこの青年は、死靈である志穂の存在すら消そうとしている。安らかに、などと優しげに言われて、到底納得のできるものではない。

衝動的な感情に突き動かされるまま、彼女はそれを行動で示した。跳ねるように立ち上ると、長々と呪文を唱えている青年が持つ杖に飛びついたのだ。

「な

杖の先端を抱え込むようにして、驚く青年の手から強引に奪い取る。杖はひんやりと硬く、長さの割に重みを感じなかつた。

男性の力で本気で抵抗されでは奪取は叶わなかつただろう。だが、青年にとつて少女の行動は完全に予想外だつたようで、志穂が奪つた杖を抱えたまま後ずさり距離を取つても、彼は呆然と彼女の行いを見ていた。

「勝手なこと言わないで！」

志穂は青年を睨み付けてそう叫んだ。

「死んだからって、幽靈だからって、そんなの関係ない！ 私はここにいるもの、ちゃんとここにいるんだから！ 消されたくないなんかない……！」

かなり甲高い声で喚いたはずだが、喉が苦しくなつたり、嗄れるようなことはなかつた。その事実の意味を意識の外へ追いやつて、志穂は杖を抱える腕に力を込めた。

青年の紫色の瞳と、志穂の瞳が真つ向からぶつかる。
やがて青年は目を伏せ、頭を垂れた。

「……すまない」

それどころか、その言葉には、疑いようのない真摯さが込められていた。

「山の民 でもアーフォルの民でもない、何も知らないまれびとの娘に、配慮のない振る舞いをした。せめて意志を問うべきだつた」「……聞かれても、私は、消えたくないって答えます」

それでも頑なな口調を崩せない志穂の答えに、青年は顔を上げると眉をひそめた。

「だが……死靈として彷徨うことは、死者にとつて決して幸せな道ではない。それは確かだ。ましてこの世界はお前の生まれた世界ではない」

「……でも、私、消えたくない」

志穂は駄々をこねる子供のように首を振った。

「消えたくない。帰りたい。……私のまま、家に帰りたい」

そう、志穂には帰るべき家があつた。会社員の父、主婦の母。ごく平凡で、何の変哲もなく穏やかで退屈で、時折うんざりすることもあつたあの家が、あの暮らしが、今は途方もなく懐かしく感じる。そんな少女をじつと見つめる青年が、彼女の言葉をビリビリ思つたかは定かではない。

ただ彼はしばらく考え込んだ後、小さく息を吐くと、

「……分かつた。お前の意志を無視して、船出を促すことには止めよ

「う

と呟つた。

「本当? ……あの変な呪文、もう唱えない?」

「ああ。お前に対しては、お前がそれを望まない限りは、「柔らかな口調の端々から、青年が志穂を気遣つてくれている」とが伝わる。

基本的には優しい人なのだ、と志穂は改めて思った。愛想の良い微笑みを投げかけてくれるわけでもないし、口にする言葉も少々説明不足だが、彼の眼差し、言動、動作にも少女に対する労りが感じられる。

志穂はみつともなく喚いたことを少し後悔した。強引に杖を奪つて、あんなに非難するような声を上げなくとも、もつ少し抗議のやり方があつたかもしれない。

「シホ、そろそろその杖を返してくれないか。それは母の形見なんだ

そう言われて、志穂は慌てて杖を差し出した。まさかそんなに大切なものだったとは。

杖を受け取つたとき、青年は何やら顔をしかめた。

「……参つたな。これに憑いたか

「え? 「

「いや……」

青年は眉間に皺を寄せ、また何か考え込みはじめた。

そうして険しい表情で黙られると、青年の顔は少し怖く見える。何せ志穂よりも年上の、見慣れない異国の風貌の男性だ。こんなよく分からぬ状況でなければ、こうやって会話を交わすこともなかつただろう。そう考へると、この夢のような状況がますます不思議に感じられた。

「シホ。お前は家に帰りたいと言つたな

問いかこくりと頷くと、青年は真剣な面持ちで志穂を見据えた。

「この世界とまれびとの世界の繋がりがどうなつていてるか、俺もよ

くは知らない。お前を呼び出した 山の民 たちとて、多大な苦労の末、一方通行の門をどうにか開いて呼び寄せたに過ぎない」

「……」

「だが……まれびとは本来、海のかなた、 果て の向こうからやつてくる存在なのだという」

言葉の意味を掴みかねて志穂は首を傾げた。

「 果て …… 海 …… ?」

「 そう。アーフェルの西端、カイの海辺から遙か沖合、この世の果て と呼ばれる場所」

志穂は相変わらず分かりにくく青年の言動の意図を、じつくりと咀嚼するように考えた。

今までの会話を総合すると、ここには志穂の暮らしていた世界ではないらしい。

まつたく別の、物語に出てくるような世界で、志穂はここではまれびとと呼ばれる存在なのだ。

何故言葉が通じるのかなど色々と疑問はあるし、容易には信じがたいことだが、自分が死んで幽霊になってしまったなどといふ事実よりは、まだ受け入れやすい話もある。それに少なくとも、ここが日本の自宅の近くではないことは確かだつた。

やがて彼女は淡い期待を込めて訊ねた。

「 …… その 果て の、向こうに行けば、帰れるかもしない?」

「 保証はできない。どうにもならない可能性も高いから、あまり期待はしないでほしい。だが、俺に提供できる手掛かりはこれくらいだ」

「 果て に行つたことはある?」

「 行つたことはないが、道は知っている」

青年の答えは正直だ。

彼を信じてみよう、と志穂は思った。

消えたくない、帰りたいと喚いたところで、元より見知らぬこの土地で行く当てもない。蠟燭の火よりもか細い望みであつても、今

はそれに縋るしかなかつた。

「……私、その 果て 行きたい」

志穂ははつきりとその意志を口にした。

無事に故郷に帰れたとして、既に死んでいるかもしない身でどうするのか、その点について彼女はあえて考えなかつた。帰ればきっとすべてが解決してめでたしめでたしになると、そう思つていたわけではないにしろ、このときの彼女はただ、帰りたいといつ強い欲求だけに突き動かされていた。

少女の返答を聞いて、青年はわずかに、本当にほんのわずかにだが、唇の端に微笑みを浮かべた。

「ならば契約を交わそう。シホ、俺はお前を必ず 果て まで連れて行く。お前はそれまで、なるべく俺から離れることなく付いてきてほしい」

それは契約と呼べるのだろうかと、中学生の志穂でも疑問に感じるところだった。わざわざ付いてくれなどと頼まれなくて、志穂は青年に付いていくしかないのに。

「付いていくだけでいいの？」

「ああ」

「他に何か……、思いつかないけど、何かしなくともいいの？」

「いや。お前のようなか弱い娘に、代償を求めるほど無体ではないし、困つてもいない。しいて言うなら、俺が何か忠告したときは、少し耳を傾けてくれると助かるが」

志穂は内心で少し赤面する思いだった。親切に申し出てくれた人にわざわざ代償のことを訊ねるのは、かなり失礼な振る舞いだったかもしけれない。

第一、ただの中学生の娘にできることなどたかが知れている。

「気にするな。付いてくると約束してくれるだけで、俺にとつては十分だ。この杖に取り憑いたまま、どこかに行かれると困るからな」

どういう意味かときよとんとする志穂に対し、青年は肩をすくめるだけですぐには答えなかつた。彼はしばらく考える素振りを見せ

てから、

「……死靈は概して曖昧な存在だ」

「と、そんなことを口にした。

「故に彼らの多くは、せめてもの宿り木を得ようと/orして、何かしら実体のあるものに取り憑く。土地、人、思い出の品……多くは死者が生前執着していたものだが、時に例外もある。まれびとであり、この世に縁を持たないお前なら、尚更だな」

「ええと……」

彼が何を言わんとしているのか、志穂にはさっぱり分からぬ。

「つまり、お前はあのとき強い意志と共にこの杖を抱え込むことで、俺の杖に取り憑いた形になつたのだ。自覚はないようだが」

どういつ反応を示せばいいのか、志穂は本当に分からなかつた。

自分が死靈、幽靈と呼ばれる存在であることも、まだ受け止めきれていないのだ。急に取り憑くなど言われても困る。何だか本当に、物語の幽靈みたいではないか。

「そうそう取り憑く対象は変えられない」と思つ。お前はしばらく、この杖から離れて遠くへ行くことはできないだろ。俺は形見を捨てる気はないから、どうしたってお前と共に行くほかない。……どうせ俺にはもう行く当てはないし、道案内でも目的ができるのは嬉しい」

利害の一一致だ、と青年は至つて真面目な顔つきで言つ。

「えつと、それなら……ありがとうございます。よろしくお願ひします」

志穂がおずおずと礼を言つと、青年は軽く頷いた。

「他に何か質問はあるか？ 俺はあまり気が利かないし、言葉も足りないとよく言われる。お前もこの世界のことはよく知らないだろう」

確かに色々と疑問はある。彼が今まで口にした数々の言葉だけで、説明が欲しいものはいくつもあった。

しかし、志穂はそれよりも、一番大切だと思われる問いを選んで口にした。

「あの、あなたの名前は？」

青年は少し驚いたように田を瞪ると、すぐに苦笑した。

「……肝心なことを忘れていたな。俺はラダとこつ」

「ラダ、さん？」

「ラダでいい。丁寧な言葉もいらない」

そう言つと、青年はふと無表情に戻つて、こう続けた。

「人は俺を死靈術士と呼んでいる。死靈たちを時に使役し、時にその魂を鎮め、あるいは災いを呼び寄せる忌むべきものだと」

物騒な言葉が冗談なのか本気なのか、それとも皮肉なのか判別できずに志穂がまごついていりつちに、ラダは脇に置いてあつた荷物を背負うと、急に歩き出した。

志穂は慌ててラダの後を追おうと足を動かし、石床の上を駆ける。石床が途切れで段差になつている箇所に気付いたときには、もう勢いよく足を下ろしてしまつっていた。

しかし志穂は転ばなかつた。傾くことすらなかつた。

何故なら志穂の足は、危ないと思つた瞬間、ぴたりとその場に止まつたのだから。

段の表面よりやや高い位置、何もない空中で、重力の何の抵抗もなく。

つまりは片足で空中の見えない段を踏みしめた格好のまま、無様に硬直してしまつた志穂に気付き、ラダが踵を返して戻ってきた。

彼は少しため息を吐くと、混乱と恐怖がない交ぜになつた田で青年を見上げた志穂の手を取り、やんわりと引つ張つた。

自然、つられて足を前に動かさなくてはならなくなる。

いや、もしかしたら足なんて動かす必要もなく、その気になればふわふわと宙に浮いて移動できるのかもしれない。ただ十四年生きて培つた常識が、歩くという動作を捨てきれずにいたのだった。とはいえ忙しく動かしているつもりの自分の足が今ちゃんと地

に着いているのか、それとも宙に浮いているのか、はたまた先程のように地面に半ば埋もれていたりするのか、足元を見て確かめるのは怖い。だから志穂は前を行く青年の背に負われた革の荷物や、視界の両端を流れていく周囲の光景、そして繋がれた手から感じる青年の体温や、骨張った冷たい指先の感触に意識を向けた。

(……これも、錯覚なのかな)

石床にきちんと両足をくつつけて立っているという認識が思い込みであったように、手から伝わるこの暖かさも、勘違いに過ぎないのだろうか。

青年と少女は手を繋いだまま、石の廃墟の外へ出た。

廃墟のすぐ傍には広場と思しき空間があつたが、何故か黒ずんだ薪の燃え残りが散らばり、広場の中央の地面は奇妙に盛り上がっている。

ラダはその盛り上がった地面を避けて進んだ。

広場の先に広がっているのも、やはり廃墟と化した家屋が連なる無惨な光景だった。

家屋はほとんどが木造で、石造りの建物は先程まで一人がいたあの広い建物だけのようだ。家屋は例外なく黒こげで、打ち壊され、往時の姿を想像する余地もないほど原型を留めていないものもかなり存在した。

そこかしこから、まだ細い煙が立ち上っている。

焼け残った家の壁に、矢が突き刺さっているのも見える。それも一本や一本ではない。

土を固めただけの道端に落ちている刃の破片らしきもの、その表面に赤黒い染みが散らばっているのに気付いて、志穂はぞつとした。ここにはかつて、小さな村があつたのだろう。

狭い土地の中で寄り添い合うように、ささやかな規模の家々が立ち並び、そこで多くの人々がささやかな生活を営んでいたに違ない。

「どうして……」

それ以上言葉を続けられず、志穂は口をつぐんだ。

テレビの中の映像でなら、遠い外国で起きた紛争の光景を見たことは幾度かある。それを見て、可哀相にとか、どうして戦争はなくならないんだろうとか、そういう他人事めいた同情心は抱いても、自分自身がそのような場所に身を置くことなど考えもしなかつた。

しかし今、志穂は、明らかに焼き討ちに遭った村の真ん中にある。ここに暮らしていた人々は、石床の上で畠然と立ち尽くしていた志穂を歓喜の声で迎えた人々、大仰に涙ぐんでいた人々は、もういない。

ここにいるのは、死靈になってしまった志穂と、親切な黒髪の青年だけ。

「……アーフェルという国は、従わぬ民に容赦しない。近頃は特にそうだ。山の民は迫害を逃れてこの山里に長く住みついていたが、どうとう彼らもこんなことになってしまった」

心なしか青年の声も暗い。

アーフェル。それがこの村に惨劇をもたらした存在の名。おぞましい記憶の中で最後に目にした、あの金髪の美しい少年の顔が浮かんで消える。

正直なところ、自分を取り囲む様々なことにまだ実感が湧かない。だから胸の奥の奥で渦巻くようなこの感情を、恐怖と呼ぶべきか、それとも怒り、あるいは憎しみと言い表すべきなのか、志穂には答えが出せなかつた。

やがて二人は、村の入り口まで行き着いた。

村はぐるりと石垣で囲まれているらしく、その切れ目のことじゅう、小さな石の門らしきものが設けられている。

アーチ状の石の門には、下から上まで隙間なく彫刻が施されていた。

門柱に絡みつくような格好で彫られたその生き物は、一見すると蛇のようだ。しかしちゃんと前足があり、後ろ足があり、背には翼らしきものまで生えていたので、少なくとも蛇ではないのだろう。

「竜だ」

ラダは簡潔にそう言つて、それ以上を言わなかつた。

門の『竜』は、鱗に覆われたうねうねと長い胴体や尾を持ち、背中には蝙蝠に似た翼を生やしていた。その翼はざつと数えただけでも五対はあつた。

彫刻を見上げていた志穂は、不意にある光景を思い出した。

「あの、石床のステージに描いてあつた絵……」

ひどく抽象的な描き方だったの、初めて見たときは何か生き物が描かれているらしいということしか分からなかつた。だが今思い返してみると、長い胴や数多い翼など、形がこの彫刻の竜によく似ている気がする。

「祭壇のことなら、あれも竜を描いたものだと思ひ」

ラダは断言しなかつた。彼もすべてを知つてゐるわけではないらしい、と思つてから、志穂は違和感に首を傾げた。

ここに暮らしていたのは、山の民。青年の口ぶりからすると、彼は山の民ではないらしい。おそらく、この村が襲撃に遭い、村人たちが死んでしまつて、犯人であるアーフェルの騎士団とやらも引き上げた後にやつてきた。そんなところだらうか。

しかしラダは、山の民やこの村のことにについて、ある程度の知識を持つてゐるようだ。村人ではなくても、親戚か何かで、以前から出入りしていたのだろうか。確か彼は先程、一族がどうのと言つていた気がする。

だから、彼はあんなに絶望していたのだろうか。

ラダの声を最初に聞いたときのあの胸の苦しさを思い出し、志穂はなんともいえない気分になつた。

「まれびと、来たりて、竜を呼ぶ……か

不意にラダが何か呟いた。

志穂が首を傾げて見上げると、彼はまるで血潮するように脣の端を歪ませ、静かに首を横に振つた。

「いや。…………そろそろ行こ」

促され、志穂は竜の胴体の下を通り、門を潜り抜けた。

その先は、切り株だらけの荒涼とした風景がしばらく続いている。

大勢が踏み荒らした形跡のある小道を傾斜に沿つて下つていくと、やつと山らしい、緑の濃い木々の連なりが見えた。

ラダは最後に一度だけ、遠くなつた村の方を振り返つた。

そのとき彼が口の中で呟いていたのは、惜別の言葉か、それとも祈りの言葉だったのだろうか。

志穂は問うことなく、ただ暖かな感触にすがるように、繋いだ手を握り返した。

第一話 旅路

自分が死者であり、幽霊、死靈と呼ばれる類の存在であると認めるのは、そう容易いことではなかつた。

いつそ自分の死体を目の当たりにすれば、はつきりと自覚できたのかもしれない。

だが、襲撃で死んだ人々の死体は、騎士団の手によつて纏めて焼かれ、乱暴に埋められてしまつたのだそつだ。わずかに残された骨や亡骸の断片も、集落の人々の靈を『船出』させる傍ら、ラダが土に埋めたといつ。

死んでから死靈としての意識が覚醒するまでのタイムラグはまああることだ、という意味合いのことを、青年は淡々と説明した。出会つて間もない志穂には、その淡白さがはたして演技なのかどうか、読み取ることは叶わなかつたが。

ともあれ少なくとも、今の自分がいわゆる靈体の身であることはもはや疑いようのない事実だつた。

事実を受け入れても、その在り方に慣れるにはまた困難が伴う。どういう訳か、志穂はラダとなら手を握り合えるし、彼の白い杖にも触れられる。

だが他のものはそろはいかなかつた。木に触ろうとしても志穂の手は木肌に埋もれてしまい、木立の合間に飛び交う虫は平氣で志穂の胸の辺りをすり抜けて飛んでいく。

少しよそ見をしたために前方に迫る太い木の幹に気付かず、真っ向からぶつかつて、するりと全身何事もなく通り抜けてしまつたことは、何ともぞつとする体験だつた。何の痛みも感触もなかつたことが、また氣味の悪さに拍車を掛ける。

心細さのあまり、山から降りるまでずっと、志穂はラダと手を繋いだままでいた。

中学生にもなつて、年上の男性と子供のように手を繋ぐのは少し

恥ずかしいことである。しかしそれ以上に、今の自分が恐ろしく頼りない存在であること、おまけに知らない土地、慣れない山の中を進むことへの不安の方が勝った。

「そう怯えるな」

ラダはそう志穂を気遣うように言った。

「今のお前は木の根に蹴躡くことはないし、獸に噛み付かれることもない。もう、危害を加えられる心配はないのだから、気楽にしていればいい。むしろあまり意識しすぎる方が害になる」

そう言われても、怖いものは怖いのだ。縋るもの ラダが傍にいなければ、とてもこんな状態でこんな山の中を彷徨おうとは思えない。

ラダは何故か山道を通らず、獸も通らないのではないかと思うようなどろばかりを選んで進んでいるようだったが、それでも一人よりはずっとましに思えた。

そうして山を下る間に、地面の少し上の空中を歩くことくらいなら、どうにか慣れることができた。

何せしつかり地面に足を付けて歩こうにも、進む先にあるのは急な斜面や岩場ばかりで、平坦な箇所でも土を這う木の根が邪魔をする。見えない階段があるのだと思つて宙を歩いた方が、ずっと気楽だといふことに早々に気付かされたのだ。とはいひわゆる幽靈らしく、空高くふわふわと飛ぶような真似は挑戦する氣にもなれなかつたが。

山里から山の麓まで、一体何時間かかつたかはよく分からぬ。周囲から木々の姿が少くなり、志穂の怯えと緊張が緩和される頃には、もう日が暮れかかっていた。

麓といつても、山の中と同じく人気はなく、裾野の向こうに広がるのは荒涼とした荒れ地だった。夕暮れの光がその荒れた大地の上を赤く染め、志穂たちのいる麓の方まで照らし出している。

「……今日のところは、ここで休むとするか

ラダは志穂と繋いでいた手を離すと、背負っていた荷物を下ろし、中から小袋を取り出した。小袋の中身はビスケットに似た保存食で、彼はそれを数枚噉ると、革の水筒から水をいくらか飲んだ。山中を流れていた清流で汲んでいた水だ。

そして地べたに外套を広げてその上に横たわり、片腕にあの白い杖を抱え、そのまま目を閉じて寝入ってしまった。

あまりの早さに、志穂は少々呆然としてしまった。

普通、こういうときには焚き火をしたり、テントを張つたり、せめてもっと分厚い布にくるまつたりして休むものではないのだろうか。

地面はかるうじて平らだが、石混じりでじりじりとしていて、お世辞にも寝るのに相応しい場所とは言えない。

「あの……ラダさん？」

「何だ」

恐る恐る声を掛けると、ラダは目を瞑つたまま返事をした。寝てしまつたかと思ったが、まださすがに起きていたようだ。

「えつと、なんていうか、このまま朝まで休むのかなって……」

「夜明け前には起きる。不安なら俺の傍にいて、もし何かあつたら叩き起こしてくれ。それと、ラダでいい」

志穂は一の句が継げず、横たわるラダを見下ろしてほとんど途方に暮れた。そのうちかすかに寝息が聞こえはじめると、諦めの気持ちが勝ちはじめて、彼女はため息を吐いた。

ラダが親切な青年であることは確かだ。

しかし、どうにも突拍子のないところがあるのも、また確かにようだつた。

彼の真似をして地面に横たわることは憚られたので、志穂は言われた通りに青年の傍に座り込んだ。

改めて観察するように、元の青年の異国的な横顔をまじまじと見つめる。

ちゃんと血の気が通つてゐるのか心配になるほど白い顔だった。

だが色の白さを除けば、あまりひ弱な印象は見られない。現に青年の体は志穂よりずっと大きく、逞しかつた。細身ではあるが華奢といふほどではなく、むしろ引き締まっている感じがある。

だからこそ、色白を通り越して青白いくらいの肌が不釣り合いで、奇妙に感じる。

こんな野天で一夜を過ごして、風邪を引いたりしないのだろうか。とはいえた人が平然と寝息を立てているのに、会つたばかりの娘が変な心配をするというのも、それはそれで大きなお世話かもしれない。

右手を見上げれば深緑の木々に覆われた山がそびえ、左手を見れば荒れ地が続いている。

地平線の彼方にはもう既に太陽の姿は見当たらず、わずかな残照が暗くなりかけた空の端を青紫に染め上げていた。ささやかに輝きはじめている白い点は、一番星だろうか。

まったく見知らぬこの世界にも、太陽や月があり、昼と夜があり、地平線が存在する。

青空と夜空があり、日が沈めば星が瞬く。

それがなんだかとても不思議なことのように感じられた。

(……でも、ここは私の世界じゃないんだ)

志穂は自身の膝を抱え込んだ。どれだけ似ていても、ここは日本ではない。地球ですらないらしい。彼女の生まれたところではないのだ。

(お母さん。お父さん……)

口の中で両親を呼ぶ。

この世界に来る直前のことはよく覚えていないが、セーラー服を着て学校に行こうとしていたような記憶はある。学校に行つたはずの娘がいつまで経つても帰つてこないとなれば、さぞかし心配していることだろう。

祖父母、親戚、幼稚園からの付き合いの友人たち、学校の同級生たち。一人一人の顔を思い浮かべる。慣れ親しんだ記憶であるはず

なのに、この見知らぬ土地で、知り合つたばかりの青年の傍で思い浮かべると、どうしてか違和感が拭えなかつた。

やがて夜が訪れ、深い闇が周囲を包み込む。

志穂は目を閉じ、膝を抱える腕に力を込めた。そして目を開くと、むつ窓の端が白みはじめていた。

まだ空の大半は暗かつたが、つい先程まで夕刻だつたはずなのに、明らかに夜明けが近付いていた。幽靈でもその気になれば眠ることができるのでどうか、と志穂が首を捻つて、ラダがのそりと身を起こした。

「あ……お、おはよ」

とつさに志穂が口にした挨拶を聞いて、青年は虚を突かれたように瞬きをした。

そしてすぐに得心したように頷き、

「ああ。おはよう、シホ」と、挨拶を返した。

ラダは身支度を調えると、やはりビスケットのようなものを数枚と水筒の水を一口飲んだ。そして荷物を背負つて立ち上がり、自然な仕草で志穂に向かつて手を差し出した。

「行こう。また手を繋ぐか？」

志穂は少し顔を赤らめて、ふるふると首を横に振つた。昨日の子供っぽい振る舞いを思い返してみると、なんだか今更恥ずかしくなる。

そうかとラダは気分を害した様子もなく頷き、

「では付いてきてくれ。一人で勝手にどこかに行かないよ」「だけ言つと、荒れ地の中へと踏み出した。

『ごろごろ』と小石が転がり、枯れ草や貧相な灌木が時折生えているだけの荒れ地を進むのは、山を下るよりはずつと楽だつた。

荒れ地をしばらく進むと、やがて遠くに集落の影らしきものが見

えてきた。

「シホ」

不意にラダが振り返り、真剣な口調で言った。

「この先、人の目のある場所に出てからは、お前に質問をされてもすぐには答えられないかもしない。無視する形になることも多いかも知れないが、容赦してくれ」

その言葉の意味を深く考へることなく、志穂はこくりと頷いた。
しばらくして、ラダと志穂は集落の中に足を踏み入れた。
随分と小さな村だった。村の周囲に広がる畑がなければ、あの山里よりもさらに狭いかもしない。農家らしい藁葺き屋根で、木造と石積みが混ざった建物はほとんどが古く、ぼろぼろで、風雨に褪せていた。

村のつくりに日本やアジアを思わせるものはまったくなかつた。
どちらかといえば、何百年も前の古いヨーロッパの農村、といった雰囲気だ。

村人の髪の色はほとんどがくすんだ金や茶、あるいは赤毛で、肌の色も白い。といつてもラダほど白い肌を持つ者はいないようだつたが。

そんな中に、ぽつんと一人、セーラー服を着た日本人の少女がいる。

我ながら場違いすぎで、身の置き所がないとはこのことだと志穂は思った。

村人はやつてきた訪問者に対しても少し興味深そうな視線を向けていたが、ラダは気に留めた様子もなく黙々と進み、村の一隅にある建物の中に入つていつた。志穂も慌ててその後に続く。

中は薄暗く、昼間とはいえ明かりの一つも灯されていなかつた。
木箱が雑然と並べられ、入り口の付近には背中を丸めた老爺が座つている。彼はラダを見上げて、おや、と意外そうに呟いた。

「無事だったのかい。山はどうだつたかね、物好きな旅の人」

老爺の言葉に対し、ラダは無表情で首を横に振つた。

「あなたが言つた通りだつたな。もう、……何もなかつた」

「そうだろう。聖ユオル騎士団が通つた後は、草の根すら残らない」という話だからね」「

聖ユオル騎士団。志穂は胸のうちでその言葉を繰り返した。それが、あの惨劇を引き起こしたアーフェルという国の騎士団の名前なのだろうか。

物語に出てくる騎士は、大抵が立派な甲冑を着て馬に跨り、正々堂々と戦う人たちだつたが、その聖ユオル騎士団というのはきらびやかな名前に反して、イメージとはまったくかけ離れた人々のようだ。

「そこへわざわざ行こうとするなんて、死に行くのも同然さ。よく無事だつたものだよ、あんたも。ちょうど入れ違いになつたのかい？」

「……そういうし。俺が山を登ろうとしたとき、騎士団の一隊が別の山道から降りてくるのを見た」

運の良いことだ、と老爺は笑つた。

「あの山の連中もね、よく分からぬ神を信仰してる、おかしな連中だつたよ。お国から隠れただがつて、税もろくに払つてなかつたようだし、討伐されたつてまあ仕方ないやね」

他人事のように言う老爺の言葉に、志穂は怒りを感じた。

山里の人々がどういつた人々であったのか、志穂は知らない。だが、彼らが例えどんな罪人であったとしても、あんなあんな無惨に殺され、村ごと焼き払われなければいけない道理があるだろうか。

この老人があの凄惨な現場を見ていても、彼はどうやら騎士団の非道さについては知つてゐるらしい。それなら、山の民がどんな運命を辿つたのか、わずかなりとも想像がつくだろう。

「何もそんな言い方しなくとも

志穂は思わず口を挟んだ。

しかし、老爺から反応が返つてくることはなかつた。無視された

のですらない。老爺は端から志穂の声が聞こえなかつたかのようだ、ただラダの方だけを見上げていた。

数瞬遅れてその理由を悟り、愕然とする。

元の世界では幽靈など見たこともなかつた。そして今の自分は、木の幹も透けて通るような死靈の身。ならば志穂が見えない人間がいてもおかしくない。

考えてみれば当然のことだ。ラダとごく自然に会話し、触れ合うことができたので、そういう可能性があることをすっかり失念していた。

「……この村は、山の民 と多少の交流があつたのだろう?」

志穂が呆然としている横で、ラダは淡々と訊ねている。

「ああ……まあ、ね。けど材木やら、木工細工やらと、作物を交換するくらいだ。連中的方が閉鎖的だから、交流というほどでもないよ」

老爺はやや気まずげに、言い訳するような口調で言つた。

「仲良くしてたら騎士団の奴らと一緒に焼かれてもおかしくなかつたし、仲良くしなくて正解だったがね」

ラダは老爺に反論しなかつた。

彼は曖昧に領きを返すと、話題を変え、食糧をいくらか買い求めたいといつづのことと言つた。その言葉で気付いたが、どうやらここは商店だつたらしい。

両手で抱えられる程度の袋を一つ受け取つたラダは、それを荷物に仕舞うと、店を後にした。

彼は志穂が後をついているかどうか確かめる素振りも見せず、足早に村を出た。畠の合間の道をどんどん進んでいくラダの背中を、志穂は必死に追いかけた。

しばらく行くと、石で舗装された広い道に出た。

「この道を行くの?」

志穂の問いに、ラダはまたしても無言だった。

先程ラダに言われたことも半ば忘れて、志穂は不安になつた。あ

まりにもこれまでの青年の態度と違うので、彼は少女が道連れになつたことを忘れてしまつたのだろうかとさえ思つた。

それが思い過ごしだと氣付いたのは、人気のない石畳の道をしばらく進んでからのことだつた。不意に歩を緩めた青年は、周囲に人がいないことを確かめるように辺りを見回してから、ようやく志穂の目をまっすぐに見下ろしたのだ。

「……この街道は、西の商都エテルベリから王都リラ、そして沿岸地域まで続いている」

その唐突な言葉が、先程の志穂の問いに答えるものであるということを理解するのに、いたしか時間が必要だつた。

「街道？」

それではこの道に沿つてずっと西に進めば、果てに辿り着けるのだろうか。

「そう。反対に行けば隣国に出られる。この国でも、五指に入るほど重要な道のはずだ」

「……その割には、なんだか……人がいなくて寂しいね」

街道の周囲を見回しながらそう言つと、青年は苦笑した。

「聖ユオル騎士団が通つたせいだろ。彼らは民に恐れられている。うつかり出くわして巻き込まれないようになると、商人や旅人たちは迂回路へ向かつたのだろうな」

「聖ユオル騎士団……」

確かに、先程の老爺も騎士団を恐れているような口ぶりだつた。

「……その人たちって、あんなことを、各地で引き起こしているの？」

志穂は躊躇いながらも訊ねずにはいられなかつた。

村を焼き払い、女性も老人も構わず殺して、誰一人逃さないそんな真似をあちこちで行い、そのために恐れられているのだとしたら、非道どころの話ではない。

「……騎士団の主たる任務は、盗賊や不平分子の討伐、反乱の鎮圧だ。その対象には國に従わない民も含まれる。その後には灰燼か、

でなければ死体の山だけが残される、というもつぱらの風評だが」

ラダは無表情に戻つて、淡々と答えた。

「もう何日かすれば、街道も賑わいを取り戻すだろう。……そうなれば、道々こうしてシホと会話を交わすことはあまりできなくなる。すまないが……」

志穂は、自分よりもずっと高い位置にある青年の顔を振り仰いだ。村に入る前にも言われたのと同じ意味合いの言葉。だが、今なら青年の意図するところが分かる気がする。

死靈である志穂の姿は、おそらく普通の人間の目には見えない。声も届かない。

見えないものと白昼堂々、会話を交わすわけにはいかないということなのだろう。下手をすればラダは、何もないところに話しかける頭のおかしな人物と見られてしまう。

さすがに自分のために変人扱いされ、などと要求することはとてもできない。

だから志穂は大人しく頷いた。

胸に宿るほんのかすかな寂しさを押し殺して。

第二話 死靈の在り方

数日が過ぎ、街道に人が増えてくるにつれ、青年は宣言通り恐ろしく寡黙になつた。

まるで傍にいる志穂が見えていないかのように、視線すらほとんど寄越さず、白い杖を片手に黙々と歩いている。

仕方のないこととはいえ、喋れない相手と並んで歩くのは少々退屈で、寂しかつた。油断すると、ラダと自分の立場も忘れて話しかけてしまいそうになり、慌てて口をつぐむこともしばしばである。

そんな道行きの中で、自分がまったく疲労を感じていることに気付いたのは、ラダが額に滲んだ汗を拭いながら息を吐くのを見たときだつた。

そういうえば先日から何も口にしていないのに、空腹や喉の渴きを感じない。

よくよく意識してみれば、暑さ寒さという感覚もなかつた。

夜になつても空氣はぬるま湯のようにしか感じられず、花の匂いも意識して嗅がなければ分からぬ。ラダの外套が風ではためくのを見てやつと、この場に風が吹いていることに気付ける。

田の前の景色がまるでテレビの中の映像のように、ただただ通り過ぎていく奇妙さ。

ラダは黙々と旅慣れた様子で、朝から晩まで街道を歩き通す。

そして志穂は、彼の隣を黙つて付いていく。そんな日々が何日も続いた。

確かに、気楽といえば気楽な状態かもしれなかつた。少なくとも元の世界で生きていた頃の志穂なら、ラダの旅路についていくことは難しかつたろう。とつゝの昔に足を痛めて、青年のお荷物になつていたに違ひない。

実際、傍から見てているだけでも、ラダの旅路はかなり過酷なものに感じられた。

ちゃんとした食事を取りるのは朝と晩の一度、昼間はひとかけらのチーズやビスケットもどきと水だけを、わずかな休憩の合間に口にするだけで過ぎます。

そのちゃんとした食事も、大抵が濁つた豆のスープとかちかちの黒パン、良くてベーコンが一切れ付いてくる、そんな程度で、現代日本人の目から見れば粗食もいいところだった。とても長旅の疲労を補ってくれそうな代物には見えない。

服だつてかなり薄汚れて継ぎ当てだらけの上、それを何日も着回しているようだ。別段青年がものぐさで不潔だというわけではなく、ちゃんと頭と手足は時々水で洗っているようだから、着替えの少なさと洗濯の手間の問題なのだろう。

志穂なら、そんな生活には耐えられそうにない。こうじてずっとセーラー服の格好でいることすら違和感があるのに。

ラダが特別我慢強いのか、それともこれがこの世界の人々の当たり前なのかはよく分からぬ。あるいは両方なのかもしれなかつた。一方、志穂は空腹も疲労もなく、額に汗して苦労することもなく、ただただ青年の後を生まれたての雛のようにくつついでいくだけなのだ。この状態に文句を言えるほど、図々しくないつもりである。しかし、世界を肌で感じることがないということは、日に日に現実感が薄れていくということでもあつた。自分がまるでふわついた夢の残滓で、いつか跡形もなく消えてしまうのではないか そんな言い知れない不安が次第に志穂を蝕みはじめた。

志穂はその不安と退屈を紛らわすために、今の自分の状態、つまり死靈の身で何ができるのかということを模索しはじめた。

街道を行き交う人々はもちろん誰も志穂に目をくれないので、ラダが道端で休んだり、あるいは用を足すために彼女の傍から離れている間、セーラー服の少女が一人でうろうろしていても注目されることはない。

色々と試行錯誤した結果、ラダやあの白い杖以外のものにも、そ

の気になればどうやら触れることができるらしさと気が付いた。

道に転がる小石に向かつて何も考えずに手を伸ばしても、指先は何も捉えられずにすり抜けてしまう。だが、触るうと強く意識してから触れば、小石を持ち上げることができたのだ。

指先に伝わるざりついた小石の感触が、なんだかひどく懐かしかった。

嬉しくて思わず小石を握りしめていると、

「ん？　おい……あれ……」

「どうした？」

「目の錯覚か？　石がこう、ふわふわと浮いているような……」

そんな会話が背後から聞こえてきて、志穂は慌てて小石を手放した。

ともあれ、その気になれば物が持てるという事実は、志穂の心境を大いに良い方向へ傾けた。目の前を通り過ぎていくだけのようだつた世界に干渉する術があるというだけで、なんだか地に足がついたような気がしたのだ。

（今なら、ポルターガイストの気持ちが分かる気がするなあ……）

夏の心霊番組などで胡散臭く語られる怪しげな現象の話を、志穂はしみじみと思い出した。

そのうち志穂は、靈体の在り方にについて考え方を改めた。
どうやら死靈にとつては、その気になる、つまり意識するということが重要らしい。

何も考えていないと、志穂の感覚はろくに働かない。視覚と聴覚だけは普通に働いているものの、それだけではテレビの映像を見ているのと同じでしかない。そして意識せずに触れられるのはラダ本人と、あの白い杖だけだ。

しかし、今この場には風が吹いていると氣付いた途端、志穂の頬は吹き抜ける風の感触を覚えた。

同様に、道端に咲いていた花の匂いを嗅ごうとした瞬間、どうして今まで感じなかつたのかと驚くほど強い香りが鼻腔をくすぐる

ぐつた。

一方で、空腹や疲労を感じる」とはやはりない。本当ならそろそろ足が痛くなっているだろうな、と意識して考えてみたものの、それで足が痛くなつてくることはなかつた。

どうも、感覚が働くのは外部からやつてくる事象に対するのみのようだ。

あるいは単に、自分にマイナスに働くことをひやんと意識するのは難しいということかもしれないが。

なかなか都合の良い性質のようでいて、意識しなければ何も感じない、何もできないというのは、それはそれで精神的に疲れるものだつた。いちいちこれをしよう、あれをしよう、などと頭に思い浮かべなければならず、少し気が逸れればまたすぐに感覚が消え失せ、持ち上げた石も取り落としてしまうのだから。

死靈の身で生きた人間と同じように過ぐすことば、なかなか難しい課題のようだつた。

街道沿いにはいくつもの宿場町があり、ラダも夕刻になると宿に寄つて部屋を取つた。さすがにあのような野宿はそうそうしないものらしい。

この宿も大抵おんぼろな安宿で、壁や床に何やら得体の知れない虫が這つていたり、鼠がうろちょろしているのを見るのはほとんど毎度のことだつたが、ラダはまったく気に留める様子がない。

お陰で志穂は、床の上から少し浮いた状態で眠る技を覚えてしまつた。

もつとも、立つたままぎゅっと畳を握つていたら氣付くと朝だつた、という現象を、眠りと表現しても良いものなのかどうかは分からぬ。

ともあれラダが部屋で一人になる夜は、志穂も周りを気にせず彼と会話を交わすことができた。といつても、朝から晩まで歩き通し

て疲れている青年を捕まえて長話をすることは憚られたから、ほんのわずかな時間、他愛もない質問を一、二投げかけるくらいだ。

「ラダヤ……、ラダ、は、何歳なの？」

ある日の夜、ふと氣になつていたことを訊ねてみると、黒髪の青年は口元に手を当ててしばらく考え込んだ。そして、もしや不快な質問だったのだろうかと志穂が不安になるくらいの間を置いてから、こんな答えを返した。

「多分……十八か、十九。もしくは二十。正確なところは覚えていない」

告げられた曖昧な年齢は、志穂が思つていたよりも若い。彫りの深い異国風の顔立ちだから日本人の目には大人びて見えるということを差し引いても、落ち着いていて動じない雰囲気から、一回りくらい年上かと勝手に思つっていた。

「シホ、お前は？」

「中学の一年……じゃなくて、えっと、十四歳」

「そうか。十歳ほどに見えた」

真顔で言われ、志穂は思わず肩を落とした。

ラダは今まで、少女のことを小学生の子供のように見て、頭を撫でたり手を繋いだりしていたのだろうか。確かにクラスの中では前から数えた方が早い身長だったが、そろはつきり言われるとなんだか落ち込んでしまう。

また、何故自分とラダは言葉が通じるのかと訊ねたこともあった。あまり思い出したくない惨劇の記憶の中では、あの山里の人々や金髪の少年の言葉がまったく理解できなかつたのに、今の志穂はラダと会話することもできるし、他の人々が周りで語り合つている言葉を理解することも可能になつてしている。

「死靈を相手に、言語が障害になることはないものだ」
ラダはそう答えて、少し困つたように眉根を寄せた。

「そうだな……俺にもはつきりとした理由は分からない。ろくに言葉の通じない異国でも、靈たちとは対話できた。そういうもののな

だ、と片付けてきたが……」

青年は志穂の問いに対し、できるだけちゃんとした返事をしようと考へているらしかった。彼は真剣に考へる仕草をしばらく見せた後で、ゆうくつと言つた。

「……まれびとにも適用できるのかは分からないが。死靈は見たいものを見、聞きたいものを聞くものだ。目や耳ではなく、その魂を通して、世界を感じる。ならば、異国の言葉の意味を解することも、相手が理解できるように思念として意志を伝えることも、容易いのではないか。相手と対話したいという意志さえあれば」

志穂は黙つて青年の言葉を反芻し、その意味を理解しようと努めた。

目や耳ではなく、その魂を通して、世界を感じる それはつまり、志穂がこうしてラダの顔を見つめても、視覚が働いているわけではない、ということなのだろうか。

同じように、聴覚を使ってラダの言葉を聞き取つてているわけではないから、彼の口から発せられる音がいかに意味不明な言語であろうとも関係がないということなのだろうか。

分かるような、分からぬような、回りくどい理屈である。

しかし、思い当たる節はある。

志穂は意識すれば石に触ることができる。今風が吹いていると気付けば、風を感じることもできる。花の匂いを嗅ぐこともできる。そして意識しなければ、それらの感覚はろくなにくくなってしまう。だがそんなものが、本当に感覚と呼べるのかどうか。

死んだ人間に肉体はない。肉体がなければ感覚器も存在しない。

眼球もなければ神経もなく、鼓膜もなければ脣だって本当はないのだ。志穂が着てているセーラー服だって、きっと幻のようなものに過ぎないのだろう。だから、すべてが錯覚であり、何か不思議な力で周囲の状況を認識しているのだとしても、おかしくはない。そもそもその気になれば、振り返らずに背後を見ることが可能なのかもしれない。

ではラダと対話をすることを志穂の心が拒めば、その途端にラダの言葉は意味の分からぬ外国語として聞こえてくるのだろうか？

そんな考えがふと頭を過ぎつたが、実際に試す勇気はなかつた。
「……ラダの話を聞いていると、死靈つて何でもありの存在みたいに思える」

そう呟くと、青年の顔にかすかな苦笑が過ぎつた。

「実際のところ、その通りだからな」

「……そうなの？」

「肉体は魂に嵌められた枷である、と言つた者がある。死靈にはその枷がない。ただ彼らは死靈であるが故に、生前の執着を捨てきれない存在であるが故に、五感の枷をわざわざ自身に課している。もはや肉体などないというのに、目で物を見て、耳で音を聞いたがる……でなければ、確かに死靈に不可能はないのだが、一方でそれはとても危ういことでもある……」

志穂は淡々と語る青年を見上げた。

（でも、死靈は死靈なんでしょう？）

思い浮かんだその言葉を、志穂は飲み込んだ。

死靈は死靈。死者は死者。

生者とは違うのだ、どれだけ気楽であろうとも。

その思いは、濶のように志穂の胸の底を漂い、容易には消えそうになかつた。

そんな旅路の最中にある宿場町に立ち寄つた際、ちょっとした事件が起こつた。

ラダが荷物を下ろすために、白い杖を傍らに置いたとき、そのほんのわずかな一瞬を狙つた者がいたのだ。

人混みに紛れて近寄つてきた小さな人影が、ラダの白い杖を掴んだかと思うと、あつという間にその場から逃げ去つていくのを、志

穂は半ば呆然と見ていた。

そして影が完全に見えなくなつたところではつと気が付き、

「ラダ、杖が　」

と盗まれたことを伝えようとしたが、ぐいと体が引つ張られるような感覚に、驚いて思わず口を閉ざした。

もちろん少女の体のどこも、誰かに掴まれてるよつには見えない。だが、志穂はするするとラダのいるその場から引き離されはじめた。後ろ向きのまま、まるで見えない力に首根っこを掴まれて無理矢理引きずられているかのように。

ばたばたと手足を動かして引力に抗おうとしても叶わない。

驚いているラダの顔はすぐに人混みに隠れて見えなくなり、壁や柱や馬や人、色々なものが志穂をすり抜けていった。

何だかんだで靈体に慣れかけていた志穂にとって、これは久しぶりに、心の底からぞつとする事態だった。

通りを過ぎ、路地を一本ばかり過ぎたところで、ようやく志穂の体は移動を停止した。

振り向いても、そこには何もない。ただ汚れた壁があるだけだ。人気のない路地に取り残され、志穂はしばらく途方に暮れた。先程の現象は一体何事だったのだろう。

とりあえず気を取り直して先程の場所に戻ろうと思つたが、どうしてもそちらの方向に足が向かない。空氣中に見えない壁があるかのように、進むことができないのだ。

しばらく空氣と格闘してから、志穂は諦めて踵を返した。反対側の方向なら、何なく進むことが可能だった。

この先に何かがあるのだろうか。そんな予感めいたものが胸を過ぎる。

あるいはそれは、志穂を引きずつていつた力の大元かもしれない。しばらく悩んだ後、志穂は意を決したように目を瞑つて、恐る恐る手近の壁にぶつかつていつた。何の感触もなくするりと、壁の向こう側へ抜ける。

そつやつていいくつかの壁を通り抜け、やつと田を開くと、そこには倉庫の中らしき薄暗い光景が広がっていた。

乱雑に木箱が並べられ、あるいは積み上げられ、迷路のようになつていて、その箱越しに話し声が聞こえたので、志穂は興味を覚えてそちらの方へ近寄つてみた。

「……だつて、見ろよ、これ！」

幼い少年の声が響いた。

そつと窺つた先には、いかにも柄の悪そうな数名の男たちが車座になり、そしてその手前に志穂よりも幼い少年が座つていた。もしかしたら十歳にも満たないかもしない、ぼろぼろで汚れた服を着たその少年は、見覚えのある白い杖を手に何やら力説している。

「石じやなくて骨を丸ごと削つてあるんだぜ。きっと象牙だよ！ 象牙つて高いんだろ？」

「坊主、確かにこれは骨だらうがな。お前よりでかい象牙細工があるもんかい」

男の一人がやれやれと呆れたように息を吐いた。

「どうせ猪だかなんだかの骨を継ぎ接ぎして作つてあるんだらう。第一、これがもし象牙だとしてもだ、そんな代物を道端で持ち歩く奴がいるかよ」

「そ、そりやあ……そうかもしねえけど」

「それとも坊主は、お忍びの貴族様の荷物を拝借したつていうのかい？」

少年は悔しそうに眉を下げて首を横に振り、貧乏そうな旅人だった、と答えた。

確かにラダの身なりは良いとは言い難く、とても貴族という言葉とは縁がなさそうだが、この泥棒少年よりはましな格好をしていると思う。

ともかく、あの白い杖はラダにとつて母の形見だといつ、とても大事な物である。見過ごすのは決まりが悪い。泥棒たちの手から、どうにかして杖を取り戻すべきだらう。

志穂は悩んだ。

泥棒たちに気付かれずに近寄ることは簡単だ、そもそも彼らには志穂が見えないだろうから。しかし、杖を少年の手から強引に奪つたとして、彼らの目には、杖がひとりでに浮き上がったようにしか見えないはず。突然の心霊現象に驚いて、腰を抜かすかもしない。泥棒相手とはいえ、迂闊に騒ぎを引き起こして、ラダに迷惑がかからないだろうか。

そんな風に志穂が悩んでいたのに、少年と男たちは話し合ひを終えたらしい。

少年は白い杖を床に置き、代わりに赤銅色のコインを数枚、男から受け取つて懐に納めた。そして数歩下がり、くるりと踵を返してその場から立ち去ろうとする。

そのとき、志穂はとつさにあることを思いついた。そしてすぐさま実行に移した。

積み上げられていた木箱の塔の傍を少年が通りとしたのと同時に、思いきり意志と力を込めて、木箱に体当たりしたのである。

元々が乱暴に積み上げられていたものだ。加えられた力によって容易くバランスを失つた木箱の塔は、派手な音を立てながら、おもちゃの積み木のように崩れ落ちた。

一つが崩れるとその衝撃でまた別の木箱の塔も崩れしていく。埃も大量に舞い上がり、倉庫はあつという間に騒音と塵埃の坩堝と化した。

「うわっ、何だ何だ」

「おい坊主、てめえが、箱を倒しやがったのは！」

「お、おれ、何もしてない！ 勝手に崩れたんだよ！」

そんな騒ぎを横目に、志穂は急いで床に放置されたままの白い杖を拾い上げた。そして男たちが気付かないうちに、急いで倉庫の入り口から外へ出た。あまりに急いでいたので、自分がほとんど飛んでいるのにも気が付かなかつた。

薄暗い屋内から日の当たる外に出た途端、胸が今更のように激し

く脈打ちはじめた気がした。とつたになんて大胆なことをしてしまつたのだろう。

無論この動悸も錯覚に過ぎないのだろうが、容易には収まりそうになかった。

志穂は震える腕で白い杖を抱えながら、倉庫からなるべく離れようと人気のない路地の隅をふらふらと歩いていた。

するとしばらくして、

「シホ！」

と、声を上げながらラダが駆け寄つてくるのが見えた。

志穂はほっとして、手を振つてそれに応えた。

「無事だつたか」

傍に駆け寄つて真つ先に問われた言葉に、こくりと頷きを返す。
「うん。良かった、どうやつてラダと合流すればいいかと思つてたの。……はい、これ」

差し出した白い杖を見て、ラダはわずかに目を見開いた。

「……取り返してくれたのか。ありがと」

杖を受け取つた青年の唇の端には笑みが浮かんでいた。どうやら、杖を取り返して正解だつたようだ。

「だが、一体どうやつて取り返したんだ？」

志穂が倉庫での出来事をかいつまんでも語ると、青年の笑みが少しばかり歪んだ。まるで、吹き出すのを堪えているかのように。

「……シホは案外、その、元気だな」

「あの……やっぱりやりすぎだった？　の人たち、ラダが杖を持つているの見たら、変に思うかな」

「いや、大丈夫だ。それほどこの杖に価値を見出していたわけでもなかつたのだろう？　それなら杖が消えたことすら気付かないかもしないな」

志穂は安堵に胸を撫で下ろした。

宿に戻るまでの道々、彼女は先程の奇妙な現象についての疑問を口にした。

「後ろから引きずられるような感じだったの。戻ろうとしても、そつちの方向には進めなかつた。あれって、一体何だつたんだらう」「それはおそらく、この杖が盗まれたから　　杖とシホの間に距離ができたからだらう」

ラダは淀みなく答えた。

「シホはこの杖に取り憑いた、この杖から離れて遠くには行けない、とは以前言つたな。死靈が物に取り憑くということは、つまりその物から離れられなくなるということだ。今回の場合は、物の方が志穂の傍から離れてしまつた。だから……」

まるで磁石のように、杖のある方へ引きずられていつた。そういうことじらしい。

「じゃあ……逆に私が杖から遠くに行こうとして、杖をずるずる引きずることはないの？」

「それはない、と思う。取り憑かれている対象、実体のあるものの方が、この場合強い。シホ自身が自由に行き来したければ、自分で杖を抱えていくしかない。……そうされるのは困るが」

志穂は思わず考え込んでしまつた。

今、ラダと共に旅をしているのは、彼女自身がそう決めたからだ。しかし結局のところ、選択肢は他になかつたのかもしない。

ラダは死靈には肉体の枷がないと言つた。だが、これは明らかに枷だ。

杖から離れなければ別段実害があるわけではないようだし、今はそのお陰で杖を取り戻せたようなものだから、とやかく言つ言葉は思い浮かばないが　　なんだか、あまり気分は良くなかった。

自分の身体が自分の意のままにならないといつのは、やはり気持ちが悪い。

傾きかけた思考を振り払つように、志穂は殊更明るい声を口にした。

「この杖はラダの大切な物なんでしょう？　私、そんなことしないよ

ラダは志穂を 累て まで案内する。志穂はラダから離れず付いていく。

たつた十日やそこいらでその約束を忘れてしまつほど、物忘れが激しいつもりはない。

「ああ。ありがとう、シホ」

ラダは微笑んだ。

黙々と無表情で歩いているときは、なんだか近寄りがたく感じる青年も、こうして笑う姿を見ると、近所の優しいお兄さんのように思えてほっとする。

けれどその優しげな横顔も、人が来た途端冷たい無表情に覆われてしまうのかと思うと、少しばかり残念だった。

第四話 ハテルベリ

志穂がラダとこうう青年と出会つてから、もう十日以上が過ぎている。

日本とはまったく異なる世界、異なる国での旅や、死靈の身で過ごすことについては、まだまだ戸惑うことばかりである。だが十日も経つと、ある程度は慣れて心に折り合いで付けられる」とも少しずつ増えてきて、そうするとそれまで気にしていなかつたことに対するもの、疑問を持つ余裕が生まれてくる。

専ら志穂の心を占めているのは、ラダが何者なのか、といふ点についてだった。

志穂はこの青年について詳しいことを何一つ知らない。

知っているのは、彼が死靈を見たり触れたり対話することができ、また成仏させられること こちら風に言えば『船出』させる力があるらしいこと。

概ね親切で誠実で眞面目でたまに突拍子がなくて、少なくとも悪人ではないこと。

たつたそれだけなのだ。

彼がどうしてあの山里を訪れていたのか、山里の人々とはどんな関係だったのか、そういうことも何一つ知らない。

死靈術士、と彼は言っていた。死靈たちを時に使役し、時に魂を鎮め、あるいは災いを呼び寄せる忌むべきものだと。

だが、志穂は今のところラダがそれらしく振る舞つところを見ていない。

旅路において、ラダは徹底的に無表情で、無口で、無愛想な態度を貫いていた。

他人と会話を交わすのは、宿を取つたり買い物をするときくらい。たまたま食堂などで隣り合つた商人に話しかけられても、ほんの一言二言しか口にしないので、すぐに気まずい雰囲気になり、あちら

の方から会話を打ち切つていぐ。

その反面、夜に志穂と会話を交わす際は、きちんと受け答えしてくれるし、稀に微笑みすら見せてくれる。

まるで、人と深く接することを避け、普段はあえて無愛想に振る舞つてゐるようだつた。

もし志穂が死靈ではなく、ちゃんと生きた少女のままラダと出会つていたら、彼はこんなにも親切にしてくれただろうか。そんな疑問すら思い浮かぶ。

無論、そんなことをラダに直接聞けるわけがない。

そして、もう一つ、聞こうとして聞けないままの疑問がある。

そもそもどうして志穂は地球とは異なるこの世界に呼ばれたのか

という、根本的な疑問が。

ラダの言動を端々まで思い返してみると、志穂をこの世界に呼び出したのは 山の民　　あの廃墟と化した山里の人々で、そこには何か、少なくとも何の変哲もない中学生の少女を見て大喜びする程度には重大そうな理由があつて、ラダもそれを知つていたようだ。無論、いつものように、聞けば答えてくれるかもしない。

しかし、例えよくある物語のように、志穂が彼らの救世主として呼ばれたのだとしてもだ。結局のところ、彼女はこの世界に何をもたらすことなく死んでしまつた。今更呼ばれた理由を根掘り葉掘り聞いてもどうしようもなく、また到底納得できるとも思えなかつた。そんなことで自分を故郷から引き離したのか、と思つてしまふに決まつてゐる。

「どうか彼らを憎まないでやつてくれ、とラダは言つた。

志穂もできればそうしたいと思う。あのよつな惨劇を前にして、同じ被害者である人々を憎悪したくはない。そして、彼らを擁護した青年に対し、こらぬ悪感情を抱くこともしたくなかった。

ならばこのまま、呼び出された理由を知らない今までいた方がきっと良いのだろう。

だから志穂は今日も、様々な疑問と思いを胸にしまいながら、青

年の後に付いていく。

一人が旅をしているアーフェルという王国は、この世界の中では豊かな大国なのだそうだ。大きな穀倉地帯の平野、材木の豊富な山地を擁し、南の内海沿岸には貿易港がいくつもあり、鉱山もあって、広い領土には人口も多い。環境に恵まれた国なのだと。

アーフェルの街に立ち並ぶ建物や、行き交う人々の様相は、概ね昔のヨーロッパの雰囲気によく似ている気がする。具体的にヨーロッパのどこの国の文化と似通っているのか、ということまでは志穂の乏しい知識では判別できないが、志穂とラダが今いる地方はどうかといえば寒冷な方であるということだった。

「西の王都周辺はもう少し暖かい。この辺りは農業よりも、主に牧畜や商業で栄えている」

確かに、街道の周囲に広がっているのは畑よりも一面の牧草地であること多かった。そこに何頭もの牛や羊の群れがいて、のんびりと草を食べている光景は、まるで絵本のようにのどかだ。牧草地のずっと向こうには深緑の森も見える。

日本にいた頃は色々な本やテレビ番組を見ては外国に憧れていたものだつたから、こうして見知らぬ国の見知らぬ風景を眺めるのはそれなりに楽しい。それが美しい風景であれば尚更だ。色々なことを考えないようにすれば、海外旅行をしているようにも思える。

城壁に囲まれた丘の上の街、石畳の小道がくねる路地の角。
立派な教会の尖塔や、軒先に掲げられた鉄細工の看板。

木の骨組みが漆喰を塗った石壁の表面に表れている家屋に、赤茶や灰色の三角屋根。

どれも日本の平凡な田舎町では見ることができないものだ。

もつともアーフェルという国すべてが観光地の写真のように綺麗なわけではない。通りかかる農村は大抵貧しげな雰囲気で、宿場町にはこの間のような泥棒が目を光らせている。街の道端には浮浪

者や乞食がうづくまり、物乞いをして過ごしていた。

日本にもホームレスはいるし、志穂も何度か駅で見かけた覚えがある。だが、この国で浮浪者らしき人々を見かけない日はほとんどなかつた。少し大きな街の通りなら必ず数名は堂々といて、通行人から憐憫を誘おうとしている。

さすがに強盗の類まで溢れているわけではないようだが、白い杖を盗まれて以来、ラダは以前よりも周囲に対する警戒心を強めているように見える。志穂もなるべく杖から田を離さないように努めた。また杖を取られてずるずる引きずられるのは御免である。

思い返せば、ラダの杖を盗もうとしたあの少年もひどく貧しげな身なりをしていたし、志穂よりも年下なのに盗みで生計を立てているようだった。

昔のヨーロッパに似たような国に対して、現代の感覚をそのまま当て嵌めるわけにはいかないかもしれない。それでも、アーフェルは豊かな国であるという説明、旅の最中に田にするのどかな風景との落差には、違和感を覚えずにはいられなかつた。

そのことを口にすると、ラダの表情がわずかに険しくなつた。
「……国が豊かで、土地柄に恵まれていても、すべての民がその恩恵を受けられるわけではない」

彼は珍しく厳しげな口調でそう言つと、それきりこのことについては口を開ざしてしまつたので、志穂もそれ以上訊ねることはできなかつた。

「明日にはエテルベリという都市に着く。しばらくはそこに滞在することになるかもしない」

ちょうど周囲に牛や羊しかいな」ときを見計りつて、ラダはそんなことを言つた。

「しばらくつて、どれぐらい?」

「そう長居するつもりはない。せいぜい数日だ。その分、果てへ到着するのは遅れるが……構わないか」

志穂はこくりと頷く。

ラダも毎日毎日歩き続けていては身体に疲れが溜まるだらうし、
休息も必要だらう。むしろずっと大丈夫なのかと思つていていたくらい
だから、文句などつけるはずもなかつた。

「エテルベリって、どんなところ?」

「大きな街だ」

ラダはそう一言答えた後、さすがに説明不足だと思つたのか、す
ぐに言い足した。

「商業で栄えていることから、商都とも呼ばれる。住む人間も、出
入りする者も多い」

「ラダもよく行くの?」

「ああ。……そうだな、ここ五年ほどは数ヶ月おきに立ち寄る」
この青年はどうも雄弁なときとそうでないときとで差が激しい。
そのことがふと氣にかかり、志穂は続けて、こう訊ねてみた。

「ラダは、喋るのは好き?」

すると青年は真顔でしばりく考え込んだ。

「……嫌いではない。だが、ずっと黙っているのも苦にはならない。
喋る内容を思いつくときは長く喋るし、思いつかないときは喋らない
い、ただそれだけだ」

「私が質問をすると、いつもきちんと答えてくれるよね」

「シホは、質問をするのが好きだらう」

意外な返しに、志穂は思わずきょとんと瞬きをした。しかし、そ
う言われば確かに、ラダと会話するときはいつもこちらから質問
ばかりしていた気がする。

それは単に、今自分が身を置いている見知らぬ世界のことをもつ
とよく知りたいという思いからだつたが、

「そして俺の答えにも真剣に耳を傾ける。……良い聞き手には、よ
く答えたくなるものだらう」

志穂はなんだか恥ずかしくなり、眞面目な顔をしているラダから
視線を逸らしてうつむいた。もう少し質問は控えめにすることにし

よう、と心に決めながら。

一人がエテルベリに到着したのは、翌日の昼過ぎのことである。エテルベリは北から南西へ流れる大きな川の中州に存在する街で、入るにはまず川にかけられた石造りの橋を渡らなければならなかつた。

槍や鎧で武装した兵士が監視している横を通り過ぎ、頑丈そうな橋の上を渡っているのはラダだけではない。幌馬車を操る商人、野菜を担いだ農民に、いかつい甲冑を着込んだ傭兵など、色々な人々が橋の上を通り対岸を目指している。

ちらりと橋の下を見れば、川面には荷物を載せた船がたくさん浮かんでいた。

対岸の中州には、川岸に迫り来るような勢いでびっしりと建物が居並んでいるのが見える。中州が段々と近付くにつれ、数階建ての背の高い家屋がひしめき合つよつにして建ち並び、煉瓦のような赤色の屋根が無数に連なる光景が視界全体に広がってきた。

橋を渡り終えると、すぐに広い通りに出た。

通りにはやはり馬車や荷車、そして大勢の人々が雑然と行き交い、ごつた返している。

「わあ……すごい人」

志穂は通りを行くラダに付き従つて、群衆の合間をすり抜けながら時々本当にすり抜けたりもしながら街中を進んだ。

どうもこの国には歩道と車道という区別がないらしく、歩行者は油断すると強引に先へ進もうとする馬車に轢かれそうになるのが日常のようだ。実際、志穂も何度か後ろから来た馬車に気付かないまま、すり抜けていった馬車の後ろ姿を見てぞつとしたことがある。

しかし、流石にラダは慣れた様子で、人混みの中をすいすいと進んでいく。馬車が近付いてくると無造作に脇へ避けてから、また何事もなかつたように進むその姿はなかなか頼もしい。

騒がしい通りをどうにか抜け、狭い路地の一つへ足を踏み入れると、途端に静かになつた。

左右を家屋の壁に囲まれた路地は薄暗い。屋根と屋根の合間からほんのわずかに差し込む陽の光が、まるでスポットライトのように路地の一部分だけを照らしている。

志穂はその光を辿るように、頭上を見上げてみた。

すると少女と青年の頭上、かなり高い位置の何もないところに人が浮いているのが見える。

志穂は一瞬仰天して立ち止まり、まじまじとそれを見つめた。

服装も顔立ちも、ごく普通の容貌の男の子だった。肌の色など、ラダよりもずっと健康的に見える。しかし、その人物は明らかに空中を浮きながら移動していたのである。

その少年は、遙か足下の志穂らには気付かない様子で、路地に面した建物の内部へ、閉じた窓から入つていった。無論、音もなくすり抜けれるという方法で。

「どうした?」

怪訝そうに振り返るラダに、先程見たもののことを探ると、

「それは死靈だろう」

と、彼はいともあつさりと答えて首を傾げた。

「しかし、それがどうかしたのか」

「どうかしたのかって……」

「人が多いところには、死者も多い。死者が多ければ、彷徨う死靈も多くなる。……今までの旅の中でもよく死靈を見かけたはずだが、気付かなかつたか」

志穂は首を横に振るしかなかつた。

自分と同じ死靈が、他にもいる。

そんな当然のことを綺麗さっぱり忘れていたわけではないのだが、やはり靈といふと何やらおどろおどろしい雰囲気を纏わせてしたり、足がなかつたり、身体が透けていたりして、とにかく『見れば分かる』ものだと思い込んでいた。

今の自分自身を顧みれば、そんな先入観が間違いであることにすぐ気付けたはずなのが。

「……死靈つて、傍から見ると、あんな風なんだ」

志穂は思わずそう呟いていた。先程見かけた死靈も、宙に浮いていなければ、普通の生きた人間だと思ったかもしれない。

「そうだな。慣れれば見分けられるが……大抵の死靈は生前と同じ、つまり生きた人間とそっくり同じような姿をしているものだから。実のところ、通りを埋めていたあの群衆も、すべてが生きた人間だというわけではない」

ラダはさらに志穂をぎょっとさせると言った。

「ほとんどの者は気付かないし、目にすることもないが、死靈は人の住むところどこにでも紛れ込んでいるものだ。……それに近頃は、さしたる恨みや心残りのあるなしに関わらず、沖つ国へと船出できず、地上を彷徨い続ける死靈が増えている」

ラダの淡々とした表情に、ほんのわずかな陰が差した。
なんだか寒氣のする話だと思った。もっとも志穂自身、その彷徨う死靈であることに違いはない。

志穂は複雑な気持ちで、引き続き路地を進む青年の背中を追つた。

やがてラダは、ある小路に面した建物の前で足を止めた。建物の入り口の上には看板が掲げられているが、さすがに志穂もそこに記された文字を読むことまではできなかつた。

ラダが扉を開けると、からからと鈴が鳴る。

扉の向こうは食堂になつていた。食事時ではないせいが、人影はほとんどない。

「いらっしゃい」

鈴の音を聞きつけたのか、店の人らしき濃い茶色の髪の女性が奥から顔を出した。二十代後半くらいの、化粧気のない、けれども美人だと一眼で分かる女性だつた。

彼女は入り口のラダに目を留めると、少し驚いたように声を上げ

た。

「あら、ラダじゃない！　久しぶりね、最近顔を出さないかひどい
したのかと思つてたのよ」

ラダは無表情のまま軽く頭を下げる、「
泊まりたい。部屋はあるか？」

と、愛想のない態度でそう訊ねた。

どうやらここは、ラダの馴染みの宿屋だったようだ。女性は青年
の態度にも慣れた様子で頷くと、てきぱきと宿帳を取り出して手続
きを済ませた。

「いつもの部屋が空いてるわ。掃除もさつき済ませたばかりだから、
すぐに休めるわよ」

「分かった」

慣れた様子で階段を登つていくラダに付いていく。
すると、三階にある部屋の前のところで、今度は男性と行き会つ
た。

「おや、いらっしゃい。何用ぶりかな」

この人も宿の人なのだろうか。

男性は先程の女性と同じか、それより少し上くらいの年齢に見え
た。髪も同じく濃い茶色、顔形もどことなく似ている。目の色は違
うが兄弟なのかもしねり。

彼はまずラダを見て、それから彼の背後にいた志穂に視線を向け
ると、少し驚いたように目を見開いた。その顔はやはり先程の女性
が浮かべていた表情とよく似ていた。

「珍しいこともあるもんだな、ラダがこんな可愛いお嬢さんと一緒に
だなんて。一体どういう風の吹き回しだい？」

「事情があつて、一緒に旅をしている」

ラダは小声で答えながら部屋へ入つていった。

「へえ、ラダがねえ。こりや明日は雨だな」

そう言いながら、男性も部屋の中へと付いていく。

そして当の志穂は、半ば呆然と一人のやりとりを眺めていた。

男性は、明らかに志穂を見ていた。

志穂の姿をきちんと認識して、その上でラダと言葉を交わしていた。この旅が始まって以来のことだった。

「シホ。入らないのか」

小声で部屋から呼ばれ、志穂は慌てて部屋に足を踏み入れた。あまり広い部屋ではない。だがラダが今まで泊まってきた宿に比べれば、遙かに快適そうな空間が広がっていた。

床はきちんと掃き清められ、寝台のシーツは洗い立てで、鼠の気配もまったくしない。日本では当然すぎるそのことがこの国ではいかに貴重であるのか、志穂ももう把握している。

「綺麗な部屋だね」

思わずそう言つと、先程の男性がにっこりと笑つた。

「そうだろう。うちの宿の居心地は最高だからね」

志穂はまごつきながら男性を見上げた。やはり、この人には志穂の姿が見えていたのだ。

ラダのように死靈が見える力を持つのだろうか。それとも、あるいは。

「……紹介する。この男はジョフという。かつてこの宿の主人だった人物だ」

横からラダが口を挟んだ。それに応じて、男性もまた丁寧にお辞儀をしてみせた。

「死んでこの方十七年、この 水煙亭 を見守り続けている者さ。よろしく、お嬢さん」

こうして志穂は、この世界に迷い込んで以来初めて、自分以外の死靈と対面したのだった。

第五話 死靈術士

ジェフという男性は、先程下で見かけた同じ髪色の女性、この宿の女主人ヘイゼルの父親なのだという。十七年前、二九歳の時に事故で亡くなつて以来、ずっと死靈のままで娘を見守り続けているらしい。

「何せ妻はもうずっと早くに亡くなつていたし、その上に父親の俺まで死んでしまつたわけだからさ。あっちで待つてくれてる妻には悪いが、当時まだ十歳の娘を一人残して、海のかなたの国になんて行く気にはなれなかつたんだよ」

親を亡くした娘へイゼルは親戚に引き取られることになったが、彼女は父親が残したこの 水煙亭 から離れることを拒んだ。

結局この宿はヘイゼルの後見人となつた母方の伯父が経営することになり、この伯父が亡くなつてからは、成長したヘイゼルが女手一つで見事に切り盛りしてみせ、現在に至るのだそうだ。

「父親の俺が言うのも何だけどね、まったくアーフェルー、いや世界一の孝行娘だと思うんだよ。下にある肖像画を見たかい？ 見てない？ あれはまだ妻が生きていた頃、娘と三人で旅の画家に描いてもらつたものでね、ヘイゼルは今でもあの絵の前で……」

ジェフは放つておけば何時間でも喋つていそうな勢いだった。
もちろん死靈ならば、声が嗄れて喉が痛くなつたりすることもない。

志穂が圧倒されて大人しく彼の話に耳を傾けていると、やがて見かねたのか、ラダが横から口を挟んでジェフの語りを止めた。

「変わらないな、お前も。……久しぶりに会つたが、ヘイゼルは相変わらず立派にやつているようだ。そろそろ子離れしてもいい頃だと思うが」

ラダの言葉を聞くなり、ジェフは途端に不機嫌そうな顔になつた。

「さつさと船出しき、といふいつもの！」忠言ならお断りだよ

志穂は思わずラダとジョフの顔を交互に見比べた。船出、つまり成仏とか昇天とかいう意味合いの言葉だ。

「お嬢さんも気を付けた方がいいよ。」（）いつは死靈と見ると、片つ端から杖を振り回して船出させようとするからね」「

はあ、と曖昧に返事をしながら、志穂はラダに杖を突きつけられ、危つく成仏させられそうになつたことを思い出していた。ラダとしては善意だったのだろうが、成仏させられるこちらは堪つたものではない。ジョフにも似たような経験があるのでだろうか。

当の青年は少し気まずそうな顔をしていた。

「……別に俺は、その辺りにいる害のない靈にまでいちいち船出を促そうとは……」

「それはそうだろうよ、このエテルベリの街一つとつたって、一体どれだけの死靈がいるやら分かつたものじやない。けど、杖の届く範囲にいる靈ならすべてお前の力を及ぼそつとするだろ？　お陰でこの界限はすっかり寂しくなつて……」

はあ、これ見よがしにため息をつくジョフに対し、志穂は勇気を出して口を挟んだ。

「あの……でも、ラダは、私の意志を無視して成仏、ええと、船出させよ？　とすることはもうしないって、約束してくれました」

すると、ジョフはやや苦笑気味の表情になった。

「何だい、本当にこんなお嬢さんにまでやらしてたのかい？」

「……あ

志穂は思わず口元を抑えた。フォローのつもりが、逆効果だったらしい。

「まあ、お前さんが人の意志に反することのはしないって分かってるからな。そこはお嬢さんも安心するといい。現にこのくそ真面目で律儀な男は、この数年間顔を合わせる度に俺を船出させたがるが、娘を見守りたいって俺の意志を無視してまで船出させようとはしなかつたよ」

ジョフはそう言って表情を和らげた。

「それじゃ、まあゆっくりしていつておくれ、ラダ。そちらのお嬢さんも」

そして彼は部屋から去つていったのだが、その去り方といふのが、部屋の壁にぶつかつてするりと向こう側へ向けていくという、なんとも幽霊らしい方法だった。

志穂はまだ目を瞑らなければともあのよつた芸当はできないが、ジェフは目を開けたまま当然のように壁を通り抜けていた。死靈生活も十七年になると、あれくらい気安く壁抜けができるのだろうか。ジェフが去つた後、部屋の中には少しばかり奇妙な沈黙が漂つた。やがてラダは氣まずげな表情のままで口を開いた。

「……すまない。ジェフも悪い人間ではないのだが、一旦娘のことを話し出すと止まらなくなることを失念していた」

「うん、と志穂は首を横に振る。そしてやや間を置いてから、遠慮がちに声を発した。

「あの、ラダ」

「何だ?」

紫色の目が志穂を見下ろす。その目の表面に少女の姿が映り込むことはない事実に、少し前から彼女は気付いている。

ラダはやはり今も、靈は皆大人しく成仏するべきだと考えているのか。

本当のところはそう訊きたかったのだが、志穂の口から滑り出たのは別の質問だった。

「ええと……この国では、靈が死後の世界へ行くことを船出って言うんだよね?」

本来訊きたかったこととは違つものの、お互いの言葉が自動的に翻訳されていくと知つてから、志穂が抱いていた疑問の一つではある。

ラダやジェフが口にする『船出』といふ言葉が、彷彿う幽靈が成仏するという意味で使われているのは明白だ。しかし志穂の知る限り、日本語にそんな意味はない。文脈で大体理解できるとはいえる。

固有名詞でもないのに、翻訳されて聞こえる言葉と日本語の意味がはつきりれているのは、この『船出』といつ言葉だけのようだ。

もしかしたら、この国の言葉では元々、『成仏』と『出航する』と『』が同じ単語で表現されているのかもしれない。

「まれびとの国では、船出とは言わないのか」

その予想を裏付けるように、ラダはそう言って首を傾げた。

「うん。私の国では、船出ついづの言葉には、船が港から出航するっていう意味しかない」

「そなうなのか？いや、いひでも、出航することを船出とは言つが……」

ラダは例によつて真面目な顔で考え込んだ。

しばらく待つていると、やがて彼は顔を上げ、窓の外に視線を投げかけた。小路を挟んで向かいに立ち並ぶ建物の屋根の合間から、昼下がりの青空が覗いている。

「……死して肉体を失つた魂は、本来、地上を離れて海の向こうにあるという死者の国へと向かう。だから死者の国は、沖つ國、あるいは海のかなたの国と称される。この点は、古い教えも、アーフェルの教会の教えでも変わらないし、俺が行つたことのある異国でも大抵はそうだつた」

「海の向こうに、死者の国……？」

ふと、志穂は目覚める前に聞いた波の音を思い出した。

幻聴か、それこそ夢かと思つていたが、もしかしてあれは死

者の国への誘いだつたのだろうか？

「……沖つ國が実在するのかどうかは知らない。俺も見たことはないから。いざれにせよ、海の向こうに行くには船が必要だろ。だから、船出すると言つのだと思つ」

志穂にも分かりやすい、単純明快な理屈である。

しかし何か引っ掛かるものもあつた。確かに志穂たちの目指す目的地である 果て も、海辺の向こうの遙か沖合にあるのだとラダは言つていなかつたろうか。

まれびとは沖合にあるこの世の 果て の向こうからやつてくる。

この世界の死者の魂は、海のかなたの死者の国へ行く。

つまるところ、この世界における海とは、様々な異界に繋がっている場所だとこうことなのだろうか。込み入った話に内心で首を捻つていると、

「シホの故郷では、死者はどこに行くものなんだ?」「珍しくラダの方から質問をしてきた。

「ええと……あんまり詳しくないけど、色々な話があったよ。天国、極楽、地獄とか、黄泉の国とか、三途の川とか……」

故郷で葬式に参列したことはなく、死について真剣に考えたこともなかつたから、とりあえずうろ覚えの単語を並べ立ててみる。

そんない加減な話でも、ラダは興味を持ったようだつた。

「やはり異界では、死後の国に対する観念も異なるのだな」

その後はしばらく、ラダが質問し志穂が答えるといふ、いつもとは逆の形になつた。

清潔で居心地の良い部屋での、穏やかな午後である。窓から差し込む光は明るく、ぽかぽかと暖かかった。これで話題が死後の世界についてなどといふ暗い話でなければもっと良かつたのだが、とりあえずラダは楽しそうだつた。

そんな風にして、一人はその日の夕刻までのんびりと過ごした。

「シホ。これから少し出かけることになつた

ラダがそう言い出したのは、もう田の暮れかけた時分のことだつた。

青年は外套を着込み、白い杖を片手に握りしめていて、本格的に外出する雰囲気だ。

「どこに行くの?」

「少し離れたところにある裏町だ。若い娘が見に行つても、あまり楽しいところではないと思う、が……すまない」

志穂は頷いた。ラダの手に杖がある以上、少女には彼の後を付いていく他に選択肢がない。別行動を取ろうとしても、どうせまた引きずりられてしまうに決まっている。

「おや、ラダ、今から仕事かい？ 気を付けろよ」

ジョフの声に見送られながら、ラダと志穂は宿を出た。

宵闇が迫る中、二人は複雑に入り組んだ路地や通りをいくつも足早に通り抜けた。明かりの灯った店があるような通りはともかく、細い路地には街灯はまったく存在せず、建物の陰が色濃く被さっているところでは、足元の確認すら覚束なくなるほどに暗い。

そんな暗さをものともせずに進むラダがやつてきたのは、どこか不気味な雰囲気のする界隈だった。

道は人が一人すれ違うのがやつとの狭さ。妙に肥え太った野良猫が道のゴミを漁つて残飯らしきものを食い散らかしている。

立ち並ぶ建物の軒先の看板はどれもおどろおどろしい怪物を象つたものばかりで、中には山羊の頭部の剥製を堂々と表に出している建物まであった。

「……これ、全部店なの？」

と、志穂は呟かずにはいられなかつた。だとしたら、一体どんな得体の知れない店なのだろう。

まるでお化け屋敷のように飾られた家々の前を通り過ぎ、ラダが扉を叩いたのは、不気味な看板も飾り付けもない家屋だつた。足を踏み入れた内部も簡素でごくごく普通の民家に見えたので、志穂は一旦胸を撫で下ろした。

だが、奥で青年を待っていたのは、漆黒のローブを身に纏つたいかにも怪しげな老婆だつた。白髪はところどころ禿げかかっていて、顔中に皺という皺が刻まれている。これで杖でも手にしていたら、ラダよりもずっと魔法使いらしく見えただろう。

「待つてたよ、ラダ」

老婆はラダを見上げると、志穂には気が付いていない様子で話を切り出した。

「至急お前に頼みたい仕事があるんだ。報酬は弾むよ、何せ相手はお貴族様だからね」

「貴族？」

ラダはほんのかすかに嫌そうに眉をひそめると、その場に立つたまま続きを促した。

「エテルベリに屋敷を構えてる、ブレニー子爵が依頼人でね。屋敷に死靈が出て、このままでは祟り殺されるかもしれないと言つて、藁にも縋る思いで噂を辿り、死靈術士の力を借りに来たというわけだ」

老婆は意地の悪そうな表情で笑う。顔中の皺がますます深くなつた。

「子爵が相手じゃペテンでこまかすのも危ないからね、お前が来てくれて助かったよ。それに子爵も運が良い、貴重な本物の死靈術士がちょうど立ち寄ってくれたんだから」

青年は無言だった。

なんだかよく分からぬが、死靈術士としての仕事の斡旋ということなのだろうか。青年が名乗つていた死靈術士なる肩書きは、冗談というわけではなかつたらしい。

ペテンなどと言つていたり、志穂の姿が見えていないあたり、この老婆にはラダのような力はないようだ。

「子爵の話では、死靈は夜中になって屋敷の中を彷徨い、子爵やその家族、召使いに至るまで区別なく首を絞めようとするやうだよ。やれるかい？」

一瞬黙り込んでから、ラダは淡々と答えた。

「……それが死靈なら」

ちぢりと見上げた横顔は、旅の最中によく見かけた、あの冷たい無表情に戻つてしまつていた。

ブレニー子爵の屋敷は、街の中心部に近い高級住宅街にあつた。

土地の限られた中州の街の中にも関わらず、屋敷にはそこそこの広さの庭があり、蔓草模様に細工された鉄柵があり、馬車が通れる大きさの門もあった。貴族というものを知らない志穂でも一旦でそれと分かる、お金持ちのお屋敷そのものである。

夜中、人目を憚るように屋敷を訪れた青年を迎えたのは、屋敷の執事だという男性だった。彼はラダよりも遙かに身なりの良い紳士だったが、その頬はげつそりと瘦けていて、ラダの姿を見る目には縋り付くような雰囲気があった。

「あれが始めて、もう半年になります……。召使いたちは次々と辞め、奥方は心労のあまり伏せられ、お坊ちゃんやお嬢様方と共に別宅にお移りになりました。私も三度ほどあれに首を絞められまして……」

「と、執事は細い指先の跡が赤く生々しく残る首を見せた。

「幸い、三度ともすぐに気付いてはね除けようとしたり、叫んだりしたところ、すぐに離れていきましたが……もし意識のない時分であればと、今でもぞつといたします」

「貴方は、その死靈に見覚えは？」

暗く静まり返った屋敷の廊下を見やり、ラダは至つて落ち着いた口調で訊ねた。これから悪靈を祓いに行こうというのに、微塵の怯えも感じられない。

「いいえ、ございません。私も子爵からこの屋敷の差配を任せている者ですから、ここで雇っていた者は、下働きも含めて全員の顔を覚えています」

「では、その死靈はここの人ではないと？」

「はい。少なくとも、この十年の間にいた者ではございません」

そんなことを話しながら、二人は執事の持つランプの明かりだけを頼りに屋敷の内部を進んでいく。志穂はその少し後から付いていきながら、きょろきょろと辺りを見回した。

ぴかぴかに磨かれた床、壁を覆うタペストリー や絵画、要所に配置された銀の燭台。

日中ならざぞかし豪華絢爛なのだろう屋敷も、真夜中の闇の中ではただただ不気味な印象しかない。ちょっと油断して氣を逸らした瞬間、すぐそこの真っ暗闇から何かが躍り出てきそうだ。

もつとも、今の志穂はむしろ『出る』側である。

そのことを思つと、暗闇に怯えるのは馬鹿馬鹿しいことのようを感じられた。

「ここが、悪靈が一番多く日撃されている場所で『ぞこます』

執事が案内したのは、本棚が壁一面に配置された書斎だった。部屋の中央にはテーブルと縄張りの椅子が置かれ、ちょっととした応接間のような雰囲気もある。

ラダは一度書斎をぐるりと見回した後、しばらく考えてから本棚に近付き、そこに並ぶ立派な装丁の背表紙を眺めた。

「こちらの書物の中に、死靈が出始める少し前に入手したものありますか」

青年の質問に、執事の顔が曇った。

「それが……その書棚にある本は、半分が半年前に運び込まれたものなのです」

「といふと？」

「半年前、子爵家のあるご親族が急死され、その財産の一部を子爵がご相続されたのですが……。その方は熱心な書物の収集家であられたそうで、財産の多くは書物でございました。それらの書物をここに収めたのです」

「では、悪靈はその書物のどれかに取り憑いていたのかもしれません」

冷静な指摘に、執事はますます顔を曇らせた。その可能性には気が付いていたものの、有効な方策を取れずに手をこまねいていた、といつた雰囲気である。

「は……しかし、これらはすべて貴重な書物です。一冊だけならば断腸の思いで処分することもできましが、数十冊ともなると……私どもにはどれが悪靈つきの書物かは分かりませんし……」

「なるほど」

「書物を燃やすことは子爵もお望みではありません。どうにか穩便に、悪霊だけを退治していただけると有り難いのですが……」

分かりました、とラダは素っ気なく答えた。いたって事務的で愛想の欠片もない。旅路でもそうだったが、仕事中もいつもこんな風なのだろうか。

「では、しばらくこの部屋で一人にしてくれませんか」

執事はあからさまに難色を示した。

はつきりと口に出しては言わなかつたものの、高価な書物や調度品が並べられた一室に怪しい死霊術士だけを置いて目を離すわけにはいかない、とその目が物語っている。

が、それでも結局は死霊に対する恐怖が勝つたらしく、執事は大人しくラダの言葉に従つて部屋を出て行つた。

執事がいなくなると、ラダはため息を吐いて白い杖を握り直した。

「シホ」

低い小声で話しかけられ、志穂は少し首を傾げた。

「何？」

「仕事が終わるまで、俺の傍を離れないでくれ」

言われないでもそうするつもりだつたが、何かわざわざ口にして頼むだけの理由があるのだろうか。

「靈感のない人間の目にも見えるほど、強い恨みを持つて現世に執着している靈は、大抵の場合見境がない。シホにも害が及ぶ危険性がある」

「……靈は靈を傷付けることができるの？」

志穂は思わず顔を引きつらせた。

「いや、血を流すという意味では傷付くことはない。ただ……死者は肉体を持たない故に、色々と影響を受けやすいものだから。特に怨念は猛毒だ。何か変だと思つたらすぐにこの杖に縋つた方がいい」

何だかよく分からぬが、ラダが危ないというからには危ないのだろう。

分かった、と頷くとしたとき、不意になればずの背筋が冷えた。

何かがいる。

自分でもよく分からぬ、勘としか言い様のない力で、志穂は直感した。

何か得体の知れないものが、志穂とラダを見つめていると。

「……シホ」

言葉少なに促され、志穂はそろりとラダの傍へ寄った。

青年は険しい顔で書斎を見渡している。

ほんの十数秒、けれども果てしなく長く感じられた沈黙の後、彼はふと本棚の隅に目を留めた。金箔で縁取られた、とても高価そうな革表紙の本に手を伸ばし、躊躇なく引き抜く。

次の瞬間、志穂は危うく悲鳴を上げるところだった。ラダの背後に、何の前触れもなく女の姿が現れたのだ。

顔形は美しい女性である。腰近くまである長い巻き毛の金髪を垂らし、色鮮やかな刺繡が施されたドレスを着ているが、その足は地面に接することなくふわふわと浮いていた。

女は青白い手を持ち上げ、ラダの首に手をかけようとする。

だが彼は動じることなく、右手に杖を、左手に本を持ったまま振り向いた。そして、

「お前の名は？」

そう冷静な口調で訊ねた。

死靈の女性は少しばかり戸惑ったように動きを止め、形の良い眉をひそめて青年を見つめた。そんな仕草は、いく普通の女性のよう見えなくもない。

「俺はラダという。お前の名は？」

そう問い合わせを繰り返しながら、死靈の女性と見つめ合ひラダを、志穂は傍らではらはらしながら見守る。

「……カレン」

やがて女性はぽつりとそう答えた。か細く透き通るような声だった。

「どうして貴方は私を見て怯えないの……？」

彼女は不思議そうに訊ねた。

「（）の者は皆、私を恐れる……悪靈と呼ぶ……私は何も悪いことをしていないのに……」

屋敷中の人間の首を絞めて回ったのではないかと志穂は思ったが、口には出さなかつた。女性はどうもラダのことに気を取られ、志穂の存在には気付いていないようだ。

「何もしていないと？」

「ええ……何も……」

「ならば何か行き違ひがあつたのかもしれない。カレン、お前はいつも、屋敷でどう過ごしている？」

死靈の女性、カレンは子供のように首を傾げた。

「私は……いつも……あの人人がやつたようにする……」

「あの人？」

青年の声に鋭さが増す。

「私の大切な……大切な……この方が幸せになると……暗い書斎……最初は苦しかつたけど、とても気が楽になつた……」

断片的で、とても意味の繋がらない言葉。

けれどもそれに耳を傾けているうち、志穂の脳裏に、奇妙な光景が思い浮かんだ。

蠟燭一つしか明かりのない、薄暗い書斎の中だった。

閲覧台に一冊の本が広げられている。金箔で縁取られた高価そうな書物だ。

その傍で、男性と女性が一人で何事か話している。二人とも険しい顔で、何事か揉めているようにも見えた。

やがて女性が後ろを向いた途端、男性は手に持つた縄で女性の首を締め上げた。

苦しみ暴れる女性の手が閲覧台の本に触れて、そして 。

「シホ？」

ラダの声に、志穂ははつと我に返った。

暗い書斎の中をきょろきょろと見回す。だが、先程見たものではない。閲覧台はどこにもない。そう、ここはラダの仕事のために訪れた、ブレニー子爵の屋敷の中だ。

「どうした。……何か見えたのか？」

心配そうに訊ねられ、小さく頷く。

まさに『見えた』という表現がぴたり当て嵌まる。他に表現しよつのない感覚だった。

「書斎で……」には違う書斎の中で、男の人が、女人の首を……」

最後まで言い切ることはできずに、志穂は言葉を濁した。

首を絞められた女性の顔。

あれは確かに、今日の前にいる死靈の女性と同じ顔だった。

「どうか……分かった」

ラダは真剣な顔で頷くと、女性の方へ向き直った。

「幸せ……幸せ……」

カレンといひ名の女性はもつらラダのことすら見えていないようだつた。ただうつとりとした顔で、思い出に浸つてている。

「だから、私、皆に幸せを分けようと思つて……思った、のに……

あの人に……幸せになるようにと

不意に彼女の言葉が途切れた。

細い肩がわなわなと震えだし、美しい顔が険しくなり、細い手がきつく握りしめられる。

志穂は胸の内が苦しくなるのを感じた。

どうして、と思った。

どうしてあの人は、こんなに恐怖の顔を浮かべたまま冷たくなつてしまつたのだろうか？

どうして皆私を恐れるのだろうか？

どうして、どうして、どうして幸せになつたはずの私は、こ

んなにも辛いのか？

それらの感情は、決して志穂自身の中から来る思いではない。
おぞらくは、田の前にいる女性の心。それが何故か、自分のもの
のように感じられるのだ。

「カレン」

ラダは静かに女性の名を呼んだ。

「お前はもう、過去を忘れて沖つ国へと船出するべきだ。このまま
ここにいては、お前はもつと不幸せになつてしまつ」

カレンはのろのろと顔を上げ、ラダを見つめた。

「道が分からぬならば、俺が手助けしてやれる。さあ

そう言って差し伸べられた青年の手を、しかしカレンは取らうと
しなかつた。彼女は能面のような無表情で彼の手を見つめた。そし
て、

「ラダ！」

胸を突き刺すような感情の奔流に、反射的に志穂は叫んだ。叫ば
ずにはいられなかつた。

それは憎悪だつた。

何もかも消えてなくなつてしまえといつ、血暴自棄な破壊の意志
だつた。

志穂の叫びに反応した青年が驚いたよつて思わず手を引っ込めた
のを見て、カレンは笑つた。

「不 幸 せ ？」

彼女の美しい顔が見る見るうちに歪んでいく。

「手助け？ 戯言を！」

カレンは叩き付けるような怒声を浴びせかけると、ふいと踵を返
して書斎の外へと出て行つた。

書斎の外から、扉越しにあの執事の叫び声が聞こえた。
慌てて外に出たラダに従い、志穂も書斎を出る。

そして息を呑んだ。

暗い廊下の真ん中に、執事が立つていた。

執事の頭はがくくりと力なく頃垂れ、唇の端からは涎まで垂れる。どう考へても氣絶しているように見えるのに、彼の体はその場に倒れる気配がない。まるで糸で操られた人形のように、少し傾いた奇妙な姿勢で佇んでいる。

執事は頃垂れたまま、書斎から出てきたラダに飛びかかつてきた。ラダが横に跳びすさつてそれを避けると、執事の体は扉にぶつかり、跳ね返つて床の上に崩れ落ちた。

しかしすぐに起き上がる。顔には痣ができていたが、執事は何事もなかつたかのようにラダの方へと向き直つた。

志穂はぞつとした。まるでホラー映画に出てくる化け物のようだ。「カレン。その男から離れる。彼はお前とは何の関係もないはずだ」ラダは鋭い声で、執事に向かつて言つた。

すると、執事の肩の少し後ろの辺りにあのカレンの姿がぼんやりと浮かび上がつた。白い指先が執事の首に掛けられている。

彼女が執事の体を無理矢理動かしているのだ。志穂はそう気付いた。

「私は死者の国になど行かない！ 行くものか！」

カレンは、先刻のか細い声が嘘のような苛烈さで叫んだ。

「もう、おしまい。皆、私を恐れるばかり。幸せになれない。だから……、この男もあの人と同じようにしてあげる」

カレンの指先が、ゆっくりと、しかし確実に深く、執事の喉元に食い込んでいく。

殺す氣だ、と志穂は悟つた。首を絞めて殺す氣なのだ。

彼女が男にそうされたように 彼女が男にそうしたように。

ラダは一瞬、唇を噛みしめたようだつた。

だが彼が躊躇うような素振りを見せたのはほんの一瞬のこと、すぐには表情を消して白い杖を振りかざした。

「 ラダの名において命じる」

その声はあまりに低く、はつきりとは聞き取れなかつた。だが彼が続いて紡ぎ出した呪文の響きは、以前耳にしたものとよく似てい

るような気がした。志穂を船出させようとした、あの時のもの。

カレンがはつと怯えたように後ずさり、執事の体から離れた。途端に執事の体はその場に崩れ落ち、床の上に倒れ込む。

だがラダは少しも表情を変えず、呪文を唱えながらカレンに杖の先を向けた。

「やめて！」

カレンは蒼白な顔で悲鳴を上げた。

「いや、やめて、私は船出などしたくない！」

悲痛な叫びにも、ラダは呪文を唱えることを止めない。

ただただ冷たい無表情で、彼は呪文の最後を二つ締めくくった。

「 還るべき国へ行け」

悲鳴が止んだ。

志穂は思わず口元を手で覆つた。

カレンの姿が見る間に薄くなつていいく。腰近くまである長い巻き毛の金髪が、ドレスが、美しい顔が虚空に溶けていく。白い手がもがくように宙を掴んだが、その手もやがて霧散して消えていった。あまりにも呆気なく、カレンの痕跡すらもう見えない。

そうして後に残つたのは、静寂と、顔に痣を作つた執事の体だけだった。

ラダは杖を下ろして小さく息を吐くと、倒れている執事の傍に近付き、軽くその肩を揺さぶつた。

執事の男はわずかに呻き声を上げると、頭を押さえながら起き上がつた。そして目を瞬かせ、状況が把握できないかのように周囲を見回す。どうやらカレンに操られていた時のことは何も覚えていないようだ。

「死靈は去りました」

そんな執事を見下ろして、ラダは端的に事實を告げた。

執事は呆気に取られたように青年を見上げている。半信半疑の色がその目の奥を掠めた。

だが青年は説明のためにいちいち言葉をぬぐしたりせず、無愛想

に続けた。

「もう貴方がたは悪霊に悩まされることはないでしょう。報酬はそれを確認した後で構いません。仲介人から裏町のケル婆に渡してくだされば結構です」

それだけを言い残すと、まだ呆然としている執事を残して、ラダは屋敷から立ち去つていった。

「……あの、ラダ」

屋敷から出た後、その外観が路地の角に隠れて完全に見えなくなつた頃を見計らい、志穂はおずおずとそう声をかけた。無論、周囲に人気がないことを確認してから。

「何だ？」

返つてくる声は存外柔らかく落ち着いている。

「あのカレンという人は、その……船出、したんだよね」

「ああ」

「それは、その、なんていうか……ラダの術で……ええと」
彼女の意志を無視して強引に船出させたのかという言葉は、さすがに口にすることはできなかつた。だがラダは志穂の言わんとすることを察したのか、首を振つた。

「……できれば、彼女自身に納得して船出してもらいたかつた」
先刻の冷ややかな態度とは違い、その呟きにはかすかな哀れみが含まれている。そのことは志穂の胸に安堵の思いをもたらした。
正直なところをいえば、無慈悲に呪文を唱えてカレンを消し去つた青年の姿はとても恐ろしく感じられたから。

「だが彼女はもう、人に害なす悪霊と化していた。あのままではまた人を殺していくだろう。ああするより他に手がなかつた」

志穂は思わずうつむいた。

カレンの言動は明らかに脈絡がなく、真っ当な思考が失われていた。恨みの強い死霊はああなつてしまふものなのだろうか。大切だ

と思つていたような人に殺されてしまつたら。そしてその人を殺してしまつたら。

同じ靈でも、自分は違つ、と思いたい。志穂は誰かに危害を加えようなどとは思わない。しかし。

「……あの人の感情が、胸の中に流れ込んできたの」

感情だけではない。おそらくは彼女が死んだ時の過去の情景もこの目に見えたのだ。

死者は体を持たない故に、色々と影響を受けやすいとは、こういうことだつたのだろうか。そう訊ねると、ラダは神妙な顔で頷いた。「魂だけの存在であるせいなのか、死靈は、他の死靈や……時には生きた人間の思いや記憶をそのまま感じ取つてしまふことがある。そのせいだろ?」

そう言つて、ラダは少し申し訳なさそうに眉を下げた。

「すまない。辛い思いをしただろ?」

志穂は首を横に振つた。

彼女が感じたのは、あのカレンという女性の痛みだ。志穂自身が辛いと感じたわけではない。それを無関係の志穂が辛いと思つことは、カレンに対し失礼な真似のような気がした。

ラダはきちんと仕事をした。カレンが人を殺し、またあの執事を殺そうとした悪靈であることは確かで、その彼女を祓うのは正しいことだ。

それでも消える寸前のカレンの恐怖の表情が、存在しない脳裏にちらついて離れない。

この世界の死者が行くという沖つ国という場所が、優しく穏やかな場所であればいいと思った。もしそうならカレンも、向こうで少しは安らげるかもしない。

未だに船出を拒む死靈の身でそんなことを思つるのは滑稽だと分かっている。

だがそれでも、志穂はそう思わずにはいられなかつた。

裏町のあの老婆のところへ戻つてみると、ラダは淡々とした口調で仕事の完了を報告した。

老婆は上機嫌になつて、子爵から報酬が届けばすぐに知らせると請け合ひ。

ラダは頷くと、用は済んだとばかりにわざと踵を返そつとした。しかし、

「半端者の似非術士どもとは訳が違つ。さすがは死の民の生き残りだね」

老婆が口にしたその言葉に、青年は志穂が驚くほどの剣幕で振り返り、老婆を睨み付けた。その甲は、志穂がこれまで見たこともないほど激しい怒りの色に染まっていた。

「その言葉を口にするな。以前にもそう言つたはずだ」

田つきの苛烈さとは裏腹にこれ以上ないほど冷ややかな聲音に、老婆はさすがに怯んだようだつた。

そしてそれをじまかすように、わざとらしく口調を作つて呟く。

「おやおや、穏やかじやないね。少し口が滑つただけじやあないか」

そんな老婆をしばらく睨み付けた後、ラダは小さく息を吐いて、今度こそ踵を返した。

そのまま足早に立ち去るうとする死靈術士の青年の背中に、老婆

は最後にこんな言葉を投げかけた。

「……お探しの竜は見つかったのかい、ラダ？」

ラダは答えなかつた。

第六話 船流し

ラダは眠りが浅い。

少しでも物音がすればすぐに目を覚ますし、就寝時間がどんなに遅くなつても、必ず夜明け前に起きてくる。Hテルベリに滞在する間もそれは変わらなかつた。

毎日朝早くに起きて街道を歩き続ける過酷な旅から一時的に解放されたのだから、疲労を癒すためにも、もつとゆっくりすればいいのにと志穂は思うのだが。

「あいつは昔からああだよ。夢を見てうなされないだけ、昔よりもましになつたかな」

と、水煙亭 の元主人の死靈、ジェフは訳知り顔で言つ。

ラダは今、賑やかな食堂の片隅で食事を取つてゐる。旅路の最中にいつも口にしていたような濁つた豆のスープではなく、温かそうな湯気の立つている玉葱と人参のスープと、汁物に浸さなくとも食べられる硬さの黒パン、ベーコンと炒り卵、それにチーズという、真つ当においしそうな食事だ。

志穂はそれを少し離れたところで眺めながら、同じく食堂で客の応対をしている女主人を見守るジェフと会話を交わしていた。

「ジェフさんは、ラダと昔から知り合いなんですか？」

「ああ、初めて会つてからもう五、六年になるかな。あいつもまだお嬢さんと同じような年頃で、まあ生意氣そうな顔をしていてね」

そう言われて、志穂はふと中学の同級生の男子のことを思い出した。

いつも明るく騒がしい少年、お調子者で妙に女子にちよつかいばかりかける奴、教室の隅で本ばかり読んでいる大人しい子。クラスの中だけでも色々な男子がいたが、ラダにもあんな年頃の時があつたのだろうか。

今の落ち着いた感じの青年の姿からすると、正直などこの、あま

り想像がつかない。

「船出することが靈にうつっても世界にうつても一番良いことなのだ、なんて、顔を合わせる度に説教垂れてね。そのくせ悪夢にうなされると飛び起きて、朝が来るまで部屋の隅で震えてた……俺が心配して話しかけても、うるさい消えろ、って叫んでや」

志穂は眉をひそめた。

今のラダが悪夢にうなされている様子は見たことがないが、志穂と同じ年頃の少年が悪夢にうなされて震えるというのは、背景に何か複雑な事情が垣間見られるような、詳しく聞くことが躊躇われるような とりあえずあまり穏やかでない話である。

「そういう調子だから、ヘイゼルも随分心配して、あいつの世話を焼いてたもんだよ。昔から弟が欲しいって言つてたしなあ。あいつがエーテルベリにふらふらと現れては、ちょっと滞在してすぐにはくなる度、またどこかで行き倒れてやしないかつて気に揉んでや。まったく」

そんなことを言いながら腕を組むジェフの視線の先で、食事を終えたラダが立ち上がった。心なしか、いつもより満足そうな横顔をしている気がする。やはり彼も濁つたスープよりは透き通つたおいしそうなスープの方がいいらしい。

「ともあれ、あいつはどうも、人と仲良くするつてことが苦手みたいだからね。靈とはいえ、あいつが他人を傍に置くなんて今までなかつたことだ。お嬢さん、なるべく仲良くしてやつてくれよ」「はい、と志穂は頷いたものの、本当にそうできるのか、あまり自信は持てなかつた。

志穂とラダの関係は、あくまで旅の道連れに過ぎない。

青年の言葉を借りれば利害の一一致で果てまで共に行くという契約を交わした、ただそれだけの関係。

そもそもラダが自分のことをどう思つているかも定かではないのだ。

ラダはよく親切にしてくれると思うが、それだって志穂があの山

里で殺されたばかりの死靈で、何も知らないまれびとで、しかも年下の少女だからだろうとも思つ。

さらに客観的に見れば、志穂の方が彼の杖に勝手に取り憑いた死靈なのである。今のところあまり迷惑はかけていないと思いたいが、成仏を拒んで彼の母の形見に取り憑いた時点で迷惑をかけている気もする。

志穂が今までにラダの役に立つたことといえば、あの白い杖を盜難から取り返したことくらいだろうか。いくらラダ本人が「付いてくるだけでいい」と言つても、なんだか居心地が良くないことは変わりなかつた。

今日のラダは、宿の中庭の井戸のところで着替えの服を洗濯をしたり、旅の間に破れた外套の裾を縫つたり、買い出しに行つたりと動き回つていた。

その間、志穂はやはり何もすることがない。

意識すれば物は持てるのだから、部屋での縫い物くらいなら手伝えるかと思ったのだが、ラダの針遣いはとても素早く手慣れていた上に、縫い目も非常に細かく、せいぜい家庭科の教科書通りにしか針と糸を使えない志穂ではとても太刀打ちできそうになかつた。何でも、何年も一人で旅暮らしをしていると自然にこういう技が身につくものなのだそうだ。

そんなわけで、志穂は何の役にも立てないまま、ラダが買い出しに行く際に部屋に置いていつた白い杖の傍で留守番をしている。とはいへ、

「死靈つてのは暇だらう。額に汗して働く必要もないし、話す相手もそりゃない」

幸い、ジョフが時々部屋に来て 無論壁や床や扉をすり抜けてだが 話しかけてくれたので、それほど退屈することはなかつた。

「お嬢さんはどこの国から来たんだい？ その顔立ちにその服、アーフェル人じゃないだろう？」

だが、そう訊ねられた時は困った。

日本といつても分からぬだろうし、別の世界から来たと言つて、すんなり受け入れてくれるとは限らない。『まれびと』という存在を普通に受け止めていたラダは、ジョフやヘイゼルのような街の人々とはかなり毛色の違う人物のようだから尙更である。

「ええと、ここからはずつと離れた国です。」

仕方なく曖昧に返答した志穂に、ジョフはさらに問い合わせを重ねることにはしなかった。何か事情があるのだろうと察した様子だった。

「あの、それより……ジョフさんは十七年ここで過ごしているんですね」

良い機会なので、志穂はジョフに死靈として過ごすことがどんな風なのが訊ねることにした。

何せ彼は十七年も靈体の状態で過ごしているのだ。志穂が気付いたこと、ラダが教えてくれたこと以外にも、靈という存在について具体的に知っているかもしねりない。

「うーん、十七年つていっても、靈の世界じゃまだまだひよっこみたいなもんだけだね。俺が知ってるだけでも、通りの向こうにある教会に憑いてる爺さんは、百年前からあそこにこるつて言つし。ラダも説得を早々に諦めたほどの頑固者さ」

「百年……」

生きたのはたった十四年、靈体となつてからまだ一ヶ月も経たないような少女には想像もつかない、途方もない年月である。その老人は、どんな思いでそんなに長い間死靈として地上に留まっているのだろう。

「それに俺はラダの奴みたいに知識があるわけじゃないから、ほとんど体感だけど。それでもいいなり」

「そう前置きしてから、ジョフは死靈として過ごすことについて、丁寧に教えてくれた。」

靈に確かに実体はないが、自分の意志次第で実体のあるものに触れることができる。これは志穂も既に把握しているが、物だけではなく、人や犬などの生き物にも触ることはできるという。

「ただしこっちが真っ当な死靈で、触れられる方に靈感がないと、大抵の場合は気付かれないな。せいぜい誰かに肩を叩かれたような気がする、で終わりだ。ラダみたいにはつきりと死靈の姿を見ることができて、おまけにあっちからも俺たちに干渉できるような人間は相当稀だと思うよ。俺もあいつ一人しか知らないし」

それから、何かに取り憑いている靈はその物や人や土地から遠くへは行けないこと。ジェフに杖を見てもらつて試しに宿の外に出てみたが、杖から直線距離で何十メートルも離れることはできなかつた。

ジェフが憑いているのはヘイゼルのいるこの 水煙亭 そのものだが、彼はこの宿から周囲百メートルくらいはうろつけるそうだ。その辺りは年季の差なのだろうか。それとも憑いているのが物品か土地かの差なのだろうか。

「どうだかなあ。さつき言った教会の爺さんは一歩も教会から出ないよ。俺はぎりぎり教会に足が届くから、たまに顔を合わせられるけど」

その他にもジェフは、色々なことを語ってくれた。

靈でも五感を最大限に活用しようとすればものを食べられないうことはないが、栄養になるわけではないし、飲み込んだ食べ物は消化されずにベチャリと床の上に落ちることになるので、あまりお勧めはしないこと。

眠ろうと思えば何日でも眠れるが、靈の眠りに真っ当な意味での夢が訪れるということ。

靈の姿は自身の生前の記憶から形作られているものだから、やううと思えば服を替えたり、若い時の姿に変わったりできるが、やりすぎると段々自分の元の姿が分からなくなつて存在が薄くなり、しまいには消えてしまいかねないので気を付けること。

実体あるものに干渉する術として、普通に触れる以外にも『憑依』して直接動かすという手段があるが、これを生者に対して行うとその者の記憶や感情にいつもより影響されやすくなること、何より悪霊の類がよくやる行為があるので、人に憑依している霊を見つけたら避けた方がいいこと。

最後に彼は、何やらしかめ面を作った。

「 生者に無闇に干渉することは、人に躊躇いなく害を為す悪霊への近道。もしお前が悪霊と化せば、俺はお前の意志を無視してでも船出させる。そうしなければ、人を害する悪霊は無数の怨念を溜め込み、怨念は毒蛇と化して、やがては世界の理まで崩壊しかねない」

どこかで聞いた覚えのある生真面目な口調でそう言つと、ジエフはふつと表情を和らげてかすかに苦笑した。

「 そつラダに言われたことがあるよ。大仰だと思うかもしれないが、お嬢さんも覚えておいた方がいい。俺たちは鏡にも映らないような死者で……、ここは本来俺たちのいるべき国じゃないんだ、って」それを忘れて思つままに振る舞おうとすれば、いざれ反動が来る。

ジエフの真剣な忠告に、志穂は無言で頷いた。あのカレンという女性も、生きた人間を殺してしまわなければ、怨念に囚われてあんな風になつて、ラダに強引に船出させられるようなことにはならなかつたはずだ。

(……でも、なんだか……)

それでもかすかに胸が痛むのは何故だろ。

腹の底のどこかで納得できない思いが渦巻くのは何故だろ。

ラダが死者を目にし言葉を交わし触れ合える死霊術士の青年であつても、彼はあくまで生者だからだろうか。どんなに人を避けて無愛想にしても、彼はちゃんと生きた人間の目に見える存在ではないかと、そう思つてしまふからだろうか。

「 ともあれ、悪霊なんて言われるような質の悪い奴はもちろん、少

しでもおかしいと思つた靈には近付かない方がいい。まあ、お嬢さんがラダの杖に憑いてるんなら、あいつの仕事上なかなかそうもいかないかもしねえが、なるべくな

「はい。ありがとうございます」

志穂は深々と頭を下げた。

「他に何か聞きたい」とはあるかい？ アーフェルのこととか、この街のこととか

そう言われて、志穂が真っ先に思い出したのは、昨日あの怪しげな老婆が口にしていた言葉だつた。

死の民。

そして、竜。

「あの、ジエフさん」

そう声を上げてから次の言葉を発するまで、志穂は一拍の間を置いた。

さすがに死の民といふ言葉について聞くことは憚られた。あの言葉を耳にしたラダの激しい反応を見る限り、彼は明らかにそう呼ばれることを嫌つている。

「竜つて知つてますか？」

「竜？ 英雄王が退治したつていう？」

思いも寄らない返答が返ってきて、志穂は思わず目を丸くした。

あの山里では、門や廃墟の石床 ラダ曰く祭壇に、竜の彫刻や絵が描かれていた。とても英雄に退治されるような化け物として扱われているようには見えなかつたのだが。

「この国が出来た頃の話だつていうから、それこそ何百年も前の伝説だけだ。このアーフェルを建国した英雄王ギイ・ユオルは、かつて悪い化け物 竜に恋人の姫を攫われたんだとさ。それで英雄王がその竜を退治して姫を取り戻し、めでたしめでたし、つていうまるで神話やお伽噺のような筋書きだ。

口には出さなかつたが、顔つきを見るに、ジエフもその伝説が眞実であるとはあまり信じていられない様子である。

「そんなわけで、アーフェル王家の紋章はその退治された竜なんだよ。それに聖堂に行けば、壁画やら銅像やらがたくさん飾つてあるよ。竜殺しの英雄王、聖ユオルのね」

聞き覚えのある言葉に一瞬ぎくりとしたが、例の騎士団とは直接関係があるわけではないらしい。

ジェフの説明によると、この国の教会はその英雄王を、神に力を授けられた聖人として崇めているのだそうだ。それで教会の聖堂は、彼の竜退治の伝説を元にした壁画や彫刻、銅像で溢れているらしい。聖ユオル騎士団に限らず、聖ユオル大聖堂や聖ユオル修道院など、聖人の名前を冠した団体や建築物も数多いそうだ。

屈強な戦士が竜を懲らしめている場面がチャペルのような建物の壁一面に飾られている様子を思い浮かべ、あまりの違和感に志穂は思わず首を傾げてしまった。

「ああ、そういうやラダが前になんか言つてたな。竜つてのは船流しの」

そう言いながら、ジェフはふと部屋の窓から外に視線を向けた。三階の窓のずっと下方には石畳の小路があり、時折通行人が歩いているのが見られる。中にはこの 水煙亭 の建物の中へ入つていく者もちらほらいたが、ちょうど今ドアベルを鳴らして入つていた若い男性の訪問者を見て、ジェフは突然忌々しげに表情を歪めた。

「あの盗人野郎、また来やがつた！」

物騒な言葉を吐き捨てる、ジェフは驚く志穂に向かつて、

「すまんお嬢さん、ちょっと用ができる」

そう言い残すなり、さつさと床をすり抜けて階下へ消えてしまつた。

志穂がしばらく一人で首を傾げていると、ラダが買い物の品を腕に抱えて部屋に帰ってきた。

先程のジェフの剣幕のことを話すと、珍しく青年は顔を綻ばせて吹き出しかけたようだつた。

「今下に行けば、ジョフの面白い姿が見られるぞ。気になるなら見に行つてくるといい」

三階の部屋から一階に行く程度の距離なら、志穂も杖から離れて行動できる。

ジョフのように床をすり抜けるのはまだ少し怖いので、志穂は普通に歩いて階段を下り、一階の食堂へ向かった。

食堂には宿の女主人ヘイゼルもいて、箒を手に床を掃きながら、若い男性と親しげに話している。男性の方も布巾を手に掃除を手伝つているようだ。

ジョフは一人から少し離れたところに立ちながら、腕を組み、まるで監視するように一人を 正確には男性の方を睨み付けていた。「……それで大騒ぎだつたんですが、結局棚の下に潜り込んでいるのが見つかって」

「あら。妹さんもなかなかやるわね」

男性と話すヘイゼルはとても嬉しそうだし、男性の方もヘイゼルに好意を抱いているようだ。何もそんなに睨むほどの問題があるようには志穂には見えない。

しばらくして、掃除と話が一段落すると、一人は別れの挨拶を交わした。

「では、ヘイゼル、また後で」

「ええ。待ってるわ、ジョフ」

彼女の父と同じ名前を持つらしい若い男性は、柔らかな微笑みを残して宿を出て行く。

ちょうど杖を持って下に降りてきたラダはその後ろ姿を見送ると、険しい顔で腕組みをしたままのジョフにちらりと視線を向けた。どこか面白がるように。

そして女主人の元へ歩み寄り、

「結婚はいつなんだ？」

と、無表情のまま訊ねた。

ヘイゼルは少しばかり照れくさそうに笑み、ジョフはますます不

機嫌そうな顔つきで壁をすり抜けて別の場所に行ってしまった。

「来年の春のはじめには挙式の予定よ」

「そうか。おめでとう」「う

ラダは表情こそ変わらなかつたが、口調は普段志穂に対するときのように柔らかかつた。やはりいつも無愛想はわざとなのかもしない。

ありがとう、と受け答えしながら、ヘイゼルはふと視線を別な方に逸らした。

その視線の先には、壁にかけられた肖像画がある。

まだ二十前後と思しき若い夫婦と、幼い娘が幸せそうに微笑んでいる絵だった。

濃い茶色の髪をした夫の方は、生前のジェフだろう。そして父から同じ色の髪を、母からは緑色の目を受け継いでいる幼い娘は、水煙亭の女主人ヘイゼルに違いかつた。

「……ねえ、ラダ、お父さんはまだ……私の傍にいるのかしら?」

ヘイゼルはぽつりと呟くように訊ねた。その横顔に浮かぶ表情は柔らかく、懐かしい思い出を見るような眼差しは、同時にどこか悼むような色がある。

「ああ。……さつきまでそこにいて、お前の婚約者を睨み付けていた」

ラダが真面目な顔で答えると、彼女はくすくすと笑つた。

「お父さんつたら。彼はとてもいい人なのよ。一緒にこの宿を守つていいくつて約束したの。拗ねないでちょうどいって、伝えておいてくれる?」

ラダは黙つて頷いた。

どうやらヘイゼルという女性はラダが死靈を見ることのできる青年だと知つていて、自分の父親が死靈となつて娘を見守り続けていることも知つてているらしい。

「……だから、そんなに心配しなくてもいいのよ。私はもう大丈夫。そう、伝えてね」

ヘイゼルはそう静かな声で続けると、ふわりと微笑んだ。昔の悲しい出来事を忘れずに受け止めて、それでも悲しみに囚われずに前へ向いている。そんな微笑みだった。

ラダはやはり無言で頷く。

(……私のお父さんとお母さんはどうしてるんだろう)

ふと志穂はそのことが急に気になつた。旅の途中は見知らぬ世界に慣れることで頭が一杯で、日本に思い馳せる余地はあまりなかつたから、久しぶりに感じたその郷愁は以前よりも一層彼女の胸を締め付けた。

果てへ辿り着いて、もし志穂が日本に帰れたとして　この死靈の姿のまま帰つたとしたら、それでも両親は娘を受け入れてくれるのだろうか。

例え見えなくとも、話せなくとも。

ヘイゼルが父を思つていつるように、娘を思つてくれるだろうか…

「そうだラダ、今夜は船流しから、食堂は閉めるわ。夕食をここで取るなら早めに言ってちょうだいね」

「ああ……もうそんな時期なのか」

分かつたと頷き、ラダは一旦踵を返して階段を上がつていった。彼と共に部屋に戻ると、窓辺のところで濃い茶色の髪の男性が黄昏れていた。

ラダがその傍に近寄り、先程のヘイゼルの伝言をそのまま口にして伝えると、ジエフは複雑そうな面持ちで振り返つた。そしてため息を吐くと、

「まったく、本当にできた娘だよ、ヘイゼルは。……これで男親の気持ちも汲んでくれれば、言うことなしなんだがなあ」と、しみじみ呟いた。

「別に相手の男に問題があるわけではないのだ」

「ないさ。富裕な商人の次男で、文武両道、人柄も申し分ない。」

「文句のつけようがないから、気に入らないんだよ。まったく、お

まけに名前まで俺と同じだった……」

「あ、ともう一度深いため息を吐くと、ジョフは肩を落として部屋から出て行った。

壁に消えていくその後ろ姿を見送りながら、志穂は首を傾げて呟いた。

「……ジョフさんは、寂しいのかな」

「ジョフの魂を地上に留めている執着は、一人になつた娘を心配する思いだけだ。だから、その執着の元が消えていくことへの恐れもあるのだろうが……まあ、結局のところ男親というものは、突然現れて娘を奪っていく男はすべて敵に見える生き物なんだろう」

「ヘイゼルさんの恋人は急に現れたの？」

「いや。確かに交際しはじめてもう二年にはなると聞いている」

それならもう諦めてもいい頃だと思うが、そういうわけにはいかないのが父親というものらしい。

中学生になつて、彼氏だ化粧だと浮つきはじめた同級生たちの中には、そのことで父親と喧嘩する子もいた。そんな思春期の流れからなんとなく取り残されていた志穂には、もちろん彼氏もいなければ少女漫画で見るような恋愛もしたことがなかつたので、そのあたりの機微はよく分からぬ。

「そういえば、ラダ。船流しつて？」

「この辺りに伝わる古い習慣だ。アーフェルが建国されるより以前の、異教の時代に由来するものだと。……昔は盛大な祭りだつたそうだが、今は一部の市民の間で細々と続けられる伝行事だな」

そう説明して、ラダは志穂を見下ろした。

「興味があるなら、見に行くか？」

限られた土地をできるだけ有効活用しようといつての川岸にせり出す勢いでずらりと立ち並ぶ家々の合間に、通り道はわずかに存在する。その暗い道を抜けて細い階段を降りた先に、川が運んで

きた土砂が少しづつ堆積して形成されたと思しき砂地がある。

志穂とラダは、川を見下ろせる人気のない階段の陰に二人並んで腰掛けていた。

もうとうに日の暮れた時刻、見下ろした川縁の砂地には篝火が焚かれ、既に多くの人々が宵闇に紛れて集まっている。街の賑やかさからすると微々たる数かもしれないが、きっと千人くらいはいるだろう。それが全員生きた人間なのか、それとも中に何人か死靈が紛れ込んでいるのか、志穂には判断がつかないが。

彼らは各自の手に、小さな人形を持つていた。

布の切れ端で作られたと思しき簡素なもの、木彫りで丁寧に形作られたもの。形も色も大きさも人それぞれ違う人形を、やはり老若男女様々な人々が持ち寄っているようだ。

ヘイゼルも、あのジェフと同じ名前の若い男性と寄り添いながら、手作りの人形を二つ手にしていた。

「あの人形は？」

「……死者の似姿だ」

ラダの答えに、志穂ははっと息を呑んだ。

川岸にはいくつか船が用意されていた。船といつても、大きなものでせいぜい洗濯桶程度の小さな木造船で、到底人が乗れるほどではない。船の舳先には一様に同じ形をした船首像が取り付けられ、船尾のあたりには蝋燭の明かりが灯されていた。

人々はそれらの船に、持ち寄った人形を載せていった。

あつという間に人形の積み荷でいっぱいになつた船は、順に川へと送り出され、しばらく川面を漂つた後、流れに従つて少しづつ下流へと進みはじめた。

暗い川面に、船尾にゆらめく蝋燭の炎の明かりがぼんやりと映り込んでいる。

「亡くなつた親しい者の生前の姿を象り、人形にして乗せ、あの船で流す。……死者の魂が川を下り、やがて海に出て、沖つ国へと無事に辿り着けるように」

灯籠流しのようなものだろうか、と志穂はお盆の時期にテレビで見かける光景のことを思い返した。

夜の闇の中、赤々と燃える灯火が川に流されていく、あの幻想的な光景。確かあれば、お盆に帰ってきた死者の魂を再びあの世へと送り出すための行事だつただろうか。

「今は交易船の妨げになるというので、あの船も少し先の下流で回収されて燃やされる。参加者も年々減り続けているそうだ。……それでもあそこにいる人々は死者を思つて人形を作り、船を流し続けている」

ラダの説明を聞きながら、通り過ぎていく船を眺めながら、志穂はふとその船首像に目を留めた。

長細い胴体の先に長い首がくつついたような、奇妙な動物の形をしている。どちらかといえば蜥蜴に似ているが、頭には角のような棘のようなものが生えていた。

「これは、何の動物を象つたものなの？」

「……竜だ」

その答えに、志穂は思わず目を見開いてラダを見上げた。

「竜は、今この国では不吉な存在だとされている。かつて英雄王が退治した死を呼ぶ化け物だと。だからこれが竜だとは誰も言わない。実際に知らぬ者も多いだろう。……だが、あれは竜なのだ」

そう語る青年の横顔はどこか寂しげだった。

「竜が船になつて、死んだ人を運ぶの？」

問いかながら、志穂はまた質問ばかりしている自分に気付いた。少しは控えようと思つていたはずなのに、心に決めたことをちつとも実行できていない。

「……そうだ。竜の船は世界を巡り、船出できぬ死者たちの魂を乗せて、海の遙かかなたの沖つ国へと運ぶ。かつて、そういう存在が世界にいたという」

いた、ということは、今はいないのだろうか。だからラダは探しにいるのだろうか。

いなくなってしまった、竜という存在を。

死者の人形を乗せた木造の竜の船は、船尾の灯火だけが照らす闇の中、川面をゆっくりと漂いながら少しづつ下流へと向かっている。川縁の人々は、静かに息を潜めるようにして船の流れる様を眺めている。

すすり泣く人もいた。祈るように両手を握り合わせている人もいた。肩を寄せ合い悲しみを分かち合っている人たちもいた。

その不思議な光景を胸に焼き付けながら、志穂は目を閉じた。そして思う。

人は何故生まれ、何故死者となり、死靈となるのだろう。

死靈とは何なのだろう。

死者が還るべきといひ　沖つ国。それはどんなところなのだろう。

(帰りたい)

志穂は不意にそう思った。強く、思った。

死者の国になど行きたくない。カレンのように消えたくない。志穂は志穂のまま、日本の「ごく平凡なあの家に帰りたかった。その気持ちは今でも変わらない。このまま見知らぬ世界で消えてしまえば、志穂が確かに存在したことの証すらどこにも残せないのだ。

「……シホ？」

けれども志穂はもう死んでしまった。

生きた人間の多くには見えない死靈と化した。

優しいラダも、親切なジエフも、生き返りの希望など提示してくれない。志穂は死靈なのだと、それを弁えて行動しなければいけないのだと、事実をただ突きつける。

例え 果て 行ったとしても、青年の言つ通りどうにもならない可能性だって高いのだろう。

ちっぽけな十四歳の少女には変えられない、どうしようもない現

実。

(分かつてゐる。そんなこと分かつてゐる……)

きつと初めから、分かっているのだ。
あの波音を聞いたときから。

(でも……帰りたいよ)

そう思わなければ、その執着を失えば、きつと志穂は今度こそ跡形もなく消えてしまう。

視界が霞んだ。

じわりと滲んだものは盛り上がり粒となり、音もなく類を云う。死靈でも泣くことはできるのだ、と、頭の隅で不思議に思った。あるいはこれも幻で、錯覚のなせる業なのか。泣きたいから、涙を流しているつもりになっているだけなのか。

けれども。

不意に背中に回された誰かの腕の感触、引き寄せられた胸の中の冷たいようで温かい体温、これが錯覚だとは思えなかつた。

抱きしめられたのだ、と数瞬遅れて気付く。

志穂を抱きしめながら、ラダは一言も口にしなかつた。

何も言わず、ゆっくりと撫でるように数度、志穂の背中をさする青年の動作は、幼い子供を慰め、あやす仕草のようにも思える。それでも構わなかつた。そう思えるほどに、彼の手の感触は優しかつた。

「帰りたい」

その優しさに寄りかかるように、志穂は胸の内に渦巻く思いを吐き出した。

「どうして、私が死ななきやならなかつたの……？」

ラダはやはり何も言わなかつた。彼の胸に顔を埋めた志穂には、彼がどんな表情をしているかは窺い知れない。

少女はただ泣き続け、青年は少女をただ抱きしめ続けた。

船は流れしていく。ゆらゆらと漂いながら、生きる人々の死者への思いを乗せて。

すまない。

耳元を掠めたその声が、一体どんな思いから発せられたものなのかは、分からなかつたが。

第七話 王子リストス

結局あの後は、泣きじゃくりながらラダに手を引かれて 水煙亭に戻つた。

……正直なところ記憶は曖昧だが、多分そのはずだ、と志穂は思う。

一晩経つと、少女の頭も冷静になり、昨夜の自分の醜態を思い出して顔が赤くなったり青くなったりした。

(……私、なんであんなことしちゃったんだろう……)

十四歳にもなつて他人に、しかも男の人に対してもんな風に泣きつくなんて。ラダもさぞかし呆れたことだろう。いや、彼は優しいから、せいぜい子供をあやすような気持ちで抱きしめてくれたのかもしれないが。

いずれにせよ、一言謝らなければ気が済まない。

しかし志穂が翌朝部屋で目覚めた時 我に返つた時、と言つべきだらうか ラダは部屋にいなかつた。白い杖も見当たらぬから、そう離れたところにいるわけではないようだ。下で朝食を取つているのかもしれない。

食堂に降りてみると、青年は予想通りスープ皿の前に座つていた。だが既に食事は終えたようで、皿の中身は綺麗に空だ。

心なしか寛いだ様子で椅子の背に身を預けながら、ラダはヘイゼルと会話をしていた。

「……じゃ、今日発つの？」

女主人は残念そうな顔つきだった。

「もう少しゆづくりしていけばいいのに。宿代だっておまけして……」

「路銀は稼いだし、買い出しました。それに、行くところがある」

「そつ……。なら仕方ないわね。また顔を出してちょうどいい、今度は近いうちにね」

ラダははつきりとした返答をしなかった。世話になつているヘイゼルの手前、彼女の言葉に頷いてあげたいが、先の見通しが完璧ではないのにそう安請け合ひはできない。そんな風に大真面目に考えているようだ。

ヘイゼルはそんな彼を見て、やれやれと肩をすくめながら仕事に戻つていった。

「おや、お嬢さんたちはもう行くのかい」

横から現れたジエフに声を掛けられ、志穂もまた首を縦に振るでもなく横に傾げるでもない、非常に中途半端な仕草をした。

「ラダはそういうつもりみたい、です」

志穂をなるべく早く 果て へと連れて行くためだろうか。早く志穂に杖から離れてもらいたいという気持ちがあるかもしれないにせよ、有り難いような、申し訳ないような気もする。しかしラダにはラダなりの考えがあるかもしれないから、余計なことは言わない方がいいだろうと思つた。

「ジエフさん、短い間でしたけど、お世話になりました」

志穂は丁寧に頭を下げた。 果て に待つて いるのが希望でも絶望でも、もうこの街に帰つてくる機会はないだらう。なら、ジエフと話すのもこれっきりになる。

「どういたしまして。……俺たちは生きてる奴らよりあやふやな存在だから、また会おう、とは言わないけどさ」

三十路に届かない容貌のまま十七年を死靈として過ごした男性は、そう言って微笑んだ。

「元気でな、お嬢さん」

「はい。ありがとうござります」

彼への感謝の意を表すように、志穂は精一杯の笑顔で応えた。

朝食を済ませた後、ラダはエテルベリの街に来る以前よりも少し膨らんだ荷物を背負い、白い杖を片手に 水煙亭 を出た。いささ

か慌ただしい旅立ちに、志穂は昨日のことについて謝りそこねてしまった。

まずは裏町に寄つて、ケル婆というあの怪しげな老婆から、この間の悪霊退治の報酬を貰つ。それから街の西側の橋を渡つて街道に出る、とラダは今日の予定を話してくれた。

先日も通り抜けた、しかしつつとも道筋を覚えることができなかつた複雑な道程を、青年の後について進んでいく。あの時は宵闇に覆い隠されていた路地も今は淡い日の光に照らされて、漆喰が剥がれかけた壁の様子もよく見える。

入り組んだ路地を抜け、一旦少し広い通りに出ようとしたラダの足が、その入り口付近のところで訝しげに止まった。

「どうしたの？」

志穂は青年の背中からひょいと顔を出し、その向こうにあるはずの通りを見渡した。

通りはざわめく群衆で埋め尽くされていた。

まるで街に来た時に見た大通りの光景のようだったが、ここは大通りではないはずだ。しかしそれと見紛うくらいの人出だった。違うのは道の広さと、馬車や荷車の姿がないことくらいだろうか。

群衆の顔ぶれは老若男女様々で、身なりの良い街の人間もいれば、ラダのように継ぎ当てだらけの服を着た旅人らしい者もいる。だが、しいて言うなら、志穂よりも少し年上くらいの若い娘が多いようだ。人々は田に好奇の色や、あるいはどこか恐れるような色を浮かべ、娘たちの多くは憧れと興奮の色を浮かべて、一様に同じ方向を向いている。

（何だろ？ アイドルの追っかけにしては、変な感じだし）

そもそも昔のヨーロッパのようなこの国に、アイドルなどという存在がいるとも思えない。では何だろ？ と志穂は興味を覚えて、群衆の肩越しに様子を窺つた。もちろん少女の低めの身長では足りないので、その爪先は路地の石畳からは少し　いや大分離れていたが。

衆目を集めているのは、十四の志穂よりも一つか二つばかり年上に見える一人の少年のようだ。

一人の少年といつても、その周囲にはお付きの者らしい甲冑を着込んだ衛兵が何人もいて、彼を取り巻く群衆に鋭い目線を向けている。

しかし少年本人は群衆など気にした様子もなく、悠然とした表情で通りを歩いている。時折物珍しそうに、通りの傍に立ち並ぶ家並みを眺める素振りも見せていた。

やがて少年と衛兵たちは、志穂とラダがいる路地の入り口の近くにまでやってきた。

若い娘たちが憧れの眼差しを浮かべて彼を見つめているのも無理もない。それほどに、その少年は美しい容貌をしていた。

少年が足を動かす度、輝く月の光にも似た金の髪が揺れてきらめいている。

まるで精緻な彫像なよつな、造形美といふ言葉は彼のためにあるよつな、

忘れもしない、あの、顔。

存在しない心臓がざくりと鳴る。

志穂は愕然と唇をわななかせた。そこから言葉は出てこなかつた。

白銀の光。

体を貫いた衝撃。

いつかのおぞましい記憶が浮かんでは消える。

どうしようもなく吐き気がして口元を抑えた。それなのに実際に

吐いて樂になることもできない。

「……シホ？ どうした」

少女の異常に気付いたのか、ラダが小声で怪訝そうに彼女の名を呼ぶ。群衆のざわめきに紛れての小声とはいえ、志穂と話す際は周囲に人がいないか気にしていた青年が、人前で話しかけてくるのは

相當に珍しいことだ。

だが、志穂はその気遣いに応じられなかつた。青ざめた顔でただ震えながら、それでも美しい少年から目を離すことができなかつたのだ。

不意に、群衆の中から男が躍り出した。

群衆の多くを占める市民たちと比べればややみすばらしい身なりの、しかし人ごみに紛れればあつといつ間に見失つてしまいそうな若い男だ。

身を低くして衛兵たちの輪の隙間に突進したその男は、抜き身の短剣を手にしていた。

「王子リステス！」

憎悪に満ちた声とともに投擲された刃は、衛兵たちの合間を通り抜け、少年の胸元めがけて虚空を突き進む。

しかし、その刃が少年本人に届くことはなかつた。少年は素早く抜いた腰の剣で、短剣を叩き落としたからだ。目にもとまらぬよくな早業だつた。

衛兵の一人が顔色を失望に塗り替えた男の腕を、もう一人が肩を掴み、二人がかりで石畳の上に押し倒す。

群衆は一瞬静まり返り、すぐに騒然となつた。

金髪の少年は目の前で起こつた事態に対し、長い睫毛を動かして目を瞬かせていたが、やがて衛兵たちに抑え込まれている男の傍へ歩み寄つた。

「殿下、お下がりください」

衛兵たちの忠告を聞いているのかいないのか、少年は抜き身の剣を手にしたまま男を見下ろし、不思議そうに小首を傾げた。

「僕を殺そうとしたの？」

自分を憎々しげに見つめている男への問いとしては、どこか間の抜けた言葉だつた。

「お前は俺たちの村を焼いた！」

見下ろされた男は声を荒げた。黙らせようとした衛兵が彼の後頭

部を掴み、石畳に顔を押し付けたが、男は口を動かすのを止めない。

「何が反乱だ……俺たちはただ、領主の横暴を訴え出ただけだ！」

それを、お前ら騎士団の連中は、村も畠も焼き尽くし、女子供までも皆殺しにしやがった……！」

血を吐くような叫びに、しかし金髪の少年は小首を傾げたまま、顔色一つ変えなかつた。

「どの村の話か、よく分からぬなあ」

呑気な口調で平然とそう言うと、彼はこう続けた。

「でも、そうか。生き残りがいたなんて、それは申し訳ないことをしたな。ちゃんと全員殺せつて、いつも命令してゐるのに」高く澄んだ声で紡がれる残酷な言葉が、通りに響き渡る。騒然としていた群衆が再び静かになつた。何か得体の知れないものを見聞きしてしまつたかのよつた、そんな不安と戸惑いの色が居並ぶ顔に広がつていく。

男は血の混じつた唾を吐き捨てた。

「……狂人め、呪われろ！ 竜に喰い殺されてしまえ！」

「それは無理だよ。きっとね」

そう言ひと、少年は衛兵たちに目配せした。衛兵たちは心得たようにはぐくと、何人かが男を引きずつてどこか別の場所へ連れていこうとした。だが、彼らの周りには依然多くの人々が集まつていて、衛兵たちの行く手を阻んでいた。

「散れ、道を開ける！ 見世物ではないのだぞ」

衛兵の一人が発した怒声に、進行方向にいる人々は慌てて道を開けようとしながら、何分人が多いのであまりスマーズにはいかない。苛立つた衛兵が再び口を開けようとしたその隙に、黙つて引きずられていた男が動いた。

彼は体を捻つて衛兵たちの拘束を振り払うと、懐から鋭利なナイフを取り出した。そして再び、金髪の少年の方へと駆け出したのだ。

「殿下！」

衛兵たちが慌ててまた男を取り抑えようとするが、今度は男は上

手くその手をかわして少年に肉薄した。

少年の細い体に向けて突き出されるナイフ。

けれどもやはり、男の望み通りにその刃が少年本人に届くことはなかつた。ほんのわずかに上体を反らしてナイフを避けた少年は、バランスを崩した男に向けて、抜き身の剣を振り抜く。

白銀に光る刃が一息に男の胸を切り裂いた。

噴き出した血が少年の端整な顔を赤く染め、剣先から滴り落ちた血が石畳に跳ねる。一瞬遅れて男の体がゆっくり傾き、石畳の上へと倒れ込んだ。

目を見開いたまま絶命したその男の顔は、最後まで憎悪に満ちていた。

「ひ……」

そこでようやく、群衆からひきつたような呻き声が上がつた。続いて、若い娘たちの金切り声。中にはほとんど失神しかけている者もいる。怯えたようにその場から離れようと/or>して、後ろにいた人物とぶつかって転ぶ者もいた。

少年はそんな周囲の騒ぎを、不思議そつにぐるりと見回した。

深い海のような青い目が虚空を辿つて、ふと志穂の方へ向けられる。一度瞬きした後で、彼は血の飛び散つた美しい顔に微笑みを浮かべた。赤い血に染められた剣を手にしたまま。

そう、錯覚でなければ、彼は確かに志穂を見て微笑んだ。
そして、こう言ったのだ。

「あれ。また、会ったね」

志穂は悲鳴を上げた。

*

魂を震わせるような甲高い少女の悲鳴に、ラダは思わず目を見開

いた。

実体のない死靈の叫び。

にも関わらず、路地の壁がわずかに振動している。目の前の群衆の中にも、何かを感じ取ったのか訝しげに眉をひそめて周囲を見回している者がいた。驚いたように飛び上がっているのは、群衆に紛れ込んでいた死靈たちだろう。

実体に影響を及ぼすほどの恐怖に満ちた悲鳴を上げながら、志穂は空中で踵を返し、路地の奥へと飛び去つていった。まるで、こちらを不思議そうに見つめている金髪の少年の視線から逃げるよう。王子リステス、と彼は呼ばれていた。

今のアーフェル国王には、男子は一人しかいないと聞く。そのたつた一人の王子は、現在王国で一番歴史ある騎士団の長を務めているのだとも。

(……くそ)

ラダは小さく舌打ちすると、迷わず王子や群衆に背を向け、志穂を追いかけた。

彼女の様子がおかしいと気付いた時すぐに、あの場から立ち去るべきだった。そんな後悔が胸を掠め、白い杖を握る手に力が入る。路地を駆け、角を幾度も曲がり、空気を震わせる振動の源を辿つていく。

しばらくして、ラダは入り組んだ路地の片隅にある人気のない袋小路で少女を見つけた。

まれびとの少女はその場にうずくまり、小さな肩を抱いて震えていた。まるで寄る辺のない幼い子供のように。

「シホ」

抑えた声で名を呼びながら、そつと歩み寄り、彼女の肩に手を伸ばそうとする。

だが青年の指先が触れる前に、少女はそれをはね除けた。

「いや！ 殺さないで！」

黒髪を振り乱しながらそう喚く少女は、明らかに平静を失ってい

る。見開かれた黒い目は焦点が合わず、どこか虚ろで、青年をはつきりと捉えているとは思えなかつた。

「殺さないで！　いろさないで！　たすけて、おねがい、しにたくない……！」

一瞬呆然と立ち去つしたラダの前で、少女の姿は変貌しつつあつた。

胸に腕に、幾本もの矢が突き刺さつてゐる。黒く丈の短い異国の服が腹部から裂かれ、そこから夥しい血が流れ出しあはじめる。幼さの残る顔には血が飛び散り、唇は歪み、恐怖にひきつつていた。

青年は思わず息を止めた。

これはきっと、彼女の死の間際の姿だ。騎士団に無惨に殺された、その時の記憶が投影されているのだろう。

あまりに、惨い。

ラダが 山の民 の里を訪れた時、既に騎士団は山里を破壊し尽くして立ち去つた後だつた。

淀んだ空氣に漂う異臭は凄まじく、あちこちから立ち上る黒ずんだ煙が空を汚していた。広場の地面は 山の民 の塚と化していく、その盛り上がりがつた土の表面を少し払つただけで、焼け焦げた誰かの爪先が露わになつた。

そんな廃墟の里のそこかしこに、殺された 山の民 の靈がいた。嘆き悲しむ 山の民 の靈たちの言葉に耳を傾け、宥め、諭し、一族の責務という言葉を振りかざして、ラダはどうにか彼ら全員を沖つ国へと船出させた。

そして埋められず、燃やされることもなく放置されていた人の死体の断片や燃え滓に混じついていた骨の欠片をも土に埋め直した。それはラダのさほど長くもない生涯の中でも一一を争つほどの陰鬱な作業だつた。

作業を終えた後、彼は心身ともに疲れ果て、神殿跡の祭壇の隅に腰掛けてしまらく動けないでいた。そこに彼女が現れたのだ。

志穂。

黒髪に黒い瞳を持つ、まれびとの娘。

……まれびとの召喚は、山の民 にとつて、何百年もの時を経て擦り切れた希望を曖昧な伝承に託して蘇らせようとする行為だつた。不確かなその行為のために彼らは多大な労力を払つた。彼らはそれほど追い詰められていた。ラダはそれを知つてゐる。手段は違えど、同じ船守の一族の末裔として、彼もまた同じ希望を抱えていたのだから。

けれどもそうして呼ばれた少女は、ごく普通の少女だつた。

大人しく素直で、そのくせ時折驚かされるほどの行動を見せる。知りたがりで、熱心に人の話に耳を傾ける。時に怒り、時に微笑み、時に泣く。

そんな、眩しいくらいに普通の少女。

けれども彼女は呼ばれ、そしてそのせいで死んだ。召喚さえされなければ、彼女は今でも故郷で平穏な暮らしを送つていたはずだ。彼女には何の罪科もない。

罪科があるとしたらまれびとを求めた青年たちの方であり、この歪な世界の方だ。それを自覚しても尚、青年は擦り切れた希望を捨てきれずにはいる。

「シホ」

ラダは少女の傍に跪くと、彼女の名を繰り返し呼んだ。

少女は既に青年のことすら認識していないのか、凄惨な姿のまま、ただただ泣き喚いでいる。彼女が恐怖に満ちた声を上げる度、周囲の空気が震え、間近にいる青年の耳の奥は痛みを訴えた。

「シホ。落ち着いて、俺の言葉を聞くんだ。ここは山里じゃない。王子も騎士団もいない。お前はもう誰かに殺されることはない。だから、シホ」

言葉を呑くしても、恐怖に囚われた志穂には届かない。殺された時の恐怖の記憶のままに少女は叫び続け、その恐怖を押し広げようとしている。

一際強くなつた声の反響が空気を伝い、路地の漆喰の壁にぴしり

と亀裂を入れた。

鈍い痛みとともに、ラダの頬にも一筋の切り傷が走る。じわりと滲み出す黒ずんだ色の血を拭い、彼は焦燥に唇の端を噛んだ。

「シホ！ どうかお願ひだ、落ち着いてくれ」

ラダは片手を伸ばして少女の肩を掴み、搖さぶつた。それでも少女が正気に返る様子はない。そうしているうちに青年の指先や手の甲にも細かい傷が走り、血が滲んだ。

「シホ

「いや！」

甲高い一声が衝撃波となつてラダの体に襲い来る。

一瞬息ができなくなり、咳き込んだ青年はよろめきながら後ずさつた。

（駄目だ。言葉では届かない）

少女の恐怖は生者と死者の境を越え、実体あるものにまで伝染しようとしている。それは悪霊と呼ばれる、怨念に支配された存在の行いだ。

このままでは、取り返しのつかないことになりかねない。

（……仕方がない）

ラダは意を決して立ち上ると、母の形見の杖を振りかざした。少女の身長ほどもある白い杖、その先端を泣き叫ぶ志穂へと向ける。「竜の船守が一族の末裔、ラダの名において命じる」

低い声が袋小路に響き渡り、少女の悲鳴とぶつかって弾けた。

その余波が手の甲の傷を深めるのも無視して、ラダは幼い頃に覚え込んだ古い言葉を続けた。

「キシベシホ、死して尚還らざる死者の魂よ。我が目を見、我が声を聞け。我が僕となり、我が命に従い、その意思のすべてを我に委ねよ」

悲鳴がぴたりと止む。

ひきつった表情のまま、ぎこちない仕草で首を動かしこちらを見上げる少女の黒い目を、ラダはその紫の目でまっすぐに見据えた。

また一つ、彼女に対する負い田が増える。

「 そして眠れ」

*

死ぬ間際に見たあの金髪の少年、彼が志穂を見て、あの時と同じように無邪気に微笑んだその姿を見た瞬間、理性などすべてどこかに吹き飛んだ。

心の、あるいは魂の奥底に閉じ込めて見ないふりをし、忘れたふりをしていた感情のすべてが、奔流となつて押し寄せてきたようだつた。

痛みの中で助けを求めた。死にたくないと望んだ。なのに。

あの微笑みが。

あの澄んだ声が断ち切つたのだ、少女の命のすべてを。

「……それじゃお前、お嬢さんを無理矢理に使役化したってのか？」
ジエフの声がする。非難するような声色だ。

「一時的な措置だ。……俺、だつてやりたくてやつたわけじゃない。ジエフ、お前も少しは感じたんじゃないのか」

「ああ……そりゃあ、な。きっと街中の死靈が聞いただらうぞ、お嬢さんの慟哭を。俺、だつて、こりゃまずいと思つたよ。だが……なあ……仕方のないことじやないか。自分を殺したかもしれない連中の親玉と出くわしたら、た。取り乱すのも当然だらうが。……例え不可抗力でも、心を弄くられるのは嫌なもんだ」

分かつてゐる、と答えるラダの口調はいつもよりも荒い。

「……それでも、志穂があのまま恐怖に支配され、憎悪と怨念に満ちた存在と化すのを防ぐには、彼女を船出させるか、でなければ魂そのものに干渉するしかなかつたんだ」

そんな会話に、志穂は黙つて耳を傾けていた。

今、彼女の心の海は静かに凧いでいる。確かに感じたあの恐怖、

感情の奔流の何もかも、志穂の中から消え失せてしまつたよつだつた。

視界は闇に覆われている。

柔らかな手で目隠しをされているよつなその暗闇の中、身動きをしようとしても叶わない。だから志穂は、ぼんやりとまどろむよつな心地の中に身を置くしかない。そう命じられたのだから。

「……お嬢さんを起こしたら、謝つておけよ」

「ああ……」

それきり、ジェフの声が聞こえなくなる。

志穂の頬のあたりに誰かの指先が掠めるように触れて、すぐに離れた。そして低い青年の声が命じた。

「シホ。起きてくれ」

志穂は我に返つた。

はつと見開いた目の前にラダの彫りの深い顔がある。心配そうな表情が浮かんでいるその白い顔の右頬のあたりに、見覚えのない切り傷の痕跡が見えた。もう血は止まっているようだ。

しばらくぼんやりと青年の頬を見つめた後、志穂はぎこちなく首を動かして周囲を見回した。

窓から差し込む陽の光が、居心地の良い清潔な部屋を照らし出している。どうやら志穂たちは 水煙亭 の部屋に戻ってきてしまつたらしい。志穂は陽光を浴びながら、窓辺の椅子に腰掛けているようだつた。

記憶は曖昧で、頭の中の思考は不明瞭だった。どうして発つたはずのここにいるのかもよく分からぬ。まるで、あの廃墟で目覚めたばかりの時のように。

だがはつきりと覚えていることもある。

王子リステスと呼ばれた、あの美しい金髪の少年。

彼が見せた微笑みと、囁きと、それらがもたらした恐怖を、志穂

は確かに覚えている。

「具合はどうだ？」

気遣わしげに問われ、志穂は無言でラダを見上げた。

果て を目指す旅の道連れ。ただそれだけの関係のはずの青年。けれども、そういうえば彼は最初に言つていたではないか。死靈たちを時に使役し、時にその魂を鎮め、あるいは災いを呼び寄せる忌むべきもの、と。

「ラダ、は……」

志穂は掠れた言葉を紡いだ。

一時は確かに恐怖に支配されていた少女の心は、今はとても落ち着いている。少年の顔が脳裏にちらつく度に悪寒を感じるが、取り乱すまではいかない。それがラダのお陰であり、ラダの奇妙な力のせいであることを、説明されずとも志穂は感じ取っていた。

「その気になれば、私を、意のままに操ることができるもの？」

青年は一瞬黙り込んだ。だが志穂から決して目を逸らすことなく、頷いた。

「……ああ

「私の、意志とか、感情とか、みんな消すことができるの……？」
「消すことはできない。ただ一時的に押し込めるとはできる。一度死靈術士の支配下におかれたら靈は、呪を解かれない限り、その命に逆らうことはできないから」

いつものように淡々と説明した後で、ラダは目を伏せ頭を垂れた。いつかのようだ。

「……お前の意志を無視して術で干渉した。すまない」

そう言つたきり、彼は他の言葉を口にしようとはしなかつた。ジエフに対して告げていたような理由すら言わない。それは彼の生真面目さを示すものなのだろう。

志穂はそんな青年をじっと見つめた。

ラダは優しい。ラダは親切だ。ラダは眞面目で、本当に律儀な人だ。成仏したくないという志穂のわがままを受け入れて、何の役に

立つわけでもない幽霊娘が形見の杖に憑いたままなのを許してくれる。故郷を恋しがって子供みたいに泣けば、抱きしめて慰めてくれる。

紫色の田の青年に対して感じるほのかな好意は、決して嘘偽りではないし、ましてや操られた結果ではない。

（でも、やっぱり違うんだ……）

彼は生きた人間で、死靈術士。そして志穂は、本来ここにいてはならないはずの異界の死者。

青年との間に存在する、どうしようもなく深い溝。

薄々は感じていたそれを、志穂はようやくはっきりと自覚した。その気になれば自分をどうにでもできる力を持つ相手に対しどうして対等に向き合ふことができるというのだろう。

一人はお互に何も言わないまま、沈黙の中で頃垂れていた。

やがてかすかな吐息をつき、先に口を開いたのはラダの方だった。

「……今日のところはゆっくりと休もう。裏町へは明日また行けばいい」

青年は志穂を安心させるように、さけいぢなく微笑んだ。そして踵を返して部屋から出て行こうとする。

彼の頬だけでなく、その手にも新しい切り傷の跡があることに、志穂はふと気が付いた。

「ラダ！」

とつさに声を上げる。

振り返った青年は、呼び止められたことを意外に感じている素振りだつた。

恐怖に支配されていた間のことを志穂はほとんど覚えていない。ラダが普段使わないような術を使わなければいけないほど、切羽詰まつた事態が起こっていたのは確かにようだが、それが彼の傷と関係があるのかどうかは分からない。

けれども、こう言わなければいけないような気がしたのだ。

「……ごめんなさい」

志穂の言葉を聞いたラダは再び微笑んだ。今度は決してぎこちない作り笑いではない、柔らかな微笑みだった。
そしてわずかに首を横に振ると、今度こそ部屋の外へ出て行った。

第八話 狂人の魔囚

アーフェル王国の国王の第二子にして、唯一の王子。そして聖ユオル騎士団の団長。

リステス・ギイ・アーフェル それがあの金髪の少年の名前であり、肩書きであるといつ。

ラダがジエフやヘイゼル、街の死靈たちにそれとなく聞いた話によると、王子は普段、エテルベリの街から何日か北に行つたところにある、聖ユオル騎士団の拠点の城で暮らしているのだそうだ。それが何故か今回、騎士団と離れ、わずかな供だけを連れて突如エテルベリを訪れたのだという。

「市の役人連中も随分慌ててたらしいよ。何せ先触れもなしに王族が、それもあるの悪名高い聖ユオル騎士団の長が来たんだから。当の王子様は、観光が目的だったみたいだが」

「……呑気なものだな」

そう呟くラダの顔はまったくの無表情だ。けれどもその声色には、隠しきれない嫌悪が滲んでいるように感じた。

志穂も彼のことを思い出すと、まだ息が詰まるような思いを覚える。

王子は容姿に違わず、まだ十六歳の若さだという。だが彼は騎士団が山里を焼き払った現場にいた。ということは、決してお飾りの存在ではない。無惨に殺されたあの男に向けて言つていたよし、皆殺しの命令を出したのもきっと彼自身。

志穂の命を奪つただけではない。彼はあの惨劇を作り出した張本人なのだ。
そんな少年にまた出くわしたらと思つだけで、平静ではいられなかつた。

リステスと出くわした翌日、志穂とラダは改めて 水煙亭 を出

発した。気を付けるよ、とジエフに何度も言われながら。

昨日、リステスを見たあの通りに差しかかった時は、少々ビックリでなく胸がざわめいた。けれども昨日の光景が嘘のように通りは閉散としていて、石畳の道のどこにも赤の痕跡は見当たらなかつた。あの時殺された男性の遺体はどうなつたのだろうか そして彼の靈はどこへ行つたのだろうかと思うと、志穂の心は沈んだ。

そうして今度こそ一人は裏町にやつてきた。

昼間の光に満ちた裏町の風景は、夜の時ほどおどろおどろしくは感じない。怪物を象つた看板や山羊の頭部の剥製も、この明るい中ではどこか間が抜けた。

先日訪れた家の扉には、家主の不在を示すらしい札が掲げられていた。

しかしラダが小さく扉を叩くと、やや間を置いてから、内側から扉が開けられる。そこから顔を出したのは陰気な顔をした灰色のローブの男性で、彼はラダを見ると、小さく頷いて彼を中心へ通した。

先日老婆と面会した部屋に案内されたが、当の老婆はいなかつた。主人は今出かけている、呼びに行くからもう少しここで待つていってくれ というような意味合いのことを、この家の下男らしい男性はぼそぼそと伝えた後、裏口へ向かつた。

他に人がいるように見えない家に一人放つておかれるくらいには、ラダは老婆との付き合いが深いらしい。

ラダは部屋に置いてある椅子に腰掛けた。

そのまましばらく待つたが、一向に老婆らが帰つてくる気配はない。

手持ち無沙汰の沈黙の中、志穂は誰も聞き耳立てていないか確かめてから、彼に話しかけた。

「……ラダは、死靈が見えるよね

「ああ。それがどうした」

「それで、ヘイゼルさんとか、多くの人たちが死靈が見えないものなんだよね」

「ああ。……この間のよつに、強い怨念や現世への執着を持つ悪靈なら、靈感のない人間の目にも見える場はあるが。そうでない靈を認識する力を持つ人間はほとんどいない。そういう血筋でもない、ごく普通の家系に靈感を持つ者が生まれることは本当に稀だそうだ」

そこで一旦言葉を切り、ラダは今いる部屋の中を見回した。

壁の一面に本棚があり、中央に椅子とテーブルのセットがあり、床には絨毯が敷かれている。テーブルの上と壁際に一つずつ燭台も置かれていた。志穂の用にはごく普通の、しいて言うならちょっとと裕福かもしれない民家の部屋に見える。

「こここのケル婆の亡くなつた夫は、滅多にいなしその異能の力の持ち主だつたらしい。彼女はその頃築いた縁故を使って除靈の仲介をしている。……今の彼女は俺の他にも幾人かの死靈術士を名乗る輩に仕事を仲介しているそつだが、ほとんどは口が上手いだけが取り柄の詐欺師たちで、良くて多少靈が見える程度だそうだ」

無論ケル婆はそのことを分かつていて仲介している、と青年は補足する。

「俺はあまり関わらないようにしているが、この裏町に集まっているのはほとんどがそういう奴らだ。占い師、呪術師に、黒魔術師……皆様々に名乗つてそれらしい看板を掲げているが、本物はほとんどない。詐欺を通り越して恐喝を行う盗賊紛いの者すらいる」

この界隈の雰囲気がやけに不気味なのは、そういう理由からしい。別世界とはいっても、ラダのように不思議な力を持つ本物の魔法使いがたくさんいるわけではないようだ。

けど、と志穂はうつむきがちに呴いた。

「あの人は、見えてた、よね」

名前を口にすることすら厭わしく、曖昧な言葉遣いになる。

それでもラダには誰のことを指しているのか伝わつたらしく、彼は眉根を寄せた。

「私のこと、確かに見てた。まっすぐに見て、笑つて、……また会つたね、つて……」

握り合わせた自身の両手に力を込め、恐怖を抑え込む。

そんな志穂を見つめ、ラダは一瞬手を伸ばしかけるような素振りをしたが、すぐに引っ込めてしまった。そのまましばらく沈黙してから、彼はこう答えた。

「……稀とはいって、先天的に靈を見る力を持つ人間がないわけではないからな。さらにごく稀なことではあるが、後天的に靈感を得る者もいる。だが、見る力があるから、靈に干渉できる力もあるとは限らない。シホが危害を加えられる可能性は……」

そのとき、青年の言葉を遮るように、外から荒々しく扉が開かれる音がした。

続いて、複数人の足音がこちらに近付いてくるのが聞こえる。

椅子から腰を浮かしたラダが白い杖を握り直したとき、青年のいるこの部屋の扉も乱暴に押し開けられた。

そうして現れたのは、鎧兜に身を包み、剣を手にした兵士たちだった。

三人いた兵士たちは、押し入った部屋の中にラダの姿を認めると互いに頷き合い、全員でラダを取り囲んだ。

「……何事ですか」

あくまで無表情を顔に貼り付けて淡々と問う青年に対し、兵士の一人が威張ったような声を張り上げた。

「エテルベリ市参事会の決定により、我々都市警備隊は、本日この界隈にあるすべての家屋の立ち入り検査をしている。また、界隈にいた者は、すべて呪術師や黒魔術師などと名乗る怪しげな詐欺師及びその顧客と見なし、男女や氏素性の別なく連行して取り調べよとの命も受けている」

兵士の手には、羊皮紙の令状らしきものがある。

この国の政治制度について詳しくは知らない。だが、滅茶苦茶だと志穂は思った。

確かにこの裏町は、ラダの話を聞く限り犯罪者めいた人々の集まるところではあるらしい。けれどもラダは他の人たちとは違つて、

詐欺師ではない、本物の力を持つ術士だ。第一、有無を言わざず連行しようだなんて、いかにも横暴な気がする。

ラダは一瞬口を開きかけたが、すぐに諦めたように閉ざしてしまつた。何を反論しても無駄だと思つたのかもしない。

兵士たちが黙り込んだ青年の腕を両側から捕らえる。

それを傍から見ながら、志穂は焦つた。

どうにかして助けなければ、と思い、けれども今回はどうすればいいのか上手い方法をとっさに思いつけないまま、連行されるラダの後を追いかける。

しかしそのとき、青年は横目でちらりと志穂に視線を送った。

まるで、自分は大丈夫だから逸らないように、と少女を制するようにな。

ラダは手に縄をかけられ、裏町を出て路地を引き回された末、街の川岸寄りにある大きな建物の中に連れて行かれた。どこか陰気な雰囲気の漂つそこは、警備隊の詰め所のような場所か、でなければ牢獄だ。

ここで志穂はラダの姿を見失う羽目になった。彼の手から奪われた白い杖は、兵士の一人によつて物置のような一室に放り込まれたのに、ラダ本人は兵士たちに小突かれながらどこか離れた別の部屋に連れて行かれたからだ。

志穂はどうにかできる限り彼の後を追いかけようとしたが、地下へと続く階段のところで杖から離れられる距離の限界がきてしまつた。

(ああ、もう)

そこで志穂は杖のところに舞い戻り、自分で杖を抱えて移動できないか試みた。

けれども、杖自体は無造作に物置の片隅に放置されているのだが、部屋の扉は閉ざされて鍵がかけられている。窓も見当たらぬ。志

穂自身は難なく扉や壁をすり抜けることができても、実体ある杖と一緒にすり抜けることは不可能なのだ。

それでも何度も杖と一緒に壁抜けができるのか挑戦した後、志穂は諦めた。よく考えれば、杖を抱えて移動できてもそこを誰かに見られれば、ひとりでにふわふわ浮いて移動する怪しい杖の持ち主、とラダが見られる可能性もある。

ラダは今頃地下牢にでも入れられているのだろうか。刑事ドラマの容疑者のように取り調べを受けているかもしない。あまり手荒な真似をされていないと良いのだが、先刻の兵士たちの扱いからして既に乱暴だった。

(……どうしよう)

志穂は杖の傍で膝を抱えて途方に暮れた。途方に暮れながら、今いる場所を見回す。

暗い物置の中には、「じちや」「じちや」とした物品を詰め込んだ木箱がいくつも置かれていた。

これらも別のところからの押収品なのか、不気味な顔をした人形や動物の骨らしきもの、歪で濁ったガラス玉など呪術を連想できる物品から、ただの木皿や匙、ヒビの入った花瓶など生活用品にしか見えないものまで、無分別に詰め込まれている。

志穂がしばらく手持ち無沙汰にそれらの押収品を眺めていると、不意に物置の扉の鍵が外から開けられ、中に入ってきた。

危うく、また悲鳴を上げるところだった。

とつさに傍にあるラダの杖を片手で掴まなければ、そのひんやりとした感触がわずかな冷静さを取り戻してくれなければ、志穂は恐怖の悲鳴を飲み込むことができなかつただろう。

物置に入ってきた人間は三人いた。

一人はランプを手にした警備隊の兵士。何か不安げな顔をしている。

もう一人も兵士のようだつたが、身に付けている鎧や剣は警備隊の方より立派で、目つきも鋭い。

そして最後の一人の金髪の少年は、ランプの明かりに照らされた物置を見回しながら、木箱の一つに近付いて見下ろした。

「……ふうん、これが押収した品なの？」

そう呟いて、少年は この国の王子リストスは、木箱の中から不気味な顔の人形を摘み出した。そして人形の腕をぶらぶらとせながら、つまらなそうな顔をする。

「あんまり面白そうな物はないね」

「かの裏町の連中は、占い師だと名乗つてありますが、実際にはただの詐欺師や盜賊、故買屋のような輩ばかりですの…… その、殿下のご興味を引くほどの物は……」

と、遠慮がちに答えるのは警備隊の兵士である。

「なんだ。そういう怪しい人たちの持ち物なら、死んでるのに生きてる動物とか、恐ろしい魔物の標本とか、呪われた魔術書とか、あると思ったのにな」

訳の分からないことを言いながら、リストスは人形を放り投げて木箱から視線を上げた。

そして、少し離れた物置の隅で硬直している志穂の方に目を留めると、

「あ

と、嬉しそうに声を上げた。

志穂はびっくりと肩を震わせて、けれども身を翻して壁の向こうに逃げ出す勇気も出ないまま、杖を握る手に力を込めた。そうして物に縋らなければ、また先日のよつた恐慌に陥ってしまいそうだつた。

自分が今、どんな表情をしているか確かめることはできない。死靈は鏡に映らないからだ。けれども魂だけの存在である死靈の意思と感情がそのまま姿に影響を及ぼすのなら、きっとひどく青ざめた顔をしているはずだ。

「君、昨日も会ったね」

それなのに、リストスという少年は脳天気なほどに明るい声と表

情で話しかけてきた。

この上なく美しい顔立ちがにつこりと微笑む様は、彼が彫像ではなく確かに血の通つた人間なのだということを教えてくれる、魅力的なものだ。魂の底から湧き上がるようなこの恐怖がなければ、少女もきっと見惚れていたかもしれない。しかし現実には、ただ恐怖を深めただけだった。

少年の肩越しに、警備隊の兵士が戸惑つた顔をしているのが見える。

彼には志穂の姿が見えないのだろうか、と恐怖を紛らわそうとする頭でそう考える。なら、彼の目には、リストスが突然何もないところに話しかけているように見えるはずだ。戸惑うのも無理はない。もう一人の兵士が　もしかしたら昨日少年が連れていた衛兵の一人かもしれない　諦めたように小さく首を振り、警備隊の兵士を促して物置から出て行つた。

物置には、金髪の少年王子と志穂だけが残された。

「ねえ、君、あの山の村にいた子だろ？」

兵士たちが出て行つたことにも気付かない様子で、リストスは朗らかに言つた。

「アーフエル人じやないし、あの山の人たちとも違つ感じの子だから、印象に残つてたんだ。黒い髪も綺麗だつたしね。一緒に焼いちやつたの、後でちょっと惜しかつたなつて思つてたくらいだよ。ねえ、君、どこから来た子なの？」

志穂は目を見開いてまじまじと彼を見つめた。

一いつ年以上の少年にしてはどこか無邪気に過ぎるような口調は、この際どうでもいい。けれども彼はあの山里の出来事を覚えているようなのに、自分が少女に対して何をしたか忘れているわけではないだろうに　いつそ無神経なほどのこの言動は一体何なのか。

「あなた、は……」

志穂は恐怖に萎縮する心を叱咤し、どうにか言葉を絞り出した。

「あの時、あそこにいた、……聖ユオル騎士団、の」

「うん。僕が団長だよ」

「……あなたたちは、どうして、あの村を」

「どうして、つて？」

リストスは不思議そうに目を瞬かせた。

「決まってるだろ？ もちろん、彼らが長年アーフェルに従わなかつたからさ。王直々の命令で、聖ユオル騎士団が彼らを肅清することになったんだ」

何が決まっているというのだろう。

祭壇の上で立ち尽くしていた志穂を囲み、歓喜の声を上げていたあの人々の中には、老人も子供もいた。けれども皆、無惨に命を奪われ、村は焼き払われた。王の命令だからといって、どうしてあんな真似が許される。

どうして そんなことで、命を奪われなくてはならない。

「じゃあ、どうして、私を殺したの！？」

志穂は抑えきれずに堪えきれずに叫んだ。

そうして、リストスの青い目を睨み付ける。湧き上がる怒りが恐怖を抑えた。

「私は、私は、助けてほしかったのに… 痛くて、死にたくないで、

なのに、あなたが！」

それ以上言葉を続けられず、志穂は唇をわななかせた。

しかし志穂の叫びにも怒りを込めた眼差しにも、リストスは顔色一つ変えなかつた。昨日、男に刃を向けられ憎悪に満ちた言葉をぶつけられて尚、平然としていた時のように。

少年はしばらく黙つて志穂を見つめた後、やがて首を傾げた。

「もしかして、剣で刺したのが駄目だったのかな？」

意味を理解しかねる言葉を呴いて、彼は一人で納得したように頷いた。

「そうか、それなら『めんね。君が苦しそうにしてたから、なるべく早く楽にしてあげない』って思つたんだけど。確かに剣で刺されるのも痛いからなあ。でも、あの時はあれが一番手っ取り早かつた

し

少年の表情や声音は奇妙なまでに真面目ぶつっていて、悪趣味な冗談を言つてゐる雰囲氣は感じられない。だからこそ得体の知れない気持ち悪さがあつた。

志穂は絶句しかけたが、それでもなんとか必死に言い募らうとした。

「そ……ういう、こと、じゃなくて……わ、私……人の、命、を

」

「命」

リストスは、今までで一番不思議そうに咳いた。

「みんな、命は大切だつて言うね。そのくせ命を大切にする人は少ないんだ。……ねえ、でも、君は命がなくなつてもここにいるじゃないか。それじゃあ駄目なの？」

ぞつとした。

この少年は、死靈と生きた人間の区別もつかないのだろうか。

(　おかしい。この人は、おかしい)

昨日もそうだった。彼は自分を暗殺しようとした男の憎悪に対し、何の良心の呵責も感じていらない様子だった。

きつと志穂や、虐殺された山の民の人々に対してもそういうのだ。彼は志穂たちに対して、『悪いこと』をしたとは微塵も思っていない。だから、こんな言葉を吐けるのだ。

「ところでその杖、君の大切なものなの？　ずっと抱きしめてるけど」

少年に指摘され、そこで志穂は、先程までそつと掴んでいただけだつたラダの白い杖を、自分がいつの間にか腕の中に引き寄せ固く抱きしめていることに気が付いた。

リストスは興味深そうに志穂の傍へと近付いてくる。金髪が揺れ、あの白い顔が間近に迫つてくる。

来ないで、と叫ぼうとして叫べなかつた。

恐怖に気を取られた隙をつくように、リストスは無造作に手を伸

ばすと、志穂の腕の中から杖を奪い取った。そして杖をランプの明かりにかざす。

「ふうん。結構しつかりした作りの杖なんだね。材質は……何だろう、これ。石じゃない。白く塗った木でもない。象牙みたいな……うう」と

ふと、リステスの顔から表情が抜け落ちた。

彫像のような顔が、その一瞬、本当に彫像になつたかのように志穂には見えた。

彼は無表情でしばらく考える素振りを見せた後、白い杖をくるりと回して、その先端を床にこつんと打ち付けた。そして、

「決めた、この杖は今日から僕のものだよ」

氣味が悪いほど無邪気な笑顔をぱつと浮かべて、彼はそう言い切つた。

*

暗くて異臭のする地下牢に押し込められること丸一日、罰金という名の賄賂を支払つて、ようやくラダは釈放された。

強引に連れてこられた割にはろくな尋問もされず、身分証明を求められたりもしなかつた。不幸中の幸い、といつよりは、あちらも元々本気ではなかつたということなのだろう。悪趣味な示威行為に巻き込まれただけなのだ。

これで奪われたものがすべて返つてくれたら、今回の件は通り雨に降られたようなものと思うこともできたのだが。

慣れ親しんだ感触のない右手を握りしめ、傍に黒髪の少女の姿がないことを確かめて、ため息を吐く。

釈放されたその足でラダが向かつたのは裏町だつた。

先日の騒動が尾を引いているのか、界隈はひつそりと静まり返っている。山羊の剥製を飾つていた店の前には、乱暴に扱われて根元から折れたと思しき山羊の角だけがぽつんと一つ落ちていた。

兵士に引つ立てられた現場であるケル婆の家に行くと、家主の老婆が平然とした顔で出迎えてくれた。留守中に家搜しされたことなど、気にしてもいないうだ。

「災難だつたね、ラダ」

老婆は意地悪い笑みを浮かべながら言つた。

「市の連中は時々ああやつて、この裏町みたいに犯罪者のたむろする界限を適当に漁つていくのさ。見せしめと、警備隊がちゃんと治安維持のために働いているつてことを一般市民に知らしめるためにね。もうそろそろこの裏町の番だらうとは思つてたが、まさかちょうどお前がやつてきた時にはねえ」

「……俺が連れて行かれるのを隠れて見てたんだろう？」

「野暮用から戻つてきたりちよつど警備隊の連中を見かけてね。隠れないわけにはいかないじやないか」

そんなことを臆面も無く言いながらも、老婆はしつかりと先日の仕事分の報酬を渡してくれた。

小さな革袋の中に銀貨が十数枚、さらに金貨まで一枚混ざっている。この袋一つで、普通の市民の一家がしばらく遊んで暮らせることだ。仲介料を引いた上でこの額なら、依頼人が貴族とはいえ随分高額な報酬だつた。

「……随分吹っかけたんだな」

「そりやあもう。泣いて感謝されたさ」

いひひと笑う老婆に、口を出すような真似はしない。氏素性の不確かな青年には、彼女のような仲介人がいなければろくな仕事も得ることができないのだから。

いつもなら報酬を受け取つた後すぐに立ち去るものなのだが、今回はもう一つ用があつた。

「ケル婆。一つ頼みがある

「何だい、珍しい」

「……警備隊に杖を奪われたままなんだ」

淡々とした口調に、苦いものが混じる。

「おやまあ。釈放される時に返してはもらえなかつたのかい」

「抗議はしたが聞き入れてもらえなかつた。あまり食いついて怪しまれるわけにもいかない。だからそつちから手を回してほしいんだが」

「警備隊にかい」

「……この家の物品があまり押収された様子がないのは、手を抜くよう頼んだからだろ?」「ひう」

まあね、と老婆は肩をすくめると、手のひらを青年に向けた。
「けれどもそう強い繋がりがあるわけじゃあない。金はもううよ」
ラダは無言で、先程受け取った革袋の中から金貨一枚を取り出して老婆に渡した。旅費にして何ヶ月分になるのかと考へると少し惜しいが、老婆は差し出す見返りが大きいほど頼もしく応えてくれる類の人物だと、数年の付き合いで熟知している。

「確かに。しばらく待つておいで、すぐに取り返してあげるよ」

老婆はにんまりと笑みながら請け合つてくれた。

方々に伝手のある彼女がそう言つなら間違はないだろ?。

(だが……シホには心配をかけただろ?)

杖から遠く離れられないはずの彼女だ。あの牢獄の周辺に彼女の話しが相手となるような死靈がいるとも思えないし、丸一日も一人にされてはさぞかし不安に違いない。

大人しいまれびとの少女の姿を思い浮かべながら、ラダは杖を取り戻した後に志穂に対してどう謝罪するか、その言葉を今から考えることにした。

押収品の杖が王子リステスによつて持ち去られたという事実をラダが知るのは、数日後のことだった。

*

あの後、リステスは警備隊に話をして、本当にラダの白い杖を

自分の物にしてしまつた。そして彼は杖を抱えてエテルベリを離れ、少し北にあるという騎士団の居城へと出発したのだ。

否応なく、志穂もその後を文字通り引きずられるように連れて行かれることになる。

捕まつたラダがその後どうなつたか、確かめることも叶わぬまま。志穂はラダの白い杖から遠く離れることができない。離れようとしても進めず、逆に杖の行く先に引きずられてしまつ。この時ほど、その枷を忌々しく感じたことはない。

それでも、ラダの傍にいた時のようリステスの傍近くにいることは嫌で、当初志穂は杖から離れられる限界ぎりぎりのところまで遠ざかるうとした。

けれどもあの王子は、

「どうしてそんなに離れたところにいるの？ 僕の傍においてよ」などと言つて、自分の提案が断られることなど夢にも思つていなかのよつた笑顔で志穂を手招くのだ。

(……本当に、何なんだろう、この人は)

精一杯睨み付けても、少年は気になった様子がない。

むしろ彼の目の届くところにいた方が、声をかけられる機会が減るので、仕方なく志穂は恐怖を呑み込んで彼の傍へ近付いた。死靈が見えるからといって死靈に干渉する力があるわけではない、とラダは言つていたし、少なくとも危害を加えられることははずだと信じたかった。

少年の隙を見て杖を取り返せないか、といつ思惑もあつたにはあつたのだが、それは叶わなかつた。

数日の旅の間、彼はまったく付け入る隙を志穂に対して見せなかつた。

さすがに王子だからだろうか。街道を北の方角へ進むリステスは馬車に乗り、さらにその周りを騎馬兵たちに囲まれていた。そして夜は通りがかった街の一一番大きな屋敷に泊まり、歓待を受けていた。「殿下をこうして我が屋敷に迎え入れることは、まことに光榮

の至りで……」

領主のような身分らしい、年輩の男のへりくだつた口上を、リストは興味なさげに聞き過ごしていたものだ。

その間も、彼は白い杖を腕に抱えて離さない。

食事の際などには必ず傍にいる侍従に杖を預け、決して手放さないようきつく言いつけていた。それ以外の時には常に腕に抱え込み、志穂に向かってにこりと微笑むのだ。

「ひんやりとしていい杖だね、これ。気に入ったよ」

それはある人の母親の形見なのだ、と言つても、彼は決して意に介さないだろう。その程度のことは志穂にも想像がついた。

（でも、変なのは、この人だけじゃない……）

リストスが、普通の人間の目には見えないはずの志穂に堂々と話しかけていても。

まるでお気に入りの人形を連れ歩く幼児のように、白い杖を抱えて歩いていても。

周囲の衛兵や侍従たちは決して何も言わなかつた。彼らは慣れたような、諦めたような目をして、黙々と王子の下知に従つてているのだ。

それが志穂にはひどく奇妙な光景に見えた。いくら王子だからといつて、諫める人間の一人や二人くらいいてもいいものだろうに。

「王都やこの辺りでは、あんまり黒髪の人は見かけないんだけど、君の髪の色は綺麗な黒だね」

一体何が楽しいのか、リストスはこちらが黙り込んでいてもお構いなしに話しかけてくる。

そしてしばらく飽きたままで一人で取り留めのないことを喋つているのだ。

「アーフェルでも西や南の沿岸地方に行くと黒髪が多くなるらしいし、僕の母上は南方の国から嫁いできたそうだから、とても綺麗な黒髪だつたけど。でも君は母上の国の人たちともまた顔立ちが違うね。あの山の人たちも髪は黒かったけど、そんなに目の色は濃くな

かつたし……」

数日間、恐怖を堪え忍んで口をつぐみ、少年の言葉を聞き流し続けた成果といえば、彼の顔を見たり声を聞いたりして生じる恐怖を呑み込むのが若干上手くなつた、ということくらいである。

そうして無為に時は過ぎ、杖を取り返す隙をどうしても見つけられないまま そして力ずくで奪い返そうといつ勇気も出ないまま リステス一行は目的地へと辿り着いてしまつた。

「見えた。ほら、あれが僕の住んでる城だよ」

馬車の小窓から見える風景を指さして、リステスは言った。

「ヴィルフオート城っていう名前なんだ。気に入ってくれるといいんだけどな」

その『城』は、小高い丘の上に築かれた灰色の城塞のようだつた。丘の周囲には深い堀が巡らされ、その向こうに背の高い城壁がある。

一重に築かれた壁を越えた先、丘の頂上に、灰色がかつた石造りの堅固な城がそびえていた。

リステスの乗つた馬車は堀に渡された跳ね橋を通り、衛兵たちの敬礼を受けながら、壁に設けられた城門に入る。

城門の上部には、巨大な紋章の彫刻が誇らしげに掲げられていた。それは、ある生き物の姿を図案化したものようだつた。馬車はその下を潜り抜けて丘の上へと向かつた。

槍に貫かれ、血を流しながら横たわる竜の紋章の下を。

第九話 灰色の城

城壁を越え、兵舎と思しき平屋の建物を横手に見ながら道なりに丘を登る。

一つの守備塔に見下るそれながら城門をもつ一つ潜り抜けると、城の前庭らしい空間が広がった。

リステスはそこで馬車を降りた。とつあえず志穂もそれに従う。「殿下、『じ無事で何よりで』『ざこます』

「うん」

出迎えた侍従らしい男に生返事をしながら、彼は杖を抱えたまま城の建物の方へ足を向けた。

ヴィルフォート城は、丘の頂上を平らに削った土台の上にいくつもある、飾り気のない石造りの四角い建物や塔で構成された城のようだつた。建物と建物の間には中庭が設けられ、それぞれが屋根付きの回廊で繋がっている。

無骨とも見える石造りの外観に反し、灰色の城の内部は色鮮やかなタペストリー や絨毯、銀製の調度品で飾られていて、この間見たブレニー子爵の屋敷ともあまり遜色がないくらいには華やかだつた。少なくとも内装は。

けれども城全体に漂うこの雰囲気はどうだらう。

決して真夜中ではない、青空に太陽のさんさんと輝く昼間であるにも関わらず、重苦しげんよりと淀むような城内の空気は灰色の外観から受ける印象とよく似ていた。

それは分厚い石壁と小さな窓のせいと、あまり陽の光が入つてこないからだろうか。

王子を出迎える衛兵や侍従、下働きの召使いと見られる女性まで、皆一様に表情に乏しいからだろうか。

あるいは 中庭の隅、回廊の角、石壁の表面やタペストリーの陰に見える『影』のせいだろうか。

エテルベリの街で見かけた死靈やジエフ、カレンらは、見た目には生きた人間とほとんど変わらなかつた。けれどもこの城のそこかしこで彷徨つている影は、輪郭がぼやけてはつきりとした形がなく、白とも黒とも灰色ともつかない奇妙な色彩に覆われている。曖昧な輪郭の体から突き出た頭部らしきものと、時折何かを求めるように宙を彷徨う手足らしきものがなければ、人影とすら判別がつかなかつたかもしれない。

(……あれも、死靈？)

でなければ、まだ志穂の知らない異形の存在だらうか。

いざれにせよ、見ていてあまり心穏やかになる類のものではない。「娘。あれらを注視してはならぬ。近付いてもならぬ」

不意に背後の方から低い声がした。

驚いて振り返ると、すぐそこに一人の男性が立つていた。
目深に被つた兜から覗く青い目が志穂を見下ろしている。鈍く光る鎖帷子の上に白い胴衣を着込み、腰帯に剣を下げ大きな盾を携えて、顎鬚をたくわえた精悍な風貌は、兵士というよりもむしろ騎士という言葉が相応しいようと思えた。

騎士団の長であるというあの少年王子よりは、よほどそれらしい。

「ここは怨念に満ちた城。早々に立ち去られよ」

その男性は端的にそう告げると、すぐに横合いの壁を音もなくすり抜けて志穂の前から去つてしまつ。だから志穂は、できるものならそうしたいのだと言い損ねた。

リストレスは階段をいくつか上り、衛兵たちに左右を守られた扉を開けて、中の部屋へと入つていつた。

志穂は一瞬躊躇つた後、拳を軽く握りしめて、その部屋の中へと滑り込んだ。

それなりに広々とした部屋の中には、天蓋付きの寝台や金で縁取られた大きな姿見、側面や脚に丁寧な彫刻の施された木のテーブルと椅子、銀の燭台や水差し、衣装箪笥といった風に、豪華な調度品

が一通り揃っている。床には柔らかそうな絨毯が敷かれ、壁の暖炉の周りには肖像画や羊皮紙の地図、それに大きなタペストリーが掛けられていた。

タペストリーに織り込まれている模様は、先程も城門で見かけた、あの紋章のようだ。

角の生えた爬虫類のような頭部、何対もの蝙蝠の翼、鱗に覆われた長細い胴体と尾。

そして背中に突き刺された巨大な槍と、そこから流れ出して体の半分を赤く染める血。

鮮やかな色糸で巧みに表現されたその竜の姿は、城門に掲げられていたものよりもずっと生々しく見えた。

ジエフによれば、アーフェル王家の紋章は英雄に退治された竜なのだという。ならばこれがそうなのかもしれない。志穂からすると、何もわざわざ痛々しく血を流しているところを紋章にしなくともと思ってしまうのだが、アーフェル人と日本人の感覚は違うのかもしれない。

「どう? ここが僕たち聖ユオル騎士団の城だよ」

リステスは椅子に座りながら、輝くような笑顔を志穂に向けた。

「この城はとても古くて由緒ある城なんだよ。この建物自体は百年前のものだけど、城壁と堀は一百年前、基礎部分とか井戸とかはさらにずっとずっと昔、建国期にまで遡れるんだって。かの英雄王、聖ユオルに仕えた騎士の居城があつたところだそうだよ」

聖ユオル、竜殺しの英雄王。アーフェルを建国した王なら、王子であるリステスはその聖ユオルの子孫だということになるのだろうか。

退治された竜と、ラダの探す竜、そして竜の船。

それらの話がどの程度重なり合っていることなのか、志穂にはよく分からない。けれどもまったく別の話とも思えなかつた。

「…………あの…………あなたは…………」

「リステスって呼んでよ。あ、そりいえば君の名前もまだ聞いてな

いや

王子は座つたまま、やや距離を置いて立つてゐる志穂を見上げた。
「ねえ、名前を教えてよ。教えてくれたら一つ頼みを聞いてあげる
から」

頼み、と志穂は目を瞬かせた。

そして少し思案する。この無邪氣な語り口の少年の言動が信用で
きるとは思えないが、名前を教えるくらいで現状がこれ以上悪くな
ることもないだろう。

「……岸辺、志穂」

志穂が名前、と小さく付け加える。

「キシベ、シホ？ やつぱり異国風だね。シホ、シホ、不思議で素
敵な響きだなあ」

この上ない美少年に名前を連呼されても、ラダの時のように氣恥
ずかしい思いはまったく感じなかつた。代わりに感じたのは強烈な
違和感と居心地の悪さ、少しの氣味の悪さで、志穂は彼の言葉を遮
るように声を上げた。

「そ、それより……私の頼みを聞いてくれるんでしょう」「うん」

「じゃあ、その その白い杖を、返して」

ありつたけの勇気を振り絞つて告げた願いに対し、リストスはに
っこりと笑つた。

「それは駄目」

さすがにここまで堂々と朗らかに前言を翻されるとは思わなかつ
たので、志穂は怒る前に呆気に取られた。

「だって、この杖はもう僕のだからね。それに君に渡したら、きっ
と君はどこかへ消えていつてしまつだらう？ そんなのはつまらな
いよ。僕は君が気に入つたんだ」

志穂は暗澹たる気持ちになつた。絶望的な気分、と言い換えるでも
いい。

リストスはつまり、志穂が彼から遠ざかることは許さないと言つ

てこるのだ。

「……気に入つたつて、どうして?」

弱い口調で問うと、

「そうだな、君が黒髪で、異国人で、ちょっと変わった感じの子だからかな」

どこまで本気なのか分からぬよな答えを、至つて眞面目な口つきで言つ。

それからリストはふと思いついたように元通り続けた。

「ああ、でも。この杖のこと、詳しく教えてくれたら考へてもいいよ」

「……杖のこと?」

「どういう謂われがある杖なのかとか、君以外に持ち主がいるならそれは誰か、とか」

杖の本来の持ち主である青年の白い顔が、志穂の実在しない脳裏に浮かんで消えた。

(ラダ……)

離れずに付いていくと約束したのに、じつして離れてしまってから何日が経つただろう。

リストと話せば話す度、青年がどれだけ親切だったかが身に染みるようだ。

志穂は唇を引き結び、首を横に振つた。

リストの言つことは何一つ信じられない。だが、例え本当に杖のことやラダについて知つていて話をれば杖を返してくれるのだとしても、やはり志穂は何も言わないことを選ぶだらう。志穂が杖を抱えてラダの元に戻つたところを、今度は青年も一緒にたに捕まえられるようなことになつては堪らない。

「そう。ならいや、この杖は大事にしまつておくからね。でも、後で教えてくれる氣になつたらいいつでも言つてね」

朗らかにそう言つリストを、志穂は怪訝に思った。

何故、彼は杖のことを知りたがるのだろう。いや、そもそも彼は

何故、杖を自分のものにしたのだろう。

人の形見についてやかましく訊ねるのは気が引けたから、志穂は杖についてラダに質問したことはない。ただ、あの杖は、ラダが死靈術士としての力を行使する際に用いられる道具だ。だから杖自体に何らかの特別な力が込められているのだとしておかしくはない。ラダと同じく死靈を認識できるリストスが、杖に何らかの力を見出した というのもありそうなことだ。

それでも、何か引っかかる。

そういうえばリストスは杖の材質を気にしていたようだった。石でも木でもない、と。

以前にも杖の材質について語られる言葉を耳にした覚えがある。そう、あれは確か、杖を盗まれた時のことだ。あの時、倉庫にいた盜人たちは何と言つていただろう。

「殿下」

志穂の思考を遮つて、リストスを呼ぶ声が部屋に響いた。いつの間に部屋にやつてきたのだろう、二十代半ばに見える年頃の女性が扉の傍に佇んで、リストスに向かつて頭を下げている。褐色の髪を後頭部で一つに纏め、姿勢良く背筋を伸ばしているその姿はいかにも真面目そうだ。

「ご帰還をお待ちしておりました。此度もご無事で何よりです」

「ああ、バーサ。ただいま。留守の間、何もなかつた?」

「はい。特に申し上げるほどのことは何もございませんでした。」

「…ところで、そちらの方は?」

ちらりと女性に視線を向けられ、志穂はそれほど驚きはしなかつたものの、彼女の視線の冷たさに少し居心地の悪さを覚えた。

「シホだよ。気に入つたんだ」

リストスは笑顔で、紹介にも説明にもなつていなかった。

「…さようでござりますか」

「ごの城で困つてたら助けてあげるんだよ、バーサ」

「畏まりました」

バーサといいうらしき女性は真面目な顔つきのまま答える。

「それじゃあ、僕はちょっと出でくるからね」

そう言つと、リストレスは杖を抱えて立ち上がり、部屋の扉を開けて外へ出て行つた。

その後を追うべきかどうか、志穂が迷つてゐると、

「シホ、でしたね」

と、部屋に残つた女性に刺々しい声を掛けられた。

「私はバーサ。リストレス殿下の侍女として、長らくお仕えしております」

「あ、はい、ええと……岸辺志穂です。はじめまして……」

とりあえず最低限の挨拶はしたもの、好きでこの場にいるわけでもないのに「これからよろしくお願ひします」などと続けるのは何か違う気がして、志穂はそれ以上何も言えなかつた。そんな少女をバーサはじろりと見下ろす。

「この城に来たからには勝手な行動は慎み、くれぐれも王子殿下に迷惑をかけることのないように。それと、勘違いなさらぬことです。殿下は毛色の違う娘を面白がつてゐるだけなのでから」

志穂は一瞬ぽかんとして、バーサといいう名の女性を見上げた。

誰であつても頭を下げて王子に仕えるのが当然だと思つていそうな顔だつた。

勝手に連れてこられて、迷惑をかけられてゐるのはこちらの方だ。

と言い返せれば良かつたのだろうが、その勇氣が出ないうちに、バーサは志穂を冷たく一警すると、扉をすり抜けてどこかへ行つてしまつた。

(……本当に、何なんぞう、この人たち)

志穂はもやもやする心を抱えたまま、枷に引きずられる前にリストレスを追つて部屋を出ることにした。

リステスは城にいくつある中庭の一つにいた。

中庭では、屈強な男性たちが互いに剣と盾を構えて打ち合つたり、あるいは素手で組み合つたりして、戦いの鍛錬をしているようだ。リステスは杖を抱えてその様子を眺めながら、この場にいる人々の中では一番年嵩で立派な感じのする男性と言葉を交わしている。

今すぐ志穂に話しかけてくる素振りはないので、少し安心して中庭を眺めた。

ここが騎士団の城だというなら、鍛錬している彼らは騎士なのだろうか。

その割には、顔や腕が傷だらけだったり、髪や髭が整っていないからたりして、粗野な風に見える男性ばかりなのはどういうわけだろう。もし志穂が生身の少女のままで出くわしたら、回れ右して逃げ出しだくなるような大男もいる。

もつとも、物語の外の本物の騎士というものはこいつのものなのがかもしれない。ましてや聖ユオル騎士団は世にも悪評轟く非道な集団なのだ。中庭にいる彼らが皆、老人も子供も問わない殺戮に関わっているのかと思うと、胸の中がざわつくように感じる。

（でも、の人たち……）

平然とした顔で訓練に精を出しているあたり、やっぱり気付いていないのだろうか。

あの気味の悪い曖昧な『影』のようなものが、中庭のあちこちに吹き溜まって、まるで靄かかかったようになっていることに。

今も、取つ組み合つてゐる男性たちの足元にふつと影の一つが現れて、彼らの足を掴もうと曖昧な手足を伸ばすような仕草をしている。けれども影は男性らの踏み鳴らす足音にかき消されて、一旦霧散したかと思うと、少し離れたところでまたあやふやな形を結んだ。あれらを注視してはいけない、と言つていた死靈の男性のことを思い出す。

彼はこの中庭にいる誰よりも騎士らしい容貌をしていたように思う。あの人は一体何者だったのだろう。

薄気味の悪い光景を眺めながら、そんなことを考えていると、

「おい、そこの黒髪の嬢ちゃん」

いたさか乱暴な口調でそう話しかけられた。

こんなにそれぞれ違う人たちに話しかけられる日は、この世界に来て以来のことだ。

そう思いながら振り返った先にいたのは、ラダと同じ年頃、二十歳前後くらいの青年だった。

ひょろりと痩せて背が高く、赤茶けた髪は不揃いで、似た色の目が狐のように吊り上がっている。そしてラダが着ていたものよりも遙かにぼろぼろで継ぎ当てだらけの服を身に纏っていた。

「アンタ、あの王子様が連れてきた奴だろ？」

はい、と小さく返事はしながらも、志穂は胡乱げな感情を隠さず、青年を見上げた。

「あの王子様は年上趣味だとばかり思ってたが、異国人の年下のガキでも構わないのな。あんなのに気に入られて、可哀相になあ」
狐に似た風貌で、にやにやとした薄笑いを浮かべながらそんなことを言わざるも、むしろ反発心が起るだけだ。

同じ年頃の男性でもラダとはまるで違う。

「ううう、オレはロイ。嬢ちゃんは？」

「……岸辺志穂、です」

あまり気乗りはしなかつたが、一方が名乗つて居るのにだんまりを決め込むのも気まずいので、小声で答える。

変な名前だな、と青年は臆面もなく呟いてから、

「なあ、突然城に連れてこられたのなら勝手が分からねえだろ。オレが色々と教えてやろうか？」

いかにも親切めいた言葉だが、にやにやと嫌な笑みを浮かべながらこちらを見下ろす素振りといい、馴れ馴れしい感じのする口調といい、このロイという青年は、ラダやジョンのよう信用できる人間には到底見えない。

その思いが表に出ていたのだろうか、ロイは目を細めた。

「はは、そんなんに胡散臭そうに見るなよ。オレとアンタは似たような境遇の間柄なんだからさ」

「似たような……？」

同じ死靈の身だと言いたいのだらうか。

「そうさ。見れば分かる。あの王子様に向ける皿」

口元を歪める青年の首に奇妙な黒い痕があることに、志穂はふと気が付いた。

不自然なほど黒々としたそれを思わず注視すると、ロイもまたやれに気付き、一瞬笑みを消した。

「ああ、これがなんだか教えてやるうか」

そう言って、手を伸ばしてきたロイに手首を掴まれる。かすかにひやりとした気がしただけで、あとはまったく体温の感じられないその手の感触にぞつとする間もなく、胸が軋み、視界が揺らめいた。そうして脳裏に浮かぶものを、志穂は見た。

ロイと名乗った赤茶けた髪の青年が、首に縄をかけられているところを。

だらりと手足を伸ばした格好で台から吊られて、ゆらゆらと揺れている様を。

そして少し離れたところにそれを眺めている、美しい少年の退屈そうな顔を。

息を呑み、目を見開いた少女を見て、ロイは低く笑った。

「オレはな、ドブ溜めみてえな場所に生まれて、生きるために何でもやつた。盗むためには人も殺した。けどな、あの王子様ほど殺しちゃいねえぜ」

胸の内を突き刺すような激しい感情。これと似たものを以前も感じた。

「それでもオレは薄汚い盜賊として首吊り台送り、王子様は綺麗なお顔で今日も」機嫌だ。これ以上不条理なこともねえよなあ？」

怒り。憎しみ。そして、生者への恨み。

無惨に命を奪われた死者の怨念 カレンの時と同じ感情が志穂の中で暴れている。

けれど、今こうして志穂の胸を苦しめるそれは、果たして本当に青年から来るものなのだろうか？

「分かるだろ、アンタなら。分かるよなあ。だつて、アンタも志穂はとっさにロイの手を振り払った。

赤茶けた髪の青年から、彼がもたらす負の感情から逃げるよう踵を返す。

中庭から離れようとする志穂の背中に向けて、嘲笑うような声が投げかけられた。

「これから仲良くしようぜ、お嬢ちゃんよ」

中庭を飛び出し回廊を駆け出してそう間もないうちに、見えない壁が行く手を阻んだ。志穂は先に進むための無駄な努力をする氣にもなれず、しばらくその場で一人うずくまっていた。

ロイは追いかけてはこなかつたし、城までの道中とは違い、リステスもわざわざ探しには来なかつた。

次第に日が落ちはじめ、灰色の城にも宵闇が迫り来る。

回廊からも、城内に灯された明かりが窓からほのかに零れているのが見えた。

けれども人気のない回廊は深まる闇に呑まれたようで、少女の孤独をますます深める。

城には死者を見る力を持つリステスがいて、何人の死靈がいる。その気になれば対話する相手には困らないのに、無言のラダの後を付いていくしかなかつた旅の間よりも、今の方がずっと孤独に感じる。

「のままここでこうしていくても仕方がない、そうは思うがリストスの元へ戻る気も起こらず、志穂はふと下を向いた。

そして眉をひそめる。

足元の暗闇の中に、何かが「づ」めいでいるような気がした。よく見ると、それはあの得体の知れない影と同じ存在のようだ。気味悪く感じた志穂が数歩後ずさり、その影から離れようとした途端、影の曖昧な手が伸びてきて志穂の足を掴んだ。

感触はなく、体温もない。

けれども確かに影は志穂を捕らえている。その証拠に、掴まれた足を動かそうとしても動かない。

(何、これ……)

悪寒を覚えて身を竦ませる志穂に向けて、影の手がもう一本、また一本と伸びてくる。

まるで、志穂を闇の中へと引きずり込むとするかのように。

「散れ」

低い、けれども鮮烈な男の声があたりに響いた。

と同時に手首を掴まれ、ぐいと引っ張られる。影に掴まれていた足からその手が剥がれた。

影たちばどこか口惜しそうにその手を彷徨わせてから、ふっと霧散するように消え失せた。

「忠告したはずだ、娘。あれらに近付いてはならぬと

「あ……」

志穂を引き寄せたその男は、あの騎士のような風貌をした死靈だった。

「あ、ありがとうございます……」

まだ動搖の収まらない頭で、どうにか礼だけを述べると、騎士の靈は厳しげな表情のまま頷いて志穂から手を離した。

「あれらは、死靈の成れの果て。……海のかなたに行けぬまま自身の形を失い、怨念そのものと成り果ててしまったモノたちだ。強い意志をもって拒まねば、怨念に取り込まれてしまう。心せよ、次も

「うして私がそなたを助けられるとは限らぬ」

「どこか突き放したようにそう言つと、彼は踵を返した。

「娘よ、この城を離れられぬのなら、せめて強く心を持て。自分の身は自分で守ることだ」

そして、先刻と同じように、少女の前からさつわといなくなつてしまふ。

待つて、と呼び止めようとして躊躇つ。

そのまま消える騎士を見送ると、志穂はふと頃垂れた。

（私……何してるんだろう）

杖を取り返すこともできないまま、こんな城まで連れてこられて、ただ怯えて縮こまるだけで。

挙げ句に得体の知れない影に捕まつて、人に助けられて。もしあの騎士がもう少し親切めいた態度を取つていくれたら、きっと寄り縋つていただろう。今までラダに頼り切つていたのと同じように。自分が何も判断のできない迷子になつたようで、ひどく情けない気持ちになる。

いや、実際にその通りなのだ。

故郷から遠く引き離され、見知らぬこの世界に靈として身を置いてから、もう幾日が経つだろう。

何も分からぬその最初からラダという青年の傍にいられたことが、どれだけ自分を孤独と寂しさから掬い上げてくれていたことか。彼という導き手を得られたことが、どれだけ幸運だったか。志穂は改めて実感した。

（……今までが、恵まれてたんだ）

ラダとの間に感じた彼との溝はそう簡単に埋められるものではないが、それでもこうして離ればなれになつた今、彼の今までの優しさが一層懐かしく思える。

けれども、もういくら怖がつても寂しがつても慰めてくれる者はいない。親身になつて助けてくれる者もない。あの騎士のような死靈の男性も、言つだけ言つてさつさとどこかへ消えてしまった。

見知らぬ世界で死靈として田覚めてから、ずっと傍にいてくれたラダはここにはいない。

志穂は田を伏せ、小さく拳を握りしめた。

この灰色の城の中で、本当に信用し、頼れるのは自分だけ。これから何をなすべきか、どう気を付け行動するべきか、考えられるのも自分だけ。

自分自身だけなのだ。

第十話 誘い

とにもかくにも、リストスに怯えて流されるままではいけない。なんとかあの白い杖を取り戻して、ラダの元へと戻るべきだと、志穂は改めて自分に言い聞かせた。

リストスは恐ろしいが、それでも彼は生きた人間だ。ラダと違つて死靈を操る術の心得はなく、あちらから死靈に触れる力も持たないようだつた。あのロイという青年は胡散臭い人物だが、少なくとも王子に味方する者ではない。気にかかるのはバーサという侍女の女性で、彼女はリストスの意に反することを看過しそうにない。

いつそのこともう力ずくで奪えるか試してみようか、靈体の身なら、その気になれば生前では考えられないくらいの怪力を出すこともできるかもしない。などと考えながら志穂がリストスの前に戻つてみると、金髪の王子の傍にはもう白い杖はどこにも見当たらなかつた。

「あの杖なら、秘密の場所に隠したよ」
見つけられるものなら見つけてごらん、と言いたげに笑うリストスを、志穂は睨み付けてから杖を探しに行つた。

杖が一所に安置されて動いていないなら、志穂の移動可能範囲も一定のはずだ。見えない壁に囲まれた空間をぐるりと巡つて、その中心部を探せば、すぐに見つけられるだろうと最初は思つた。靈体の身にとつては、どんな壁も扉も無意味なのだから。

幸い、志穂が城の中の動ける範囲をうろついて回ることに対し、リストスはとやかく言わなかつた。彼も騎士団の長、城の主としてやるべき仕事が多いらしく、いつまでも志穂にかまけていられないようだ。

しかし、探しはじめて間もなく樂觀的な思いは消えてしまつた。城の建物の地下あたりにあるらしい、と見当を付けたまでは良かつたが、貯蔵庫や物置として使われている地下をくまなく探すのは

存外手間がかかるといつことに気が付いたのだ。

その上、

「殿下の『迷惑になる』ことはしていませんね」

と、侍女のバーサが定期的に志穂の様子を見に来るのである。

「……い、いえ、何も」

志穂が首を横に振ると、バーサは胡乱げな目つきで少女を下ろす。そしてそのまま居心地の悪い沈黙をたっぷりと経た後、わざとらしく鼻を鳴らして去っていくのだ。貴方の考えは分かっていますよ、とでも言いたげに。

そのやり取りを繰り返すこと数日、命わせて十度目にもなると、杖を探し続ける気力も削がれる。

バーサが立ち去った後、志穂は深いため息をつかずにはいられなかつた。普段は呼吸などしなくても平気なのに、ふとした折にこうして生きた人間のような仕草が出てしまうのは、志穂がまだ生前の肉体の感覚を忘れられずにいるからなのだろうか。

暗い貯蔵庫の隅にはあの『影』がうごめいていたが、騎士の忠告に従い、そちらには視線を向けない。

ふと地上へ続く階段から足音がして、志穂は顔を上げた。

階段から貯蔵庫に降りてきたのは、下働きらしい一人の男たちだつた。彼らは運んできた箱を貯蔵庫に置くと、一息つくように座り込んだ。そしてだらけたように手近な箱に身を預け、

「聞いたか？あの王子様、エテルベリで白昼堂々暗殺されかけたつてよ」

「ああ、聞いた聞いた」

貯蔵庫の隅に死靈の少女が佇んでいることにも気が付かないまま、男たちはひそひそと噂話をしあじめた。

「騎士団にやられた村の生き残りだってよ。確か、前にも似たような事件があつたよな」

「それなのに大した用心もせずにふらふら出歩いて、また暗殺されかかっちゃ世話ないね。自分が命を狙われて当然の身分だって、自

覚してないんだろうな。まあ剣の腕前だけは確からしいから、そう簡単には死なんだろうが」

「まったくだ。それでなくても、日頃から何もないところに一人で話しかけるような、頭のおかしい王子だつてのに。あれが将来の国王かと思うと、そつとするね」

「は。心配はしなくとも、あの王子が王様になることはないだろうぞ」

男の一人が心底から馬鹿にしたように言つた。そこには王子に対する敬意の念など欠片もない。

「じゃなきや、どうして大事な跡継ぎがこんな地方の城にいて、名ばかりの騎士どもを率いて、盜賊退治だの焼き討ちだのに精を出してるんだよ。王宮から追い出されたのさ、あの王子は」

「じゃあ誰が次の王なんだ？ 他に王子はいなんだろ？」

「姉君の王女様がいるさ。弟と違つてごく真つ当で聰明な貴婦人だつて聞いたぜ。女王でもなんでも、あれよりはずつとましだと思うがね」

「確かに」

もう一人の男は納得したように頷くと、

「……おっと、そろそろ行かねえと怒られるな」と呟いて立ち上がつた。

貯蔵庫を出て再び地上に戻つていく男たちを見送りながら、志穂は今しがた耳にした話を複雑な心持ちで思い返した。例えあのリストスが対象であつても、他人の陰口を聞くのはあまり気分の良いことではない。

だが、一方で、彼らの言つていることは間違つていないと感じるのはおかしい。

リストスは恐ろしい。

彼は頭がおかしい。

彼は人の命を何とも思わない狂人で、志穂を殺した張本人だ。

(……でも)

先程の男たちが噂していた言葉。リストスが何もないところに一人で話しかけていること。その点については、別に彼がおかしいわけではないのだ。普通の人間には見えなくとも、確かに志穂は存在しているのだから。ラダのように周囲の目を意識しないのは非常識な行為かもしだから。狂気の沙汰というほどではない。

もつともリストスは生きた人間と死靈の区別をあまりつけていないようだし、普通の人間には死靈が見えないということをちゃんと理解しているかどうかは分からぬが。

(……今は杖を探すことに集中しないと)

志穂は首を振り、どうでもいい思考に沈みかける自分を止めた。

いつまでも薄暗い地下に籠もつていては精神的に疲れるし、気力が削がれて歩るものも歩らない。関係のない物思いに沈みかけるのもきっとそのせいだ。

そう思い地上に出て、中庭を通りかかったといふ、あのロイという赤茶けた髪の青年と出くわしてしまった。

「よお、嬢ちゃん、探し物か？ 手伝つてやろうか」

ロイは以前と変わらず嫌な感じのする薄笑いを浮かべて、志穂を見下ろした。

正直に言つて、この青年とはあまり関わり合いになりたくないかった。本人の言によれば彼はかつて人殺しも辞さない盗賊だったというから、尚更だ。

志穂は小さく頭を下げる

「ありがとうございます。でも、一人で大丈夫です」と素っ気ない返事を返した。

そして足早にロイの傍から離れようとしたのだが、その前に彼の痩せた腕が志穂の行く手を遮った。

「おいおい、少しくらい話に付き合つてくれてもいいだろ。この城でまともに話せる奴は貴重なんだぜ？ 安心しろよ、別にとつて喰

おうつてわけじゃねえ」

これが生身の肉体を持つ相手なら田を閉じてすり抜けることもできただろうが、靈体同士ではそういうはない。飛んで逃げるという選択肢もあつたが、志穂はふと思い留まつた。嫌なものから逃げてばかりでは、何の情報も得られない。

勇気を出して、志穂はロイの方へ向き直つた。

「……あの。この城には、そんなに死靈が少ないんですか？」

「おう。靈もどきなら、そこら中にいやがるけどな。あいつらは話なんて通じねえし」

とロイは、中庭のそこかしこでうごめいているあの影たちを指し示した。

確かにあれらには、話が通じるほど明確な意志や知性といったものは感じられない。

「オレが行ける範囲では、あの王子様にくつついてる侍女さんだろ、騎士のおっさんだろ、あと……」

ロイはいくつか志穂の知らない名も挙げたが、合わせても両手の指で数えられる程度しかいないようだ。城中にいる影たちの数に比べると、確かに多くはない。

「まあそれくらいか。何人かはアンタも多分見たことはあるんじゃねえか？」

「はい。騎士っていうのは、あの白い服に盾を持つた、顎鬚の……」

「そうそう、そいつ。よくは知らねえが、昔この城に住んでた正真正銘の騎士らしいぜ。神出鬼没で融通の利かねえ、頭の固いおっさんだけよ。まあ、あの聖ユオル騎士団の騎士様がたよりはよっぽど立派な騎士様だったんだろ？よ」

ロイは皮肉げな口調で言いながら、中庭で鍛錬をしている人々の方へと視線を移した。

そこでは今日も、粗野な男たちが汗を流している。戦士と呼ぶならまだしも、やはり、あまり騎士には見えない。特にあの騎士の死靈と比べると雲泥の差がある。

「……あの人たち、やつぱり騎士団の人なんですか？」

「そうだぜ？ 栄えある聖ユオル騎士団の代理騎士様がただよ」

「代理……？」

眉をひそめる志穂に対し、ロイは手を組める。

「そう、代理。本来騎士団に所属する貴族の坊ちゃんたちの代わりの傭兵たちさ」

「傭兵……の人が、騎士団に？ そういうことって、よくあるんですか？」

「さあな。ただ、聖ユオル騎士団がこうも傭兵の巣窟になつたのは、王子様が団長になつた後だしそうだぜ。以前の聖ユオル騎士団は、威張り散らした貴族の子弟の吹き溜まりで、ろくな見回りもしなけりや訓練もしないような……今とは違う意味で名ばかりの集団だつたんだつてよ。当然、盗賊団となんて戦いに行くわけがねえ」

あの頃は楽だつた、とロイは嘆息する。何が楽だつたのか、志穂はあえて聞かなかつた。

一年ほど前、王子リステスが十四歳で騎士団長に就任した時も、あくまで名目上の役職だと思わっていたらしい。

だが彼には、騎士団長として真面目に働く意欲があつた。騎士団に所属する貴族の子弟が『使えない』ことが分かると、リステスは彼らに軍役の代わりと言つて金を払わせ、そしてその金で、代理として働く傭兵を雇わせたのだという。

本来騎士の称号を持つ人間の代わりの、実働部隊として雇われた傭兵。

現在、聖ユオル騎士団の実働部隊として各地で非道を働いているのは、そういう種類の人々らしい。

「それも食い扶持を求めてそこいらをうろついてるような、盗賊紛いのただの傭兵じゃないぜ。……あのお坊ちゃんは変に潔癖なところがあるみてえでな、部下が必要以上に略奪をするのも女を攫うのも許さなかつた。自分は平然と皆殺しを命じるくせにな」

ロイは呆れたように首を振り、その結果、と続けた。

「今騎士団に集まつてゐるのは、略奪にも女にもとんと興味がない食うより寝るより人殺しが大好きな、王子様と同じ類の頭のおかしい連中ってえわけだ。笑える話だろ？」

口元に嘲笑を浮かべる青年に対し、志穂は少しも固い表情を動かすことができなかつた。

交錯する悲鳴と怒号、嗅覚を麻痺させるほどの血の臭い。赤く染まり倒れ伏す老人と女性たちの姿が心の中に浮かんで消える。

唇を引き結んだままの少女の顔を、ロイは面白がるように覗き込んだ。

「もちろん、そんな連中を率いて、命令を出してるのがあの王子様だ。狂つた頭で何を考えてるんだか知らねえけどな。あいつがいなければりや、騎士団がこうも人殺し集団として名を馳せることはなかつた。オレもアンタも、きっと死なずに済んださ」

ラダよりも高く、リストスよりも濁つた声で、青年は饒舌に喋り続ける。

「せめて激しい戦争のあつた時代に生まれれば、誰より人殺しの好きな王子様だつて英雄にでもなれたんだろうがよ。はつ、どうせあいつは王にもなれずに惨めに落ちぶれる。もしかしたら救いようのない狂人として幽閉されるかもな」

脳裏に次の王位について噂していた男たちの言葉が蘇る。

「だから、そんな奴　　いつそのこと今死んじまつた方がいいよな？」

不穏な言葉に、志穂ははつとしてロイを見上げた。

青年の口元が吊り上がる。見透かすような、嫌な表情だつた。

「なあ、シホの嬢ちゃんよ。アンタはあの王子様が憎くはねえのか？　　あいつに同じ痛みを味わわせてやりたいつて、そう思つたことは？」

「…………それは……」

とつそに否定しようとして、志穂はそれ以上、言葉を続けられなかつた。

憎くない、といえば嘘になるからだ。

恐怖。嫌悪。怒りと憎しみ。胸に渦巻くこの感情は確かに、リステスに向けられたもの。

どうして自分が死ななければならなかつたのか。

どうして自分を殺したあの少年は、今も無邪気な笑顔を浮かべているのか。

そんな思いがこの胸に秘められていないと、言い切れなかつた。そんな少女を見下ろして薄笑いを浮かべると、ロイは軽く背を曲げてその耳元に口を寄せた。

「なあに、簡単さ。他の兵士どもにはオレたちの姿は見えねえんだから」

ロイの囁きは、まるで魔羅の誘いのようだつた。

「ちよいとそこらから刃物か何かを拵借して、宙に浮いて、王子様の頭上で手放せばいいんだ。階段や城壁から突き落としてもいいな。それくらいなら嬢ちゃんにだつてできるだろ?」

耳を塞ぎ、先日のように逃げ出したくなる衝動を堪え、志穂は口を睨んだ。

「……あなたはそうしないんですか?」

「あいにくオレはあるの侍女さんに睨まれてるし、王子様にも好かれちゃいねえからな。そりやあ何度も殺そうとしたけどよ、あの金髪野郎、へらへらした顔してことごとく回避しやがる」

「……私も、あの侍女の人には嫌われてると思います」

「けど王子様には氣に入られてるだろ。きっとアンタなら油断させられるぜ」

志穂はこの盗賊の青年が妙に親しげに話しかけてきた理由をようやく悟つた。

要するに、ロイは自分の代わりにリステスを殺してくれる人物を求めていたのだ。そのためにこうして志穂をそそのかして、利用しようとしている。

『 生者に無闇に干渉することは、人に躊躇いなく害を為す悪靈への近道』

ふと、ジョフから伝えられた言葉を思い出した。

リストスを殺してしまえば、志穂は惡靈となり、ラダにとつて退治すべき存在となるだろ。

そうなれば、ラダはきっと躊躇わないだろ。彼は、そういう青年だ。

そしてカレンのように沖つ国へと船出をせられる。

この世には何の痕跡も残さずにして消え失せる。

(やんの、嫌)

嫌だ、と志穂は自分に言い聞かせた。

例え相手が人殺しだとしても、憎しみに駆られて殺してしまえばあつと同じ穴の貉だ。

ロイの言葉に耳を貸しても、彼に利用されるだけ利用されて終わるに決まってる。

「……でき、ません」

志穂は首を横に振り、ロイの傍から数歩後ずさつて離れた。

「私……そんなことより、やることを、やらなこと。今ままだと、狭い範囲にしか動けないから」

「ああ、探し物か」

ロイは少しつまらなそうに呟いたが、志穂が離れるのを止めようとはしなかった。

それから彼は少し考えるような素振りを見せた後、

「嬢ちゃん、あっちにある礼拝堂の地下はもづ調べたか？」

「まだ、だと思います」

「なら、調べてみろよ。聖コオルの聖遺物が保管されてるとかいう、曰く付きの地下室があるぜ」

やや投げやりな口調だったが、嘘をついていふよに思は見られな

い。

「ありがとうございます。それじゃあ、今から探してみます」

志穂は深く頭を下げる、足早に踵を返して中庭から立ち去った。少女の後ろ姿を見送る青年の顔が、ひどく歪んでいた。には気が付かぬまま。

その礼拝堂は、中庭からも程近く、城の建物の陰にひっそりと佇んでいた。

中に人気はなかつた。どうやら、今のこの城の住人たちにとつてここは取り立てて興味を惹くところではないらしい。それを示すよう、木彫りの長椅子や奥にある祭壇の上には埃が降り積もつている。

壁の一面に描かれた壁画は、例の聖コオルの伝説を題材にしたものだろうか。倒れ伏す竜と、ひれ伏す民衆たちの間に挟まれて、若い男女が手と手を取り合い見つめ合っていた。

床にも埃が積もつていたが、その白い層にはつすらと足跡がついている。

志穂が埃っぽい礼拝堂の中でどれだけ動いても、積もつた埃が舞い上がるとはなく、意識しなければ足跡もつかない。その事実が少し胸に染みて痛んだ。

目を瞑つて礼拝堂の石床の下へ抜けると、ロイの言つた通り、小さな地下室があつた。

リスティスの部屋よりもずっと手狭で、三面を石壁に囲まれている。残る一面には鉄の格子が嵌められていて、その向こうに人一人通るのがやつとの狭さの石段が見えた。その他に外部に繋がる窓や通気口などは見当たらない。やはり埃っぽく、どこか息の詰まりそうな小部屋だった。

そんな部屋の中央に、大理石のような石でつくられた円形状の祭壇があり、その上に絹の布がかけられた箱が置かれていた。この箱も石造のようだ。

あの中に、探す杖があるのだろうか。

根拠はないが、そうに違いないといつ奇妙な確信も心のどこかにあつた。もし箱に鍵がかかっていれば、鍵を探しに行かなければならぬが、まずは祭壇に近付いて確かめなければ。

志穂が祭壇に近付き、箱にかけられた縄の布を退けようとしたとき、異変が起つた。

石でできた祭壇の下部から、靄が染み出すように現れたもの。

志穂は、先田のことを思い出してとつさに飛び退つた。
祭壇から離れた少女を追うように、祭壇の内側からどんどん靄が染み出して、狭い部屋の空間を占めていく。形のないそれは、城内を彷徨つている影たちよりも輪郭がさらにぼやけ、手足すらも見当たらない。そのくせ色だけは濃く、見る者を引きずり込んでしまいそうな、深い闇に覆われている。

それは、人の影というより、どぐろを巻いて鎌首をもたげる蛇に似ていた。

(駄目)

志穂はほとんど反射的にそう思つた。

(これは、駄目。近付いちやいけないモノだ)

影の蛇は、巨大な頭を揺らしながら、部屋の隅に下がつた志穂に視線を向けた。正確には影に目はないが、そう感じた。

けれども近付くような素振りはない。どこか窺うように、ただ志穂を見つめている。

とつさに志穂は目を閉じた。

影を注視してはいけない、とあの騎士に言われた言葉を思い出したのだ。

けれども闇に塗り潰された視界の中で、恐ろしい何かが近くにいるのにただじつとしていることには堪えきれず、志穂はしばりしてからそっと目を開けた。

すると、もう影の蛇は姿を消していた。

もう、今までそこに影がいたという痕跡は地下室のどこにも

ない。

石の祭壇と絹布をかけられた箱が、何事もなかつたかのように静かにそこにある。

蛇は現れただけですぐに消えてしまった。もう一度祭壇に近付き、箱を確かめても構わないのではないか。そうは思うものの、志穂はしばらくの間、部屋の片隅でじっと祭壇を見つめることしかできなかつた。

結局、志穂はもう一度祭壇に近付くことなく地下室を出た。

よく見れば、地下室の入り口の鉄格子にも鍵がかかっている。そちらの鍵も探さなければ杖を地下室から出すことはできないという事実に気付いたのだ。

肩を落しながら格子をすり抜け、今度は階段を使って上まで戻る。礼拝堂の奥の祭壇の陰にある隠し扉から出でてくると、先程まで誰もいなかつた礼拝堂の内部に人の姿を見つけた。

その人物は壁画の前に佇み、手を取り合い見つめ合ひ男女の絵を見上げている。

どこか遠い目をしたその精悍な横顔を見て、志穂はふと彼が思つたよりも若いのではないかと気付いた。ロイはおっさんと呼んでいたし、蓄えた鬚髭は立派だが、それをなくせば、一九歳で死んだといいうジエフと大して変わらない年頃にも見える。

志穂が彼に声をかけるよりも前に、彼の方が志穂に気付いて振り返つた。

「……そなた、地下にいたのか？」

怪訝そうに問われる。

影のことについて少し教えてくれたこの騎士の男性なら、先程見たあれのことも何か知っているかもしね。そう思い、志穂が地下の祭壇で蛇のような影を見たことを伝えると、彼は険しい顔になつた。

「……その祭壇は、この城においてもつとも古き井戸を封じたもの。

我らのような死者にとつては、人を食らう大蛇の「」ときもの……。

城内を彷徨う怨念の影らの巣穴、あるいは母体だ

兜の陰から覗く青い目が、鋭く志穂を見据えた。

「迂闊に近寄れば、喰われる。そして奴らの一部と成り果てるだろ
う。一度と近付かぬ方が良い」

志穂は首を横に振った。

「……私、杖を探さなくちゃいけないんです。私の依り代で……あ
る人の大切な物なんです」

だから箱の中身を確かめたかったのだと、そう言つと、騎士は少
し考えてから重々しく言つた。

「確かに、この礼拝堂には最近人が訪れた形跡があるようだが」

「なら、やつぱり……」

「しかしその箱は、元々、ギイ・ユオルがかつて挑んだ竜の鱗を收
めているものだ。古井戸と共に封印されていると言つてもいい。そ
の箱をみだりに開け、中に別の物を入れるなど……」

予想もしなかつた言葉に、志穂は目を見開いた。

「竜つて……本当にいるんですか？」

「かつては、いた」

騎士は、ラダと同じように過去形で言つた。

「……この目で見たことも一度ある。一度は肉体を通し、一度目は
魂を通して。もう遙かに遠い昔……アーフェルという国が生まれた
ばかりの頃のことだ」

ますます驚いて騎士を見つめる。

アーフェルの建国が正確にいつのことかは知らないが、少なくとも
何百年も前の昔だろう。

ジエフは十七年、二九歳の見た目今まで 水煙亭 にいた。な
ら、彼と同じ年頃に見えるこの騎士は、一体いつから死靈として存
在しているのだろう。

「でも、今はもういない……ってこと、ですよね」

「……異国の娘、そなたは竜を求める者か？」

静かな口調で問われ、志穂はまた首を振った。

「私は、竜のことはよく知りません。……ただ、私の知っている人は、探しているようなんですね」

竜を。

あるいは、死者を沖つ国へと運ぶ竜の船という存在を。それを聞いた騎士はしばらく自身の記憶を探るように顎鬚に手をやっていたが、やがて、

「……以前にも、竜という存在を探し求める者を見たことがある」と、低い声で言つ。そして、さらに志穂をはつとさせる言葉を続けた。

「彼は死の民と呼ばれていた。……死靈を操る力を持ち、かつてはアーフェルの西の海岸に暮らしていたといふ、古い民の末裔だつた

「え……その人は……」

「死靈を操り、罪なき民を害したと謂われなき罪を着せられ、この城で処刑された」

今から数十年前のことだ、と騎士は付け加える。

それほど昔の話なら、ラダと直接関係があるわけではないのだろう。

だがあの老婆はラダを死の民の生き残りと呼び、ラダはその言葉に激怒していた。

(同じ一族……同じ、目的……？先祖代々の悲願だとか？でも、それなら……)

志穂は背筋が寒くなるような思いを覚えた。ラダの同族がかつて死靈を操った罪で処刑されたなら、死靈術士であるラダもまた、罪を着せられてもおかしくない身の上である、ということではないだろうか。

ラダが人に無愛想な態度を取る理由が、少しだけ見えたような気がした。

志穂と共にいた時、あれほど人目を気にしていたことも。

リステスがあれほど奇矯な言動を取つても、表立つては誰も何も言わないのは、きっと彼が王子という高い身分にあるからだ。その彼ですら陰口を叩かれるのに、ましてやラダは流浪の死靈術士だ。思わずうつむいて考え込んでしまった志穂に対し、騎士は幾分柔らかな声で話題を戻した。

「……娘。こここの地下室と箱の鍵は、代々の城主、つまり聖ユオル騎士団の長だけが持つことを許されているはずだ。もし箱にそなたの依り代が隠されているなら、まずは鍵入手する手段を考えるべきだろう。無論、かの王子と話し合う手もあるしが」

薄々気付いてはいたが、志穂は内心でため息をつかずにはいられなかつた。

例えあの箱の中に杖が隠されているのだとしても、鍵がなければ開けられない。それに箱から杖を取り出せても、地下室と階段の間には鉄格子がある。結局、どうあっても、またリステスの傍へ行かなくてはならないのだ。見つけてごらんと言いたげに笑つていたりステスが、大人しく鍵を渡してくれるものか。

だが、いつまでも怖じけていても仕方がない。

「分かりました。ありがとうございます」

とりあえず志穂はそう言い、騎士に頭を下げた。

騎士は頷くと、用は済んだとばかりに以前のようにさつと踵を返して去ろうとしたようだが、ふと振り向いてこう訊ねた。

「……そなた、自力でこここの地下室を見つけ出したのか？」

「え？ いえ……ロイという人に教えてもらつたんです」

少女の答えは、騎士にとつて何か気に入らないものであつたらしい。

彼は眉間に皺を寄せると、頭を振つた。

「……あの者の言つことには、あまり耳を傾けない方がいい
端的にそう言い残して、騎士は今度こそ去つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1350x/>

沖つ国と竜の船

2011年11月20日03時10分発行